

(財)大阪府文化財調査研究センター報告書 第17集

堺市所在

浜 寺 元 町 遺 跡

— 都市計画道路常盤浜寺線改良工事に伴う発掘調査報告書 —

1996年

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

序 文

(財)大阪府埋蔵文化財協会と(財)大阪文化財センターが統合し(財)大阪府文化財調査研究センターが発足し早や2年目も半ばを過ぎました。浜寺元町遺跡の調査は旧協会が第1次調査を開始し、調査中に旧センターとの統合がなされた後も、継続して調査が行われてきました。第2次調査は新センターのもと調査が行われています。本書は統合時に調査された遺跡の発掘調査報告書の一つで、新組織名で発行されてきた報告書の内の一冊であります。

浜寺元町遺跡は堺市に所在する弥生時代前期の遺跡の一つであります。今回の調査は府道常盤浜寺線の拡幅工事にあたり、事前の試掘調査を経て実施されたものであります。この遺跡につきましては従来より弥生時代の遺跡として周知されてきた遺跡であります。現地調査はほぼ東から西方向に横断する形で伸びる現道路の南北両側に調査区を設けて調査を実施しています。地形的には東側の通称三光台地と呼ばれる台地の段丘縁辺部から西の海側に向けて調査区を設置する形となっています。

調査の結果、弥生時代や古墳時代の遺構・遺物の出土を見えています。この遺跡を語るには三光台地上を中心とする集落遺跡である四ッ池遺跡と切り離して考えることはできません。四ッ池遺跡は縄文時代から続く複合遺跡として周知されている遺跡で、石津川流域の中心的な集落遺跡であります。弥生時代前期に台地上に出現した集落は中期には石津川を遡上し、中流域に準母村的な集落群を出現させることが知られています。その母村としての性格をもつ拠点集落です。石津川流域の弥生集落の消長を語る上でも欠かすことのできない集落でもあります。

浜寺元町遺跡の弥生集落は砂堆上に営まれた小規模な集落が想定されており、四ッ池集落群の一集落としての性格付けが従来より成されてきました。今回の調査では住居跡の検出はありませんが、出土土器から従来の指摘どおり弥生前期古段階にまで遡らないことが確認され、新段階以降の弥生時代の遺跡であることが確認されました。また後期の遺物の確かな出土はなく、古墳時代までの遺構・遺物の出土がないことから、従来の指摘どおり遺跡の断絶が確認されました。今後集落跡の確認と生産基盤の中心となる稲作可耕地の確認が望まれます。

最後になりますが、調査にあたり大阪府教育委員会ならびに大阪府鳳土土木事務所ほか関係各位のご指導・ご協力に感謝の意を表しますとともに、今後ともご理解ご協力をお願い申し上げます。

平成8年11月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター
理事長 坪井 清足

例 言

1. 本書は堺市浜寺元町・浜寺船尾西に所在する都市計画道路常盤浜寺線改良工事に伴う浜寺元町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府鳳土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと（財）大阪府文化財調査研究センター（統合前の平成6年度は財団法人大阪府埋蔵文化財協会）が実施した。
3. 現地調査は南部調査事務所調査第1係長 大野 薫，同技師 中川 義郎（阪南市）を担当者として、平成7年（1995）～8年にかけて、二次に分けて実施した。調査期間等は次のごとくである。
その1 調査期間 平成7年3月16日～7月20日
調査地区 1・2区（現地呼称Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区）
その2 調査期間 平成7年8月1日～平成8年3月25日
調査地区 3～10区（現地呼称1～8区）
4. 調査に際し大阪府教育委員会・大阪府鳳土木事務所・（株）木村土建・堺土建（株）ほか地元関係各位に御協力頂いた。深く感謝の意を表します。
5. 航空写真測量は拓植建設計画（株）に委託し、発掘調査に伴う微化石分析（花粉分析・珪藻分析）は川崎地質（株）に委託した。
6. 本書の執筆・編集は南部調査事務所整理係 技師 仁木 昭夫が行った。遺物整理にあたっては南部調査事務所補助員各位の協力を得た。遺物実測は北岡 敏子（旧姓大田原）・高橋 由利子・浅木 薫・壬生 省吾が担当し、遺構・遺物のトレースを金子 映児・竹田 博美・山尾 温子・渡邊 みどりが担当した。
7. 調査区全景および遺構の写真撮影は調査担当者が行い、遺物写真撮影は南部調査事務所主任技師 立花 正治が行った。
8. 報告書作成にあたっては駒井 正明・西村 歩 両氏のご教授を得た。記して感謝申し上げる。
9. 調査原因およびスライド等の写真は南部調査事務所にて保管している。広く活用願いたい。

凡 例

1. 本書掲載の遺構図中の方位は国土地産第VI系の座標北を使用し、X・Yの座標値も併せて記している。標高は全てT.P. (m) で表示した。
2. 連続する調査区を一つの単位とし1から10の地区名を付し、長い調査区は調査時の単位でAからDの枝番号を付した。遺構番号は報告書整理にあたって各地区ごとに第1面から新番号を付した。旧番号との対照は新旧遺構番号対照表を参照願いたい。
3. 本書で使用した遺構記号は次のとおりである。
井戸:OW 溝:OS 土坑:OO 畦:OZ 掘立柱建物:OB 柱穴:OP 竪穴住居:OD 自然流路:OR
4. 遺物は各地区ごとに掲載し、1区から遺物番号を付している。石器・金属器については各調査区より抽出し一項目を設けて記述した。挿図遺物番号と図版遺物番号は一致する。
5. 土壌の色調については「新版標準土色帖」1988年版を使用した。
（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）

新旧遺構番号対照表

旧番号		新番号		旧番号		新番号	
地区	遺構	地区	遺構	地区	遺構	地区	遺構
Ⅲ	溝86	2	2-1-OS	3D	土坑43	5D	5D-6-OO
Ⅱ	溝21	2	2-2-OS	3D	土坑42	5D	5D-7-OO
Ⅱ	溝7	2	2-3-OS	3D	土坑1385	5D	5D-8-OO
Ⅱ	溝12	2	2-4-OS	3D	溝1394	5D	5D-9-OS
Ⅲ	土坑17	2	2-5-OO	3D	井戸7	5D	5D-10-OW
Ⅲ	溝188・189	2	2-6-OS	3D	井戸6	5D	5D-11-OW
1	溝363	3	3-1-OS	4	溝799	6	6-1-OS
1	土坑23	3	3-2-OO	4	溝1068	6	6-2-OS
1	土坑24	3	3-3-OO	4	溝1069	6	6-3-OS
1	土坑25	3	3-4-OO	4	溝1070	6	6-4-OS
1	土坑26	3	3-5-OO	4	柱穴133	6	6-5-OP
1	畦1	3	3-6-OZ	4	柱穴101	6	6-6-OP
1	溝616	3	3-7-OS	4	柱穴100	6	6-7-OP
1	溝669	3	3-8-OS	4	柱穴139	6	6-8-OP
2	溝205	4	4-1-OS	4	柱穴134	6	6-9-OP
3A	溝418	5A	5A-1-OS	4	柱穴137	6	6-10-OP
3A	土坑19	5A	5A-2-OW	4	掘立柱建物	6	6-11-OB
3A	溝454・457	5A	5A-3-OS	4	溝1079	6	6-12-OS
3A	溝617	5A	5A-4-OS	4	土坑35	6	6-13-OO
3A	溝667	5A	5A-5-OS	4	溝1095	6	6-14-OS
3A	溝666	5A	5A-6-OS	5	掘立柱建物	7	7-1-OB
3B	溝1320	5B	5B-1-OS	5	溝1087	7	7-2-OS
3B	溝1314	5B	5B-2-OS	6	溝883	8	8-1-OS
3B	溝1393	5B	5B-3-OS	6	溝1080	8	8-2-OS
3B	溝1387	5B	5B-4-OS	6	溝1092	8	8-3-OS
3B	住居址1-OD	5B	5B-5-OD	6	溝1091	8	8-4-OS
3B	土坑51-OO	5B	5B-6-OO	6	溝1392	8	8-5-OS
3B	溝1389	5B	5B-7-OS	7	溝1073	9	9-1-OS
3C	溝1387	5C	5C-1-OS	8	溝665	10	10-1-OS
3D	溝1299	5D	5D-1-OS	8	溝784	10	10-2-OS
3D	溝1292	5D	5D-2-OS	8	溝804	10	10-3-OS
3D	溝1383	5D	5D-3-OS	8	溝1072	10	10-4-OS
3D	溝1309	5D	5D-4-OS	8	溝1075	10	10-5-OS
3D	土坑37	5D	5D-5-OO				

※旧番号は調査時の番号を記した。

本文目次

序文	
例言	
凡例	
新旧遺構番号対照表	
第1章 はじめに	1
第2章 地理的・歴史的環境	3
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3章 調査の成果	9
第1節 層序と遺構面	
第2節 各地区の調査	
第1項 1区	
第2項 2区	
第3項 3区	
第4項 4区	
第5項 5区	
第6項 6区	
第7項 7区	
第8項 8区	
第9項 9区	
第10項 10区	
第11項 石器・金属製品	
第4章 まとめ	65

挿図目次

第1図 浜中元町遺跡周辺地形図 (1/6000)	第21図 4区遺構配置図 (1/300)
第2図 調査区配置図 (1/2000)	第22図 4区調査区断面図 (1/100)
第3図 地形分類図 (1/37500)	第23図 4区包含層・遺構出土遺物 (1/4)
第4図 周辺遺跡分布図 (1/37500)	第24図 S A区遺構配置図 (1/300)
第5図 石津川流域の主要弥生遺跡分布図 (1/50000)	第25図 S A区調査区断面図 (1/100)
第6図 各調査区柱状図	第26図 S A区 S A-2-OW平面・断面図 (1/40)
第7図 1区遺構配置図 (1/300)	第27図 S B区遺構配置図・調査区断面図 (1/300・1/100)
第8図 1区調査区断面図 (1/100)	第28図 S B区 S B-5-OD平面・断面図 (1/40)
第9図 1区包含層出土遺物 (1/4)	第29図 S B区 S B-6-OO平面・断面図 (1/40)
第10図 2区遺構配置図 (1/300)	第30図 S C・D区遺構配置図・調査区断面図 (1/300・1/100)
第11図 2区調査区断面図 (1/100)	第31図 S区遺構断面図 (1/40)
第12図 2区2-6-O S平面図、護岸状列見透し断面図 (1/40・1/80)	第32図 S区包含層出土遺物 (1/1・1/4)
第13図 2区2-5-O O、2-6-O S断面図 (1/50)	第33図 S区遺構出土遺物 (1/4)
第14図 2区包含層出土遺物 (1/4)	第34図 S区遺構出土遺物 (1/4)
第15図 2区遺構出土遺物 (1/4)	第35図 6区遺構配置図 (1/300)
第16図 3区遺構配置図 (1/300)	第36図 6区調査区断面図 (1/100)
第17図 3区調査区断面図 (1/100)	第37図 6区6-11-O B平面・断面図 (1/80)
第18図 3区3-1-O S、3-2-O O、3-4-O O、3-5-O O、 3-6-O O断面図 (1/40)	第38図 6区6-1-O S、6-2-O S、6-3-O S、6-12-O S、 6-13-O O、6-14-O S断面図 (1/40)
第19図 3区包含層出土遺物 (1/4)	第39図 6区包含層・遺構出土遺物 (1/4)
第20図 3区遺構出土遺物 (1/4・1/8)	第40図 7区遺構配置図 (1/300)

第41図	7区調査区断面図 (1/100)
第42図	7区7-1-O-B平面・断面図 (1/80)
第43図	7区包合層出土遺物 (1/4)
第44図	8区遺構配置図 (1/300)
第45図	8区調査区断面図 (1/100)
第46図	8区8-2-O-S, 8-3-O-S, 8-4-O-S, 8-5-O-S 断面図 (1/40)
第47区	8区包合層・遺構出土遺物 (1/1・1/4)
第48図	8区包合層・遺構出土遺物 (1/4)
第49図	9区遺構配置図 (1/300)
第50図	9区調査区断面図 (1/100)

第51図	9区包合層・遺構出土遺物 (1/4)
第52図	10区遺構配置図 (1/300)
第53図	10区調査区断面図 (1/100)
第54図	10区10-1-O-S, 10-2-O-S, 10-3-O-S, 10-4-O-S 断面図 (1/40)
第55図	10区包合層・遺構出土遺物 (1/4)
第56図	石器・金属製品 (1) (2/3)
第57図	石器 (2) (2/3)
第58図	石器 (3) (2/3)
第59図	石器 (4) (2/3・1/3)
第60図	石器 (5) (1/2)

表 目 次

第1表 各調査区遺構編時代別対照表

図 版 目 次

図版1	(上) : 2区跡遺景 (東から) (下) : 2区跡遺景 (西から)
図版2	(上) : 1区第1面全景 (北東から) (下) : 1区第2面全景航空写真
図版3	(上左) : 2区東半部第1面全景 (西から) (下左) : 2区西半部第1面全景 (東から) (上右) : 2区東半部第2面全景 (西から) (下右) : 2区西半部第2面全景 (東から)
図版4	(中) : 2区2-6-O-S全景 (東から) (下左上) : 2区2-6-O-S内遺物出土状況 (南から) (下左下) : 2区2-6-O-S内溝岸状列断面図 (下右上) : 2区2-5-O-S全景 (南から) (下右) : 2区噴砂断面
図版5	(上左) : 2区第1面全景 (東から) (上中) : 2区第4面全景 (東から) (上右) : 2区第5面全景 (東から) (中左) : 2区第3面南端部遺構検出状況 (東から) (中右) : 2区第3面南端部遺構検出状況 (北から) (下左) : 2区第6面全景航空写真 (下中) : 2区第6面3-8-O-S内遺物出土状況 (下右) : 2区南壁西端部土層断面
図版6	(上左) : 2区第3面全景航空写真 (上右) : 2区第2面全景 (東から) (下左) : 2区第3面全景 (東から) (下右) : 2区第4面全景 (東から)
図版7	(左) : 2区第5面全景航空写真 (右) : 2区第2面全景 (西から) (下右) : 2区第3面全景 (西から)
図版8	(左) : 2区第4面全景航空写真 (上右) : 2区第2面全景航空写真 (下右) : 2区第2面全景 (東から)
図版9	(上左) : 2区第3面全景 (東から) (上右) : 2区第4面全景航空写真 (中左) : 2区B-3-O-S断面 (北から) (下左) : 2区A区A-2-O-W全景 (北から) (中右) : 2区C区C-1-O-S断面 (B区から) (下右) : 2区C区C-1-O-S内遺物出土状況 (B区から)
図版10	(上) : 2区B区B-5-O-D全景 (南から) (中左) : 2区B区B-5-O-D内遺物出土状況 (南から) (中右) : 2区B区B-6-O-O内遺物出土状況 (南から) (下) : 2区B区B-6-O-O全景 (南から)
図版11	(上左) : 2区第2面全景 (西から) (上右) : 2区第3面全景航空写真 (下左) : 2区第4面全景航空写真 (下右) : 2区第5面全景 (西から)
図版12	(上) : 2区6-12-O-S断面 (上左) : 2区6-9-O-P内根石検出状況 (上右) : 2区6-7-O-P内遺物出土状況 (中左) : 2区6-13-O-S全景 (中右) : 2区6-14-O-S断面 (下左) : 2区6-13-O-S断面 (下右) : 最終面噴砂断面
図版13	(上左) : 7区第2面全景 (東から) (下左) : 7区第3面東部全景 (東から) (右) : 7区第4面全景航空写真
図版14	(上左) : 8区第3面全景 (東から) (下左) : 8区第5面全景 (東から) (右) : 8区第2面全景航空写真 (左) : 8区第5面全景航空写真 (右1) : 8区B区8日-4-O-S断面 (西から) (右2) : 8区B区8日-3-O-S断面 (西から) (右3) : 8区B区8日-3-O-S内遺物出土状況 (東から) (右4) : 8区A区8A-5-O-S断面 (東から) (右5) : 8区A区第6面8A-6-O-P内遺物出土状況 (南から)
図版15	(左) : 8区第6面8A-6-O-P内遺物出土状況 (南から) (上左) : 9区第1面全景 (東から) (上右) : 9区第2面全景 (東から) (下左) : 9区第3面全景 (東から) (下右) : 9区第4面全景航空写真
図版16	(上左) : 9区第1面全景 (東から) (上右) : 9区第2面全景 (東から) (下左) : 9区第3面全景 (東から) (下右) : 9区第4面全景航空写真
図版17	(上左) : 10区第1面全景 (東から) (上右) : 10区第2面全景 (東から) (下左) : 10区第3面全景 (東から) (下右) : 10区第4面全景航空写真
図版18	(上左) : 10区第5面全景 (東から) (上右) : 10区第5面南西隅部跡も込み断面 (北から) (下左) : 10区10-2-O-S全景および断面 (西から) (下右上) : 10区10-4-O-S断面 (西から) (下右中) : 10区10-4-O-S内遺物出土状況 (下右下) : 10区10-4-O-S内遺物出土状況
図版19	遺物 : 1区・2区
図版20	遺物 : 2区
図版21	遺物 : 2区
図版22	遺物 : 2区・3区
図版23	遺物 : 3区
図版24	遺物 : 3区
図版25	遺物 : 3区
図版26	遺物 : 3区・4区
図版27	遺物 : 4区
図版28	遺物 : 5区
図版29	遺物 : 5区
図版30	遺物 : 5区
図版31	遺物 : 5区
図版32	遺物 : 5区・6区
図版33	遺物 : 5区・6区
図版34	遺物 : 6区・7区・8区
図版35	遺物 : 8区
図版36	遺物 : 8区
図版37	遺物 : 8区・9区
図版38	遺物 : 10区
図版39	遺物 : 10区
図版40	遺物 : 石器・金属製品
図版41	遺物 : 石器
図版42	遺物 : 石器
図版43	遺物 : 石器・木製品

第1章 はじめに

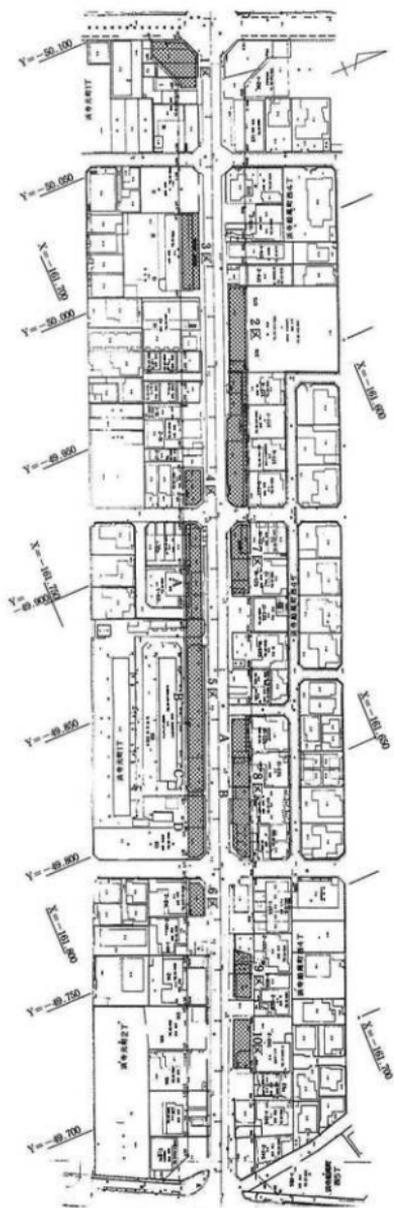
堺市西部域を横断する都市計画道路常盤浜寺線には多くの遺跡が立地している。とりわけ通称三光台地と呼ばれる台地上および周辺の沖積平野上に多くの遺跡が集中する。浜寺元町遺跡はこの台地の東側の砂堆上に立地している。1993年には府道大阪和泉泉南線の下田町交差点から石津川迄の同路線の延伸工事に先立つ「下田遺跡」の調査で、弥生時代末から古墳時代はじめにかけての竪穴住居跡や最大幅35mをはかる河川が検出され、その埋没の過程で形成された溝内からは最古相の布留式土器や威儀具・武具・祭具などの木製品が出土し、いずれも優品であることから集落の優位性が指摘されている。河川や溝からは弥生後期後半から布留式期にいたる地域の土器の変遷を考察し得る一括資料が得られている。また埋納状態の銅鐸も出土し祭祀行為や石津川流域の祭祀圏の考察にも一石を投じている。

同路線の改良工事に伴い1993年度には大阪府教育委員会が試掘調査を行った。その結果調査が行なわれることとなる。1994年度には(財)大阪府埋蔵文化財協会が調査を行い、1995年度には(財)大阪文化財センターと統合後名称を(財)大阪府文化財調査研究センターと改めて調査を継続している。

調査の方法は良好な遺構面が遺存すると考えられる部分に幅約7mのトレンチを設定して行った。このため連続する調査区とはならず、各トレンチごとの遺構面の遺存状況もあり、遺構面の面数など不整合が生じている。調査実施にあたっては進入道の確保や作業の安全などを考慮し、調査該当地を一度に調査せず、多いところでは4回に分けて調査を実施した。整理にあたっては基本的に連続する調査地区には1つの地区名を与え、遺構面などででき得るかぎり整合性をもたせた。また長い調査区にはアルファベット記号を与え区別している。結果として1~10区の調査区になっている。



第1図 浜寺元町遺跡周辺地形図 (1/6000)



第2図 調査区配置図 (1/2000)

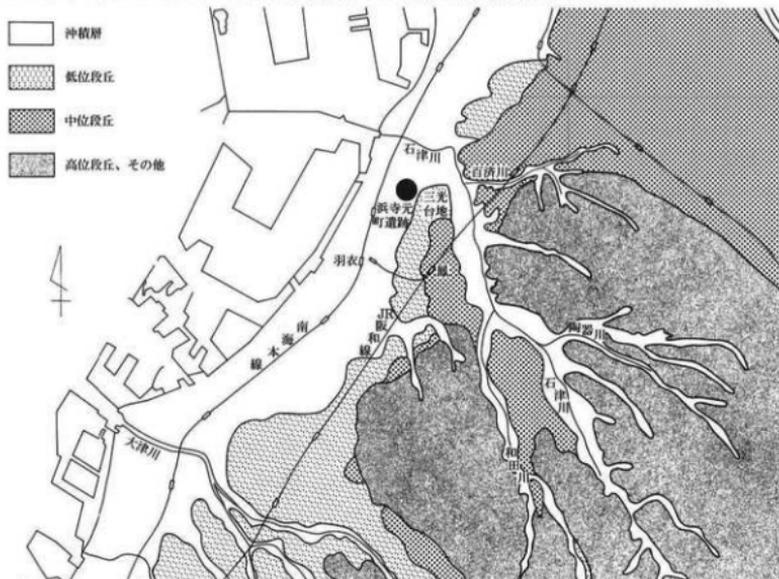
第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

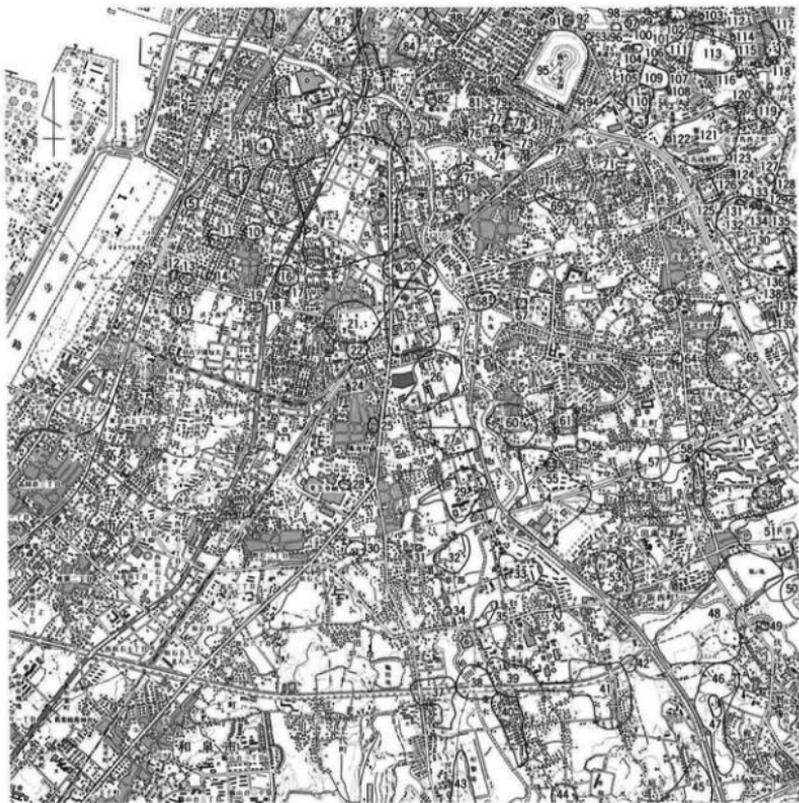
大阪府の西南部に位置する和泉地域は南に和泉山脈を挟んで紀北地域と接する。東側では同山脈から派生する丘陵・山地を挟んで河内地域と接する。北側は現堺市内の大小路道を挟んで摂津地域と接し、北東側は大阪湾に面している。

和泉山脈は洪積世の中ごろに大阪層群が地盤変動により持ち上げられ形成されたと考えられている。以後地盤の隆起運動と海進・海退の作用により丘陵外縁に台地を形成したと考えられ、大阪湾に向かって階段状に比高を下げる地形が形成されたと考えられている。山地は稜線を描く主峰部山地と一段低い前山山地からなり、丘陵部がその先端に取りつき高位から低位の段丘を形成している。河川は隆起と海退により勾配を増し、地盤運動に流路を規制されつつも概ね山間部とほぼ垂直方向に向き、山地丘陵を開析しながら大阪湾へ流れこむ。開析された谷底には沖積低地が形成されている。

堺市旧市街南側を貫流する堺市最大の河川である石津川は東北丘陵東端の鉢ヶ峰に源を発する。丘陵を開析し蛇行を繰り返して流れ、途中東から西方向に丘陵を開析し流れる小河川の陶器川と合流し、北西方向に下ったのちほぼ南から北方向に丘陵を開析し蛇行しながら流れる和田川と合流する。さらに下流域に下ったのち東から西方向に流れる百済川と合流し、流路を徐々に西に変え大阪湾へといたる。石津川が開析した沖積低地上には蛇行の跡と自然堤防と呼ばれる微高地地形が発達し、海浜部には砂堆も発達している。付近の通称三光台地と呼ばれる台地の突端部および沖積低地上には集落遺跡として著名な「四ヶ池遺跡」が立地しており、浜寺元町遺跡はこの遺跡の海浜部側の砂堆上に立地している。



第3図 地形分類図 (1/37500)



- | | | | | |
|---------------|------------|--------------|---------------|----------------|
| 1. 船尾西遺跡 | 29. 上遺跡 | 57. 八田北町遺跡 | 85. 神石小学校前遺跡 | 113. 文山古墳 |
| 2. 浜寺船尾北遺跡 | 30. 原田遺跡 | 58. 堀上町遺跡 | 86. 石津寺神社遺跡 | 114. 万代山古墳 |
| 3. 神石市之町遺跡 | 31. 日部神社本殿 | 59. 宮園町東遺跡 | 87. 浜寺石津町東遺跡 | 115. カトノボ山古墳 |
| 4. 浜寺調訪森東2丁遺跡 | 32. 草部遺跡 | 60. 毛穴遺跡 | 88. 堀次寺跡 | 116. 百舌島赤塚町1号墳 |
| 5. 浜寺黄金山遺跡 | 33. 万崎遺跡 | 61. 華林寺跡 | 89. 西酒古墳 | 117. 百舌島赤塚遺跡 |
| 6. 浜寺調訪森遺跡 | 34. 御山古墳 | 62. 坊主山古墳 | 90. 東酒古墳 | 118. 瀬守山塚古墳 |
| 7. 浜寺元町遺跡 | 35. 草部南遺跡 | 63. 堀上北遺跡 | 91. 七観山古墳 | 119. 百舌島御町遺跡 |
| 8. 四ヶ池遺跡 | 36. 万田遺跡 | 64. 観音山古墳 | 92. 七観古墳 | 120. 城ノ山古墳 |
| 9. 高月1号墳 | 37. 鶴田池東遺跡 | 65. 深井清水町八遺跡 | 93. 寺山南山古墳 | 121. 百舌島陵南遺跡 |
| 10. 浜寺北浜神社遺跡 | 38. 西浦橋遺跡 | 66. 深井中町遺跡 | 94. 狐塚古墳 | 122. 赤山古墳 |
| 11. 浜寺昭和町遺跡 | 39. 栗木下遺跡 | 67. 家原寺 | 95. ミサンザイ古墳 | 123. 湯の山古墳 |
| 12. 浜寺公園駅遺跡 | 40. 栗木遺跡 | 68. 家原城跡 | 96. 旗塚古墳 | 124. 百舌島陵南2丁遺跡 |
| 13. 浜寺電話局前遺跡 | 41. 万崎池遺跡 | 69. 神野町遺跡 | 97. グワシウ坊古墳 | 125. 百舌島陵南庵寺 |
| 14. 浜寺昭和町砂丘遺跡 | 42. 太平寺遺跡 | 70. 黄金山塚古墳 | 98. 茂右衛門山古墳 | 126. 飛鳥山古墳 |
| 15. 日明山遺跡 | 43. 山田北遺跡 | 71. 文殊塚古墳 | 99. 高塚古墳 | 127. こじ山古墳 |
| 16. 下村遺跡 | 44. 栗木上遺跡 | 72. 上野芝駅前遺跡 | 100. 長塚古墳 | 128. ニサンザイ古墳 |
| 17. 塔塚古墳 | 45. 大庭寺遺跡 | 73. 亀塚古墳 | 101. 原山古墳 | 129. 舞台塚古墳 |
| 18. 赤山古墳 | 46. 伏尾遺跡 | 74. 上野芝野1号墳 | 102. 狐塚古墳 | 130. 土師遺跡 |
| 19. 経塚古墳 | 47. 大代古墳群 | 75. 宮下遺跡 | 103. 八幡塚古墳 | 131. 平井塚古墳 |
| 20. 下田遺跡 | 48. 小阪遺跡 | 76. 上野芝野2号墳 | 104. 鏡塚古墳 | 132. 正美寺山古墳 |
| 21. 大島神社遺跡 | 49. 閉宿落陣屋跡 | 77. かぶと塚古墳 | 105. 東上野芝町1号墳 | 133. ドンチャン山1号墳 |
| 22. 風塚遺跡 | 50. 平井南遺跡 | 78. 大塚山古墳 | 106. 幡野塚古墳 | 134. ドンチャン山2号墳 |
| 23. 鶴田町遺跡 | 51. 平井遺跡 | 79. 経塚古墳 | 107. 吾呂茂塚古墳 | 135. 文山古墳 |
| 24. 風塚前遺跡 | 52. 東八田遺跡 | 80. 旗塚古墳 | 108. 香石エ門山古墳 | 136. 土師戦国庵寺 |
| 25. 長承寺遺跡 | 53. 八田西町遺跡 | 81. 南院遺跡 | 109. いたすけ古墳 | 137. 土師南遺跡 |
| 26. 風東町遺跡 | 54. 鈴の宮遺跡 | 82. 堀ヶ丘遺跡 | 110. 東上野芝遺跡 | 138. 七郎塚古墳 |
| 27. 毛穴西遺跡 | 55. 仏光寺跡 | 83. 石跡遺跡 | 111. 百舌島本町遺跡 | 139. 深井水池遺跡 |
| 28. 風南町遺跡 | 56. 峠田神社遺跡 | 84. 乳岡古墳 | 112. 一本松塚古墳 | |

第4図 周辺遺跡分布図(1/37500)

第2節 歴史的環境

堺市最大の河川である石津川流域には数多くの遺跡が分布している。流域に立地する遺跡の多くは氾濫原と沖積段丘上や洪積段丘上に展開する。とりわけ多くの遺跡は沖積平野上の微高地地形上に立地する。石津川流域を中心に各時代ごとの遺跡の概要を見てみる。

旧石器時代

旧石器時代の様相はあまり明確ではない。石津川左岸の沖積平野上に立地する万崎池遺跡ではナイフ型石器が検出されている⁽¹⁾。和田川上流部右岸に立地する野々井遺跡ではチャート製の有舌尖頭器やルヴァロア型の石核を検出しており、素材的にも年代的にも貴重な資料である⁽²⁾。石津川と和田川との合流点付近の左岸に立地する鈴の宮遺跡では国府型ナイフなどのナイフ型石器や有舌尖頭器などが出土している。現在まで遺構を伴った事例はないが、旧石器出土の事例は今後も増加すると考えられる。

縄文時代

縄文時代には石津川下流域左岸の台地突端部周辺に位置する四ヶ池遺跡で後期中葉から晩期末までの遺物の出土を見ている。晩期末の深鉢型土器底部に靱圧痕が確認されている⁽³⁾。石津川右岸に立地する石津遺跡では後期後半の波状口縁をもつ深鉢型土器を検出している⁽⁴⁾。和田川との合流部上流の沖積段丘上に立地する万崎遺跡では晩期末の土器が出土し、上流域左岸の沖積地に立地する太平寺遺跡では後期から晩期に属する土器のほか早期の土器の出土が確認されている⁽⁵⁾。和田川上流域の沖積段丘と中位段丘上に立地する西浦橋遺跡では後期末と考えられる土器片や晩期末の深鉢型土器を検出している⁽⁶⁾。石津川から陶器川にかけての沖積段丘から中位段丘にかけて立地する小坂遺跡では早期、前期の土器片が確認され、中期には遺構を伴う土器の出土が見られる⁽⁷⁾。

和泉地域の縄文時代遺跡は中期以前の段階では遺構を伴わない事例が多い。以降後期を前後して検出事例の増加を見る。このことは遺跡の立地条件の多様化を示すのみならず、縄文社会の拡大を端的に示していると考えよう。とくに小坂遺跡のごとく沖積低地上にも出現することを考えれば、下田遺跡の近時の調査で弥生遺構面下に存在する黒色粘土層の時期に相当する河川流路埋土中より土器片の出土を見ているので⁽⁸⁾、今後も沖積低地上の遺跡からの出土事例が増加することが予測される。

石津川流域の縄文時代遺跡としては太平寺遺跡で草期末から前期初頭の土器が出土しているので最古のものと考えよう。後期には四ヶ池⁽⁹⁾・西浦橋⁽⁶⁾・上遺跡が前葉から中葉まで存在し、後期後葉から晩期中葉までは希薄である。晩期終末期の凸帯文甕は中流域の鈴の宮遺跡と百舌島川中流域の中位段丘上に立地する陵南遺跡で出土を見ている。西浦橋遺跡対岸の鶴田池東遺跡も近い時期とされており、海浜沿いの砂堆上に立地する浜寺黄金山遺跡でも凸帯文土器が出土したとされる⁽¹⁰⁾。

弥生時代

流域の主要な弥生時代遺跡は現時点で22遺跡を数える。石津遺跡では前期・後期の遺物を検出して⁽¹¹⁾いる。霞ヶ丘遺跡は石津川右岸の低位段丘上に立地する中期から後期の遺跡である。浜寺黄金山遺跡は海浜沿いの砂堆上に立地する遺跡である。中期から後期を中心とする。

四ヶ池遺跡は三光台地上にとどまらず周辺の低地部にも集落を出現させる。中期を中心として後期には低地部への分散傾向が見られる。浜寺元町遺跡は四ヶ池遺跡の乗る台地西側の低地部に位置し、従来からの指摘どおり今回の調査でも前期新段階以降を中心とした遺物の出土を見ている⁽¹²⁾。流域の弥生集落の動態を考えれば四ヶ池集落の中流域への遡上前の台地縁辺部への分散、すなわち台地周辺部への四ヶ池集落の拡大と考えることもできる。農耕技術や土地の自然環境面での耕作の可否も含めて考えた場合、

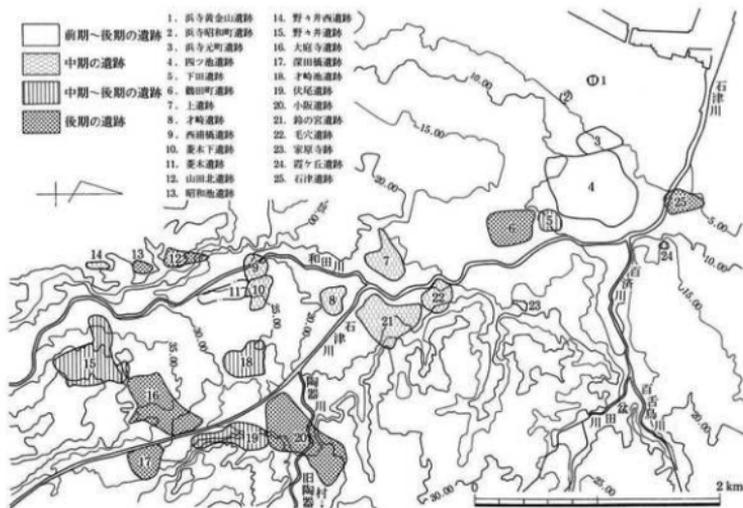
当該期は地理的な環境面で不安定な立地条件にあり、集約された農耕生産も考えにくい。四ッ池遺跡集落の統合前の集落群の有り様をしめす遺跡ではないであろうか。

下田遺跡は沖積低地上に立地する中期後半期の集落遺跡である¹⁴。旧河川ほかの出土物で見るかぎり後期前半期の遺物はなく後期後半期から再びあらわれる。現在までのところ後期前半期の住居は確認されておらず、一時期の断絶を示している。旧河川のテラス状を示す河岸から小型の内縁外縁付鈕式（扁平鈕式）4区袈裟準文銅鐸が埋納状態で出土している。埋納は後期前半期の断絶期に行なわれた可能性が高く、四ッ池集落そのものの祭祀行為に関わるのではないかと考えられている¹⁵。鶴田町遺跡は沖積段丘上に立地する後期後半からの集落遺跡である。いわゆる庄内併行期直前の土器をもつ集落で、周辺遺跡の同時期出現集落とともに石津川流域の後期集落の動態である、上流域から下流域への回帰現象としてとらえられる。

中流域の石津川と和田川との合流点付近には左岸中位段丘上に毛穴遺跡¹⁷、すぐ南側の中位段丘と沖積段丘上に鈴の宮遺跡¹⁸が立地する。対岸部の沖積段丘上に上遺跡¹⁹が立地する。また合流部の上流側の河川に挟まれた沖積段丘上に万崎遺跡²⁰が立地する。これらの遺跡はいずれも沖積段丘上に立地しており、中期に「ムラ」の成立が考えられ、中流域の集落群を形成している。

和田川のさらに上流域の中位段丘と沖積段丘上に西浦橋遺跡²¹と菱木下遺跡²²が立地する。西浦橋遺跡は前期後半から中期前半を中心とし菱木下遺跡は中期前半を中心とする。両遺跡は隣接した位置関係にあり、中心とする時期も連続することから同一の集落群と考えることもできる。

石津川左岸の中位段丘上には中期から後期の万崎遺跡²³が立地する。同河川右岸から陶器川にかけての中位段丘から沖積段丘上に後期が中心と考えられる小阪遺跡²⁴が立地する。前期から後期までの土器がまばらに見られる。高位段丘上には中期から後期の伏尾遺跡²⁵が立地する。上流部右岸の沖積段丘上には



第5図 石津川流域の主要弥生遺跡分布図（1/50000）

深田橋遺跡が立地する。対岸の中位段丘から沖積段丘上には大庭寺遺跡が立地する。

和田川上流部右岸の沖積段丘と高位段丘上には野々井遺跡が立地する。中期には沖積段丘上に集落が営まれ、後期には高位段丘上への集落の移動が見られる⁹⁶。対岸の高位段丘上には後期の山田北遺跡⁹⁷や昭和池遺跡⁹⁸また中期の野々井西（狐池南）遺跡⁹⁹が立地することから高地性集落との関わりも考えられ、とくに野々井遺跡の立地の変化は垂直的な遷移現象とも考えられる。

石津川流域での「ムラ」の成立は四ッ池遺跡が早く、中流域では鈴の宮・上・西浦橋遺跡などに「ムラ」の成立を見る。四ッ池集落の中流域への遡上は四ッ池遺跡の三集落が中期前葉段階まで存続しているので、前期段階での遡上は考えられない。中期には上流域の高位段丘や沖積段丘上にも集落の出現を見る。後期には下流域に石津・下田・鶴岡町遺跡に集落の出現をみるとともに、上流域にも小阪・深田橋・大庭寺・山田北・昭和池遺跡などが出現する。野々井遺跡の集落の移動や昭和池遺跡などの集落の在り方などは流域の変動を示唆しているものと云えよう。

古墳時代

弥生時代後期から存続する遺跡の数は多い。石津遺跡・霞ヶ丘遺跡は前期にも集落が存在する。砂堆上に立地する浜寺黄金山遺跡や浜寺元町遺跡も古墳時代まで続く。四ッ池遺跡は前期にも引き続き低地部に集落が営まれる。和田川上流部の西浦橋遺跡・菱木下遺跡も古墳時代にかけての遺跡である。

土器の観察から見れば弥生土器から庄内併行期の土器をへて布留式期の土器にいたる変遷をたどることが可能な一括資料は下田遺跡で出土している。流域の弥生時代は生産域の拡大をめざした集落の遡上・拡大という動態が看取されるが、いつから古墳時代であるかという議論もあろうかと思うが、古墳時代に入り概ね流域上流部は中期に入り成興する「陶邑」との関わりを深めて行く、下流域にあっては不毛の台地である百舌鳥丘陵に古墳築造に関わった集落の展開を見る。

四ッ池遺跡周辺には高月¹⁰¹・経塚¹⁰²・赤山・塔塚の古墳が知られる。石津川流域を統轄した首長墓と考えられている。石津川河口近くの中位段丘突端に存在する乳岡古墳は4世紀末から5世紀初頭の年代が考えられ、在地首長墓系列の古墳と考えられている。生活基盤である農耕の生産性の低いいわば不毛の地と云えなくもない百舌鳥丘陵を占有する百舌鳥古墳群の中で、最初に造営された可能性が指摘されている¹⁰³。

集落では石津遺跡・船尾西遺跡¹⁰⁴・四ッ池遺跡で堅穴住居などの遺構の検出などもあり、前期の様相に良好な資料を提供している。ほか近年の調査では下田遺跡で河川の埋没課程で得られた弥生後期後半から庄内併行期をへて布留式期にいたる土器の変遷をたどり得る一括資料の出土もあり、また庄内併行期から布留式期の住居形態の変遷をたどり得る切り合いをもった住居の検出もあり、多くの成果をあげている。四ッ池遺跡周辺の集落の中でも蓋や壘尾¹⁰⁵と考えられる威儀具のほか桶形¹⁰⁶形式の木甲や朱塗の把装具などの実用武具など優品の出土や最古相にあたる布留式期の多量の土器の出土もあり、石津川下流域の要衝を押さえた拠点集落であり、後世の上流域の「陶邑」開発や百舌鳥古墳群を造営した集団勢力と、流域支配のうえで重要な位置を占める集落であったと考えられている。

歴史時代

仏教伝来以後古墳築造から寺院建立が支配者層の関心事となり有力氏族が寺院を建立し始める。やがてそれは政權中枢の庇護のもと国家宗教として開花する。和泉の地にあって有力氏族により小松里廃寺や海会寺跡・坂本寺・信太寺跡・土師廃寺・秦廃寺などが建立される。

この時期、家原寺生誕と伝えられる高僧「行基」の輩出も広く仏教の浸透に寄与するものであった。寺院建立による直接的な布教活動や溜池などの灌漑施設構築・橋梁架設などの間接的な布教活動と云え

なくもない社会的な事業活動などは民衆の知識を大いに活用し行うものであった。国家主導のものではなく、民衆の知恵を基盤としたものであり、民衆を最大の檀越としたと言い換えることもできよう。その活躍は近年泉佐野市所在の植田池遺跡³⁶の調査により確認された旧長滝墓地の「三昧」開山などの伝承として泉州域に多く残る。

和泉国国府は府中遺跡周辺部に所在していたと考えられており、山直北遺跡では遺構・遺物の様相から身分の高い人物の居住が考えられる。石跨や平城宮型式の軒平瓦が出土した浜寺石津町東遺跡は立地や出土遺物から通常の集落ではないことがうかがえる。跨帯に関する出土遺物は河合古墓・池田寺・西大路・大園の各遺跡からの出土が知られる。

ほかに奈良・平安時代の遺跡として翁遺跡・深井清水町B地点遺跡や菩提池東寺院跡などがある。土器焼成窯にともなう灰原は深井幡池遺跡で検出され、黒色土器焼成窯は四ヶ池遺跡で検出している。集落跡では金岡遺跡・机場遺跡が知られる。

律令制の崩壊の課程において生産基盤である耕作地の再編整備が行われる。その結果主体者である荘園領主や在地の有力者の経済的基盤が強固なものとなり、寺院建立が再び盛んに行われることとなる。この時期山中を修業・研学の場とした山岳仏教も盛んであり、槇尾山に見られる経塚群が作られ始める。ついで荘園領主や在地有力者が中央の支配を離れるべく武装化して行き、堀を巡らせた館などが出現する。以後中央の手を離れて支配者化した領主や在地有力者は防衛的側面から城郭へと発展させて行く。長原遺跡・津堂遺跡の区画程度の堀から、和氣遺跡の内郭・外郭を分ける堀の段階を経て、羽曳野市所在の高屋城のごとく一の丸・二の丸・三の丸の構造を持つ近世城郭へと発展して行くのである³⁸。

中世末期にあっては宗教的な結びつきから寺内町が生まれ、商業的な結びつきから自由都市として知られる「堺」が成立したが、織豊時代にあっては徹底した弾圧にあい急速に衰えて行く。

(註)

- 『小阪遺跡 一本文編一』「位置と環境」1992. 3 (財)大阪文化財センター
- 『陶邑1』大阪府文化財調査報告書第28冊 大阪府教育委員会
- 『池上・四ヶ池 1970』1970 第2版和泉国内遺跡調査会
- 1に同じ
- 『鈴の宮田』『歴史的環境』堺市文化財調査報告第11巻 1983. 3 堺市教育委員会
- 5に同じ
- 1に同じ
- 報告書未発行
- 『四ヶ池遺跡』『研究史と既往の調査』堺市文化財調査報告書第16巻 1964. 3 堺市教育委員会
- 『府道松原大津線間遺跡 発掘調査報告書1』『石津川流域の遺跡群とその立地条件』1984. 3 (財)大阪文化財センター
- 森 浩一・田中 英夫『堺市復元石津町遺跡発掘報告』『古代学研究 第9号』
- 堅田 直『堺市四ヶ池遺跡』1969. 3 堺市教育委員会
- 樋口 吉文『まとも』『四ヶ池遺跡』1978 四ヶ池遺跡調査会
- 樋口 吉文『まとも』『四ヶ池遺跡発掘調査報告書』1981 堺市教育委員会
- 池峯 龍彦『石津川流域の弥生時代集落の動向—堺市四ヶ池遺跡を中心として—』1993 関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論集
- 『下田遺跡発掘調査概要 しもだ』1990. 10 下田遺跡調査班
- 下田遺跡報告書(現在未発行)田(財)大阪府埋蔵文化財協会調査によるが、銅鐸は小型のものであり、石津川流域の集落の動態を考えれば、下流域集落の發足期にあたる。流域全般的銅鐸祭祀に付随する祭祀禮を想定するのは困難であり、四ヶ池集落の命運をかけた祭祀行為であったと考えられる。
- 内本 勝彦『舞田町遺跡の調査』『大阪府下流域文化財研究会(第29回)資料』1994. 2

- 池峯 龍彦『堺市鶴田町遺跡出土の「庄内式」直前の土器について』『庄内式土器研究Ⅱ』1995. 6 庄内式土器研究会
- 『堺市調査報告書 第51編』1995. 3 堺市教育委員会
- 下田遺跡報告書(現在未発行)銅鏡子定の発生前中期から古墳前期にかけての河道出土一括資料との比較からも庄内併行期前後とされる。
- 『鈴の宮田』堺市文化財調査報告第11巻 1983. 3 堺市教育委員会
17. 17に同じ
- 16に同じ
20. 16に同じ
21. 10に同じ
22. 10に同じ
23. 10に同じ
24. 1に同じ
- 『陶邑・伏尾遺跡 A地区』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第90編 1990
- 『野々井遺跡発掘調査(現地説明会資料2)』1989 (財)大阪府埋蔵文化財協会
- 『野々井遺跡』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第86編 1994
- 『堺市文化財調査報告書 第51編』1995. 3 堺市教育委員会
27. 27に同じ
- 『野々井西遺跡・ON231号発跡』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第86編
- 『高地性集落の研究 資料編』小野 忠則 1979. 3 学生社
- 森 浩一『和泉国高月古墳調査報告』『古代学研究 第5号』
31. 17に同じ
32. 17に同じ
- 北野 俊明・樋口 吉文『船尾西遺跡発掘調査抄報』1978 堺市教育委員会
- 報告書未発行。
- 広瀬 和雄『中世村落の形成と展開—畿内を中心とした考古学的研究—』1988. 5『物質文化 第50号』

第3章 調査の成果

第1節 層序と遺構面

当該路線の拡幅工事に伴う試掘調査の成果をうけ、路線内に配置した調査区は15ヵ所を数える。調査区は概ね東西方向に伸びる現道路約420mの範囲内両側に配置される。

1～10区に分けた調査区の内1区は最も海寄りに位置し、10区が最も通称三光台地と呼ばれる台地寄りに位置している。結果的には海浜部から台地縁辺部にかけてトレンチを入れたような調査となり、遺跡の立地する砂堆と台地との間に存在する後背湿地を開掘する形となった。台地段丘礫層は10区で確認し得たのみであった。それぞれの調査区で確認し得た基本的な層序は次のごとくである。

I層： 旧耕作土・旧床土とその上位に存在する盛土である。灰白色・黄色土系の土層で各地区に分布し、層厚0.3～0.7mをはかる。近現代の時期に該当する。

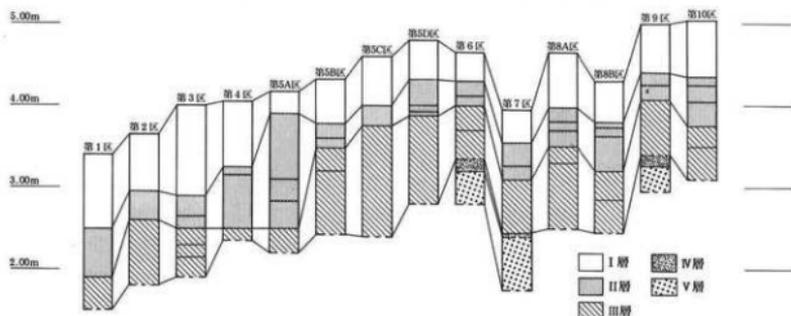
II層： 黄色・黄褐色土系の土層で各地区に分布し、層厚0.1～0.3mをはかる。中近世の耕作土に該当する。土層厚のある部分では複数の耕作面を確認し得る。基本的に水平堆積しており、層位的に見て当該時期に初めて安定した立地環境となったことを窺わせる。

III層： 灰色・黄色土系の土層で、砂および砂質土・シルト・粘土により構成される。層厚0.8m前後をはかり、时期的には古代から弥生時代に該当する。時代ごとの遺構面が連続的に確認できるのは8区のみである。全体的に古墳時代の遺構面が最も多い。弥生時代の遺物は溝・流路からの出土が殆どである。立地環境の安定は居住と生産の基本的な要素である。これらの遺物の出土状況はその不安定性を投影しているのかも知れない。

IV層： 黒色・黒褐色土系の粘質土層で全ての地区にはない。層厚0.1m前後をはかる。縄文期に形成されたと考えられるが、遺物の包含は確認されていない。

V層： IV層下位の縄文期に該当すると考えられる土層で、遺物の出土はない。海浜部の砂堆および後背湿地の堆積層である。灰白・青灰色土系の粘土とシルト土層で還元色を示すものが多い。

各層序に遺構面を加味したのが第6図の柱状図である。遺構面の大まかな時期の対照は第1表に示したが、正確に整合するものではない。詳細な時代区分は各地区の報告を参照願いたい。



第6図 各調査区柱状図

第2節 各地区の調査

各地区で確認調査し得た遺構面の時期と面数は遺構の有無や遺存度合いなどにより均一ではない。近代・現代の時期に該当する土層については除去し、下位の土層の上面から精査を行い、それぞれ上位から第1面とした。最終的に第6面が確認調査し得た最大の面数である。

近世・中世の遺構面は現地調査で中世の範疇に収めているが、整理段階での時代区分の差違もあり、5A・5B・8A・10区は各第1面を近世としている。中世段階の土層は包含する遺物の編年上の年代観から鎌倉期以前となるものもあり、古代の範疇に加えたものもある。古墳時代終末期の取り扱いについては当該面の主たる遺構の時期をもって時代区分としている。古墳時代の始まりは議論されるところであるが、先進地域での古墳築造が土器形式で云うところの庄内式期や同併行式期のある時期とされるが、ここでは布留式土器の時期を基準に区分している。また同一面に複数の時代の遺構が認められる場合、出土土器の年代観から明確な時代差が認められる顕著な遺構の存在するものについてのみ同一の面番号をそれぞれに付している。

弥生時代については明瞭な遺構は少ない。遺物は溝や流路からの出土が殆どである。出土遺物で見るとかぎり弥生土器の量は比較的多く、内容的には中期土器がその大半を占めるが、前期新段階の土器片の出土もある。土器片は中期初め頃の遺構埋土中や包含層から出土しているが、前期古段階はもとより新段階の時期の遺構の検出はない。細片が多いが明瞭に新古の判断が可能なものについては取り上げ、図示できるものについてでき得るかぎり取り上げ掲載している。また今回の調査では後期段階の遺構は検出されず、4区の攪乱土中から土器片が1点出土したのみである。

次に暗色土層であるが、その分布は各調査区全域にまたがっており、同一調査区内でも比較的安定した立地のところに存在する。地形が変わり大きく溝に挟り取られる部分には流れこみの堆積がわずかに見られる程度であった。付近の近時の調査ではこの土層堆積時期と併行関係にあると考えられている流路より縄文土器細片の出土も確認されている。また四ッ池遺跡周辺の沖積低地の調査で指摘されているように縄文時代に形成されたと考えられる。この層より下位の土層については沖積低地での縄文土器遺構の検出事例もあり、でき得るかぎり調査をしたが、今回の調査では自然流路地形の検出にとどまり遺構・遺物の検出にはいたっていない。

地区 時代	1	2	3	4	5				6	7	8		9	10	層位	〈備考〉 地区および面数以外の 数値は遺構面の番号を示 す。 Ⅱは暗色土層で調査区 で顕著に見られた地区の みを記している。 同一遺構面で時代の異 なる遺構がある場合、時 代が明確なものについて はそれぞれの時代区分に 遺構面番号を記載した。
	A	B	C	D	A	B										
近現代															I	
近世				1	1						1			1	II	
中世	1	1	1	1	2	2	1	1	1	1	2	1	1	2		
			2	2	3			2	2	2	3	2	2	3		
							3	3		4	3					
古代	-	-	3	3	4	3	-	4	3	-	5	4	-	4	III	
古墳	-	-	6		5	4	2	-	4	3	5	5	3	5		
弥生	2	2					4		4	-	4		4			
《暗色土層》									≡	≡			≡		IV	
縄文									5				5		V	
面数	2	2	6	3	5	4	2	4	5	4	6	5	5	5	層	

第1表 各調査区遺構面時代別対照表

第1項 1区

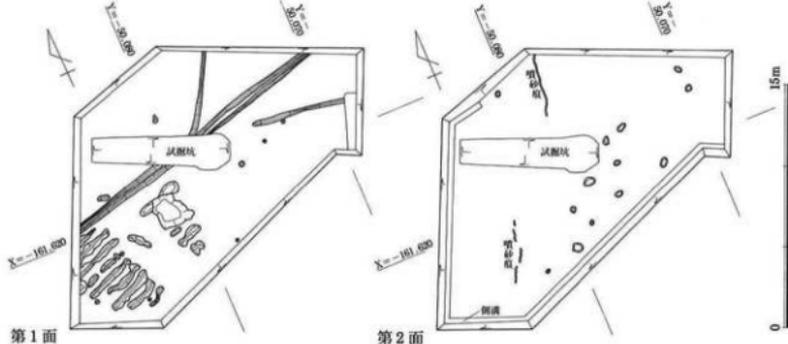
位置と層序

1区は常盤浜寺線の西北端部の南側拡張部分に位置している。調査区中最も海よりに位置している。調査区の形状は交差点部分にあたるため不整形な形状となっている。現況は更地でフェンス内一面にコンクリートが敷かれる。

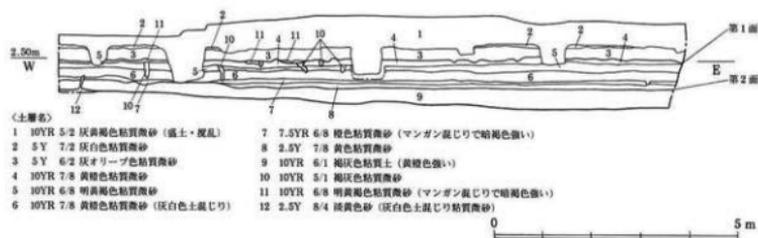
基本的な層序はコンクリート下の盛土・近現代耕作土のI層とその下の黄橙色土系の微砂からなるII層がある。II層中には複数の耕作面が認められる。第1面はI層を除去したII層上面で検出している。中世の遺構面である。第2面は安定した土層であるII層下の褐灰色粘質土上面で検出している。時期的に判然としなが弥生時代までの遺構面である。さらに下層は砂層となり遺構面は認められない。

遺構

第1面で検出した遺構には耕作関連小溝群・耕作区画を画する畦畔と小溝群・ピットなどがある。耕作関連の小溝群はいわゆる鋤溝と考えるが、必要以上にこだわりを持つ必要もなからう。なぜなら鋤溝も畝の高まりがあって初めて確認されるものであり、等間隔で平行して並ぶもの全てが鋤溝ではない。むしろ小溝群には耕作土下位に沈着する養分を攪拌する天地返しの際の痕跡が多く遺存する可能性のほうが高い。なぜなら水稲耕作に関して言うならば作の善し悪しを左右する水捌けに悪影響を与えるほどの田



第7図 1区遺構配置図(1/300)



(土層名)

- | | |
|------------------------------|--------------------------------------|
| 1 10YR 5/2 灰黄褐色粘質微砂 (盛土・覆土) | 7 7.5YR 6/8 橙黄色粘質微砂 (マンガン凝じりで暗褐色強い) |
| 2 5Y 7/2 灰白色粘質微砂 | 8 2.5Y 7/8 黄色粘質微砂 |
| 3 5Y 6/2 灰オリゾプ粘質微砂 | 9 10YR 6/1 褐色粘質土 (黄褐色強い) |
| 4 10YR 7/8 黄褐色粘質微砂 | 10 10YR 5/1 褐色粘質微砂 |
| 5 10YR 6/8 明黄褐色粘質微砂 | 11 10YR 6/8 明黄褐色粘質微砂 (マンガン凝じりで暗褐色強い) |
| 6 10YR 7/8 黄褐色粘質微砂 (灰白色土凝じり) | 12 2.5Y 8/4 淡黄色砂 (灰白色土凝じり粘質微砂) |

第8図 1区調査区断面図(1/100)

起し痕を執拗なまでに残すこともなからう。厳密に調査で確認し得る耕作関連遺構は、畦畔とその区画や水口などの導排水施設の確認が必要となる。実際には多くの場合耕作区画の変更による整地などの削平を受け、畦畔など遺存しない場合が多い。年数回の作付けと田起しがあり、数十年に一度の耕土入れ替えを一つの単位として考えた場合、削平頻度や田起し痕の遺存度合いも膨大なものとなる。

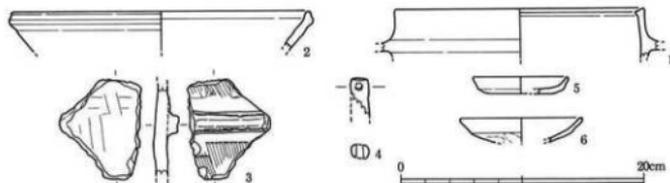
北北東から西南西方向に調査区を斜めに横断する2条の小溝に挟まれた部分は畦畔を形作り、耕作地の区画を示すものである。ほか検出長3.0m、幅0.4mほどの小溝群はいわゆる動溝である。いずれも深度0.05~0.1mをはかり、埋土は灰色土系の微砂が堆積する。調査区西南に位置するピット群は北北東方向に並ぶ柵列のようであるが、いずれも浅く判然としない。埋土は黄色土系の微砂が堆積する。

第2面で検出した遺構は不定形の土坑群のみである。ほか地震噴砂吹き出しの亀裂痕跡を確認したにとどまる。土坑は長径0.2~0.7mをはかりいずれも不整形な形状を示す。深度0.1~0.3mをはかり、埋土は黄色土系に灰白色が混じる微砂が堆積している。噴砂砂脈は断面図で確認するかがり、第2面下位の淡黄色砂層から供給されており、吹き出し土層面は第2面上位のII層中にある。

遺物

出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦・磁器・石鏃・土錘が出土している。第1面遺構中からは中世土器の細片が出土したのみで、第2面遺構中からの出土はなく、その殆どは包含層中からの出土である。

1・2はI層から出土した。1は土師質羽釜で、鈎から口縁部への立ち上がりがほぼ直に近い。2は瓦質練り鉢である。3はII層出土の須恵質の埴輪片である。横断面は台形状を示し、外面左斜め方向に上がる刷毛目が見られる。4はI層出土の土師質の棒状土錘で端部に紐穴穿孔される。5はII層出土の土師器小皿である。6はI層出土の瓦器小皿である。



第9図 1区包含層出土遺物(1/4)

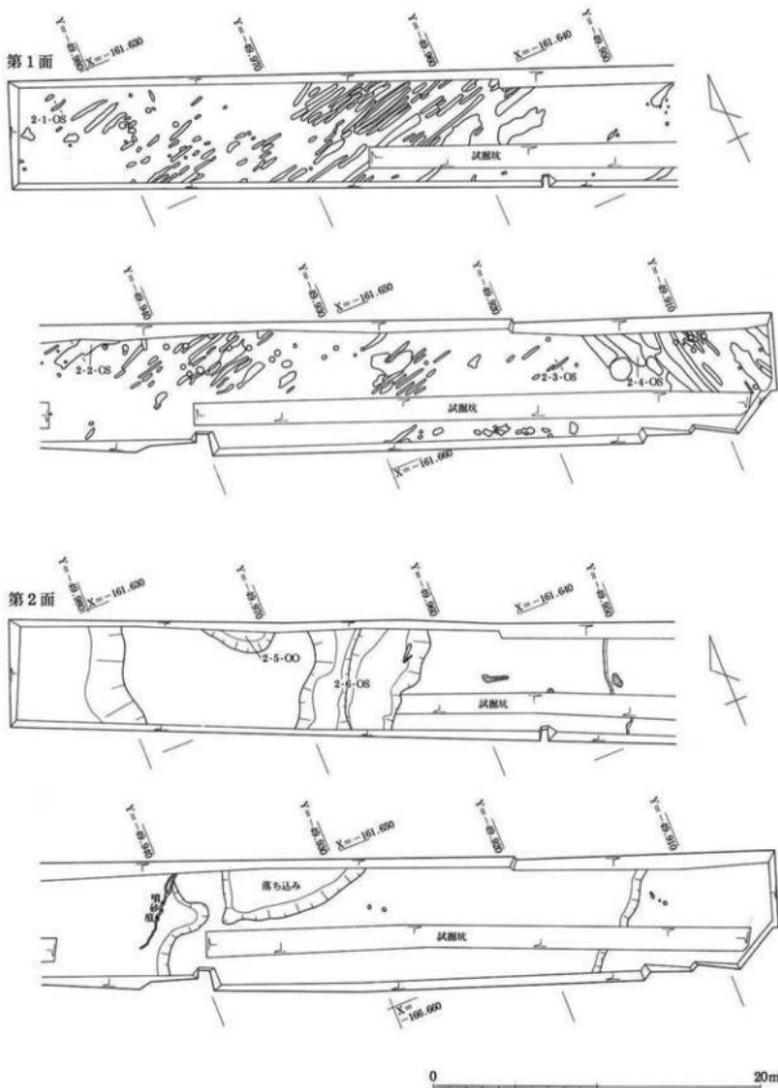
第2項 2区

位置と層序

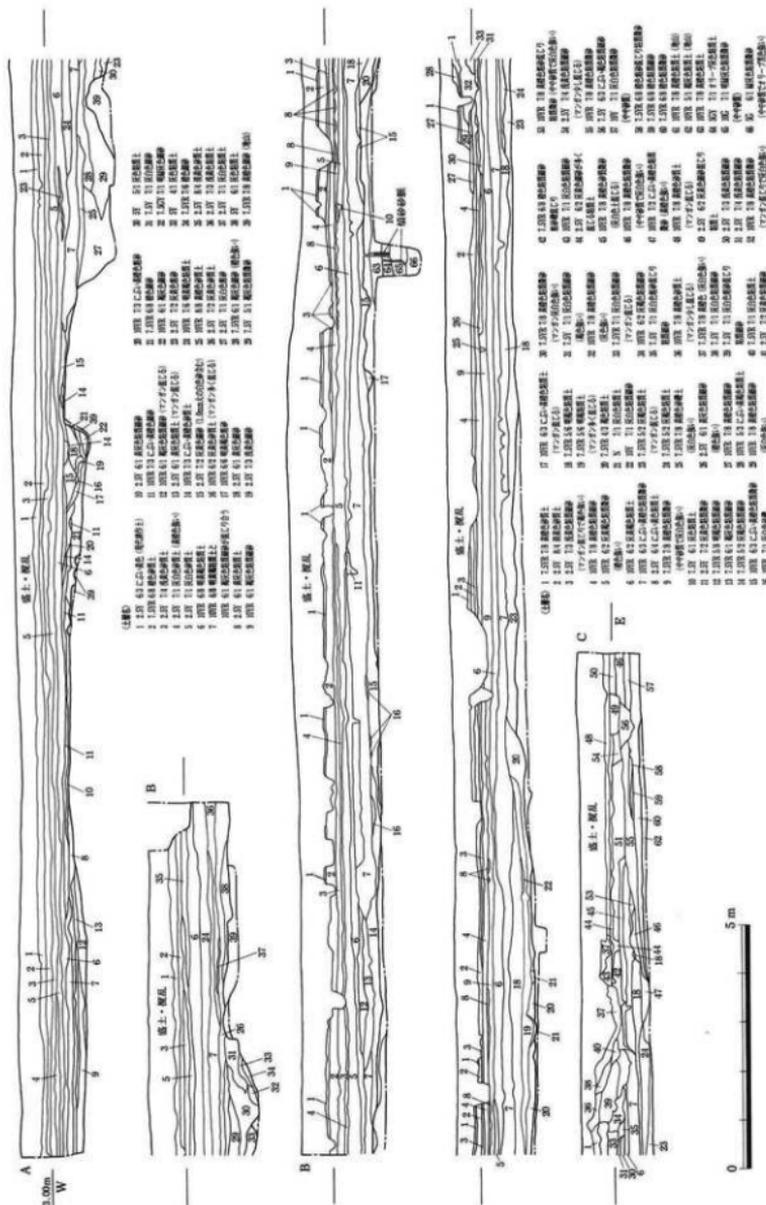
2区は1区の南南東約100mの現道路北側に位置している。現況は更地で用地を囲むフェンス内一面にコンクリートが敷かれる。調査区の形状は幅約7m、長さ約85mの長方形を基本とする。

基本的な層序は1区と変わらない。II層は概ね水平堆積を示し、1区よりも明瞭でその層数も多い。III層は起伏に富んだ堆積土層となっている。土層図中に明記されないが、遺構面も2面確認している。

II層の堆積状況は1区と比較して層厚や層数などに違いがあるが、いずれも中世の耕作土であることから、それは耕作地としての立地環境の違いを間接的に描写したものではないだろうか。層数や層厚の違いは開発の時期差よりも耕作地の良否を指し示すのではないだろうか。



第10图 2区遺構配置图 (1/300)



第11图 2区調査区断面图 (1/100)

第1面では中世耕作関連小溝群、いわゆる鋤溝のほか土坑・ピットを検出している。小溝群は概ね西
南西から東北東方向に伸びる。区画畦畔と畦畔際に付随する溝は確認されていないが、小溝群のまと
まりにより複数の区画が考えられる。調査区東端部では方向も幅も違う溝群を検出している。明らかに他
の区画とは異なり、作物種の違いが考えられるが、畦畔の検出はない。ピット群はその組合せから櫛列
を成すと考えられるものもある。以下耕作関連の小溝遺構のいくつかを取り上げてみる。

2-1-OS

北西端で検出した小溝である。検出長1.0m, 幅0.15m, 深度0.05mをはかる。断面形状は皿型で埋
土は淡黄色土系砂質土が堆積する。

2-2-OS

中央部北側で検出した。幅広の不整形な溝である。北側は調査地外に伸びる。検出長4.0m, 幅0.8m,
深度0.05mをはかる。断面形状は皿型で埋土は黄色土系の砂質土が堆積する。

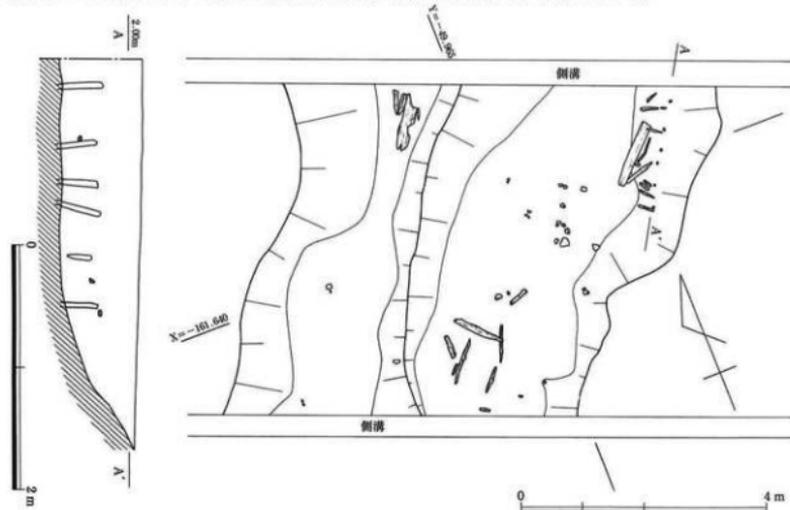
2-3-OS

南東端部近くで検出した。検出長1.2m, 幅0.1m, 深度0.1mをはかる。断面形状は皿型で黄色土系
の砂質土が堆積する。

2-4-OS

南東端部近くの北側で検出した。検出長3.1m, 幅1.0m, 深度0.15mをはかる。断面形状は皿型で黄
褐色土系の砂質土が堆積する。

第2面では土坑・溝・落ち込みなどを検出している。落ち込みは調査区中央部で検出した。調査地外
にも広がるため全体の平面形状は不明である。自然の地形と考えている。確認した深度は約0.8mをは
かるが、断面観察によれば第2面上位の土層より切り込まれており、深度は約1.0m以上ある。比較
的緩やかに埋没したようで褐色土系と灰白色土系の粘質土が緩やかに堆積している。



第12図 2区 2-6-OS平面図, 護岸杭列見透し断面図 (1/40・1/80)

第2面上位土層面から切り込まれる自然遺構の存在することはII層下位の土層形成時にはまだ不安定な立地環境にあったことを示すものといえる。以下主な遺構を取り上げる。

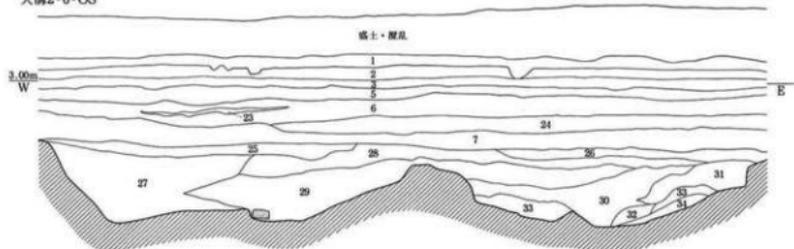
2-5-00

北西端部近くの北側で検出した。検出した形状は不整な半円形を示す。調査地外に広がるため全体の形状は不明である。検出長径4.4m、検出幅1.3m、深度0.5mをはかる。断面観察によれば第2面上位からの切り込みが認められる。断面形状は東側に偏して深い不整な三角形を示す。これも落ち込み同様の遺構と考えられる。埋土中に砂・粗砂の堆積があり、付近の流路との関係から比較的早く埋没したと考えられる。遺物の出土はない。

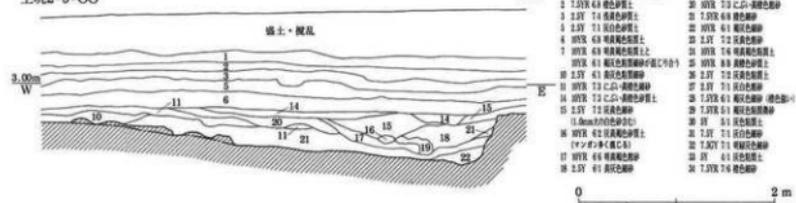
2-6-0S

西端部寄りで検出した。南南西から北北東方向に調査区をわずかに斜め方向に横切る形で検出している。検出長6.5m、最大幅7.5m、深度0.85mをはかる。断面形状は中央部の底部形状が凸状に盛り上がる不整な形状をしている。平面的にはあたかも2条の溝が重なるように見えるが、断面を観察すれば1条の溝であることが解る。底部の起伏は同一流路のわずかな移動によるもので、流心部の移動により古い方の流路の肩の一部分が底部に凸状の起伏として遺存したものと考えられる。断面観察によりその流路の切り合い関係を見た場合、西側の流路・流心部が先行するものである。両流心部の埋土堆積状況の比較から、西側の流心部には粗砂が大きく堆積しているので激しい流れがあったことが窺え、東側は比較的穏やかに流れていたと考えられる。埋土の堆積状況などから考えて、本来的には自然の流路であった可能性が高いが、すくなくとも流心部が東側に移行した時点では護岸杭列が見られることから人為的な手が加えられた溝であったことが解る。もちろんこの杭は西側にもその痕跡を残していることや西側上層部の埋土堆積状況から見て、西側流路を含めた幅の溝であったであろう。遺物の出土は東側部分に多く、流心部の移動の時期と護岸構築などの開発行為の始期を考えるうえで興味深い。

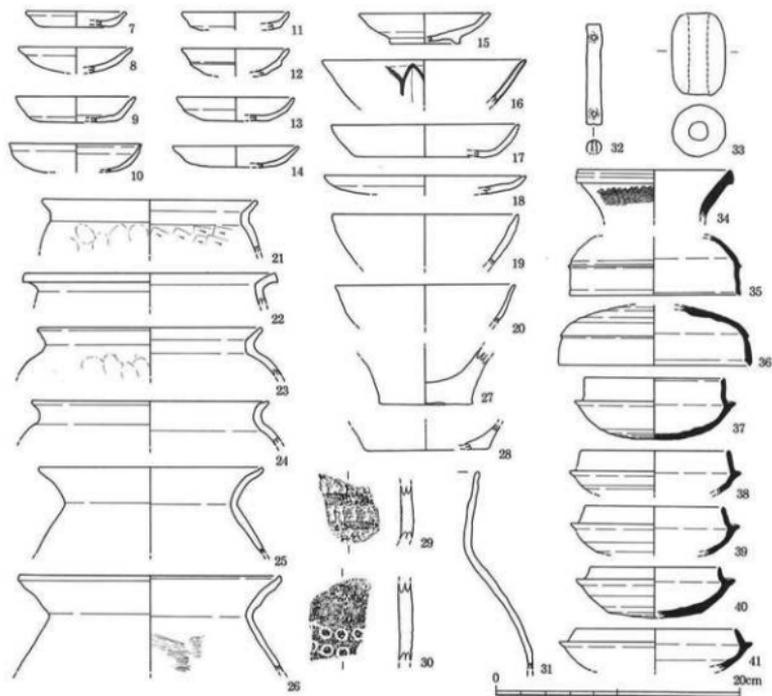
大溝2-6-0S



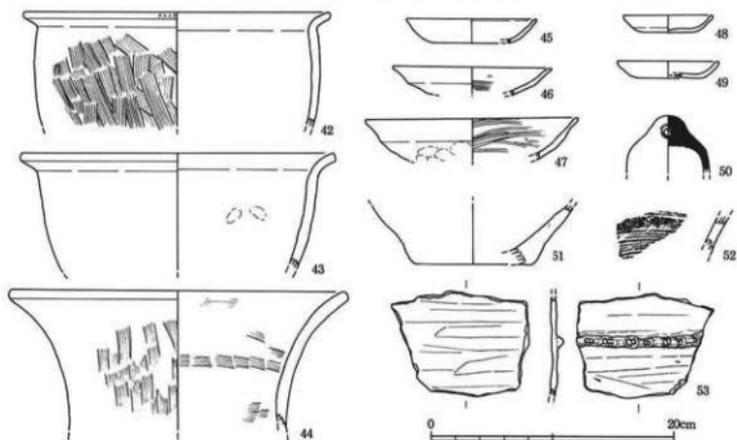
土坑2-5-00



第13図 2区 2-5-00, 2-6-0S断面図(1/50)



第14图 2区包含层出土遗物(1/4)



第15图 2区遗物出土遗物(1/4)

遺物

包含層からは土師器・須恵器・瓦器・弥生土器・陶磁器・土錘などが出土した。7～26はⅡ層から出土した。7～10は土師器小皿で、11～14は瓦器小皿である。15は陶器で、16は龍泉窯系青磁碗である。17, 18は土師器で、19, 20は瓦器である。21～26は土師器甕で、25, 26は布留式土器である。27～31は弥生中期土器で29, 31はⅢ層から出土した。31は磨耗著しいが、口縁近くの外面に凹線状の起伏が観察し得る。32, 33は土師質の土錘でⅡ層から出土した。32は両端部穿孔の棒状土錘である。34～41はⅡ層出土の須恵器で、34は横瓶口縁部である。

遺構からは土師器・須恵器・瓦器・弥生土器が出土した。42～44, 51～53は2-6-O-Sから出土した。53は貼り付け凸帯文土器で、内外面ともにケズリ調整される。42は甕で内面ナデ調整され、外面刷毛目調整され、口縁端部に刻み目を施す。43は鉢で内面ナデ調整される。外面は磨耗著しい。44は壺口縁で内外面ともにナデ後刷毛目調整される。ほか51, 52の壺などは畿内第Ⅰ様式期後半から第Ⅱ様式期にかけてのものである。前期土器の年代は従来の指摘どおり、新段階以前には遡り得ない。45は2-3-O-S出土の土師器小皿である。46, 49, 50は2-4-O-Sから出土した。46は瓦器小皿で、49は土師器小皿である。50は須恵器飯蛸壺である。47は2-1-O-S出土の瓦器碗である。内面ミガキ調整され、外面には指頭圧痕が見られる。48は2-2-O-S出土の土師器小皿である。

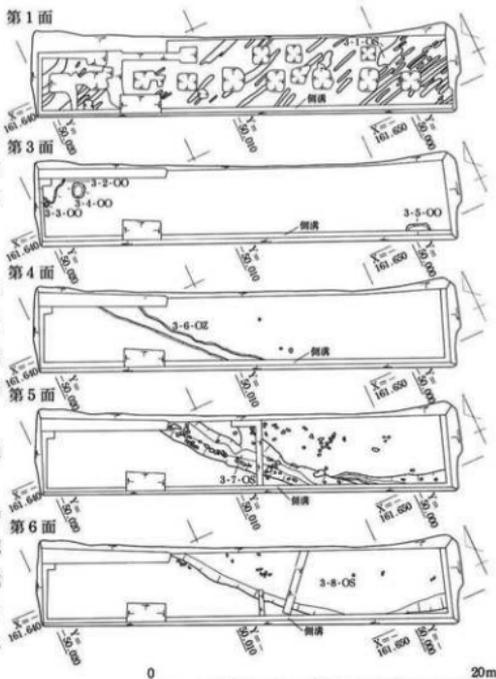
第3項 3区

位置と層序

3区は1区の東側約50mの現道路南側に位置している。現況は更地で用地を囲むフェンス内に雑草が見られるのみである。調査区の形状は幅約5m、長さ約26mの長方形を示す。

基本的な層序は盛土・近現代の耕作土層であるⅠ層が約1.0m堆積し、その下に黄橙色土系の土層が約0.5m堆積する。さらに下層には黄褐色・黄橙色を示す第Ⅲ層が約0.3m堆積する。さらに下層には褐色土系の粘質土が堆積するが遺構面は認められない。

遺構面は6面確認している。Ⅱ層中で第1面・第2面の中世遺構面を確認している。Ⅲ層中で古代から古墳時代までの第3面・第4面・第5面・第6面の遺構面を確認した。第4遺構面については調査区東側部分はない。



第16図 3区遺構配置図 (1/300)

深度0.08mをはかる。断面形状皿型で暗灰黄色砂質土が堆積する。

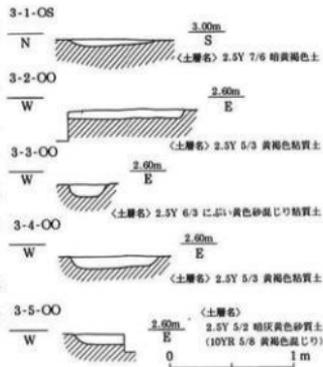
第4面では耕作地区畦畔3-6-OZを検出したこととどまる。検出長11.0m, 幅0.6~1.1mをはかり、高さは0.1mしか遺存しない。畦畔を隔てた両耕作地区面の比高差は認められない。水口の検出はない。第5面・第6面検出の溝の位置関係から見た場合、泥湿地状の地形との境目に構築された畦畔と云えよう。

第5面では溝3-7-O Sと足跡を検出している。足跡は溝内から北東側にのみ認められ、砂質土・粘質土の湿地状を呈すベース面に踏み込み跡を遺す。

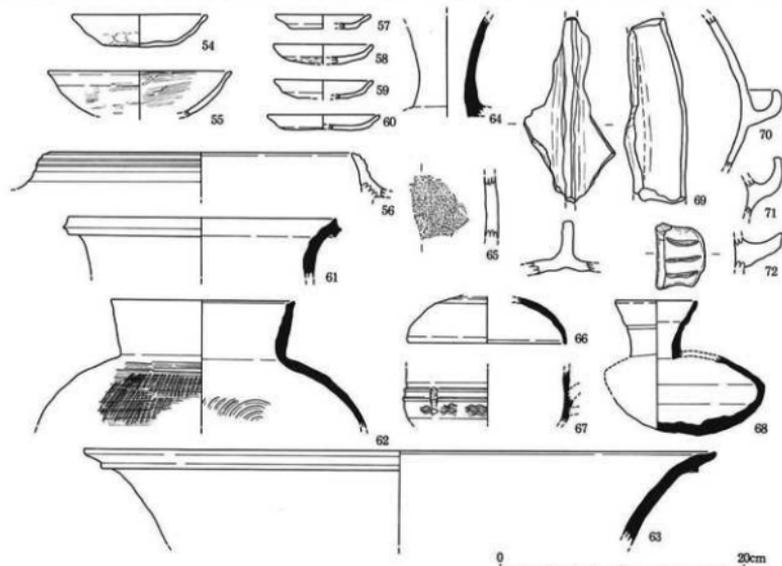
3-7-O S

基本的には南東から北西方向に伸びるが、北西側で二股に分かれる。南東部には調査区南側に平行する溝も認められる。第4面検出の畦畔の北東側に位置し、第6面検出の溝際に位置することから、溝の埋没過程で出現した最終的な流路であることが解る。検出長12.5m, 最大幅2.1m, 深度0.1mをはかる。断面形状は足跡踏み込みなどにより歪であるが、基本的には皿型を呈する。埋土は明赤灰色砂質土が主に堆積する。遺物は須恵器・土師器が出土している。

第6面では溝3-8-O Sを検出した。調査区内では南東側の肩のみを確認したにとどまる。このため全体の規模は不明である。あるいは大きな流路もしくは落ち込みかもしれない。検出した肩口は概ね



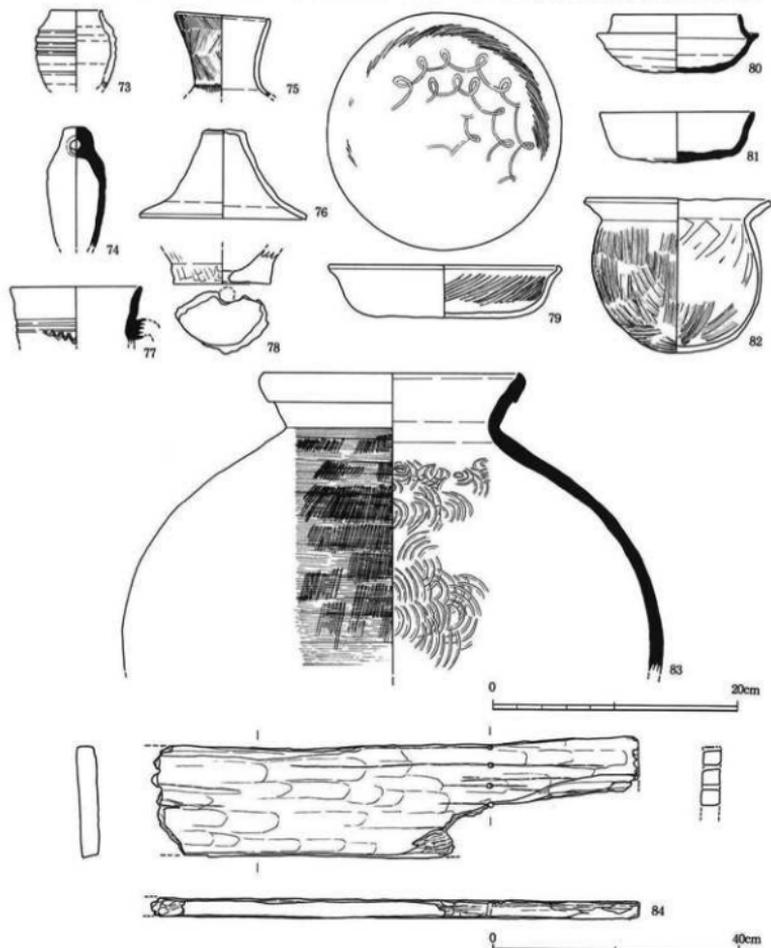
第18図 3区 3-1-OS・3-2-OO・3-4-OO
3-5-OO・3-6-OO断面図 (1/40)



第19図 3区包含層出土遺物 (1/4)

北西方向に向くが、調査区南東部付近で東方向に向きを変える。一部肩口は調査区外となるが概ね弓型を呈している。検出長19.5m、検出深度0.35mをはかる。埋土は灰色土系の砂・砂質土・粘質土が堆積する。遺物は弥生土器・土師器・須恵器などが出土している。土師器・須恵器については7～8C代の時期が与えられる。

調査区の断面観察によれば第4面検出の畦畔を挟んで南東側ではほぼ一律に土層の水平堆積が認められ安定した立地環境が窺える。これに対して北東側では中世遺構面である第2面まで土層の水平堆積が認められるが、下位の土層に行く程堆積土層の起伏が顕著になり立地環境の不安定差を示している。



第20図 3区遺構出土遺物(1/4, 1/8)

遺物

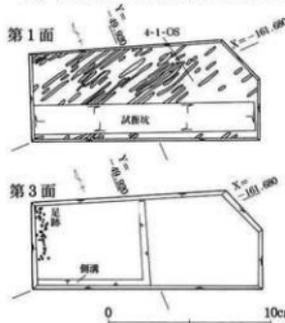
包含層からは土師器・須恵器・瓦器・瓦質羽釜・移動式竈・埴輪などが出土している。54～60, 62～65, 67, 69, 72はⅡ層から出土している。61, 66, 68, 70, 71はⅢ層から出土している。54, 55は瓦器碗で、54に高台はない。56は瓦質羽釜である。57, 58は土師器小皿である。59, 60は瓦器小皿である。61～64, 66～68は須恵器である。62の甕は口縁から口頸部にかけて回転ナデ調整され、体部外面の頸部近くはカキ目調整されるほか、体部外面はタタキ後カキ目調整される。63は初期の大型甕である。64は細頸壺頸部である。65は須恵質の形象埴輪片である。67は把手付き碗である。耳の接線痕が残る。68は平瓶で口縁沈線篋ケズリされるほかナデ調整される。69は移動式竈の罫部分である。70～72は土師器甕の耳把手である。72は上面に「川」の字状に深い沈線が彫り込まれる。

遺構からの出土遺物の構成は包含層とほぼ変わらない。細片が多く図示し得るものが少ない。73～76, 78～84は3-8-O-Sから出土した。77は3-7-O-Sから出土した。73は土師質で胎土も精良であるが、全体の器形が不明である。内外面ナデ調整され、外面は凹状に強く横ナデされる。74は須恵器飯蛸壺である。75は注口壺口縁部である。口縁部には綾杉文状に刷毛目調整される。口頸部から体部にかけては簾状文が見られる。76は弥生土器の蓋である。磨耗剝離著しく調整は不明である。77は須恵器把手付き鉢である。78は弥生土器底部であるが、焼成後の底部穿孔が認められる。79は土師器碗で、内面体部に極細かな斜め方向のミガキが見られ、底部には螺旋状のミガキが見られる。80, 81は須恵器杯である。82は土師器甕である。口縁部内外面ナデ調整される。体部は外面が刷毛目調整される。内面上半部はナデ後ケズリ調整され、下半部はナデ後刷毛目調整される。口縁端部には成形時の歪みが認められる。83は大型の須恵器甕である。口縁端部外面は肥厚し帯状の段を成す。体部外面はタタキ後カキ目調整され、内面には同心円文のアテ具痕が残る。84は板材に長軸方向のケズリ加工痕と4ヶ所の臍穴が遺存する。

第4項 4区

位置と層序

4区は1区の東側約160mの現道路南側に位置している。現況は更地である。調査区の形状は幅約7m、長さ約14mの長方形を基本とする。



第21図 4区遺構配置図 (1/300)

基本的な層序は近現代の盛土Ⅰ層が約0.5m堆積し、その下にⅡ層の黄褐色土が約0.25m堆積する。さらに下層にはⅢ層の灰色土系の土層が約0.6m堆積する。

遺構面は3面確認している。Ⅱ層中で第1面・第2面をⅢ層中で第3面を確認している。第1面は中世遺構面である。耕作関連の小溝群を検出している。第2面では顕著な遺構は認められなかった。

遺構

第1面で検出した遺構は耕作関連小溝群のみである。西南西から東北東方向に伸びる溝溝群である。調査区内で畦畔の検出もなく、耕作地の区画は確認されていない。幅0.1～0.15m、深度0.05～0.1

mをはかり、検出長はさまざまである。

全て西南西から東北東方向に伸びる。埋土は淡黄色土系の砂質土が堆積する。埋土中からは土師器・須恵器・瓦器の極細片が出土している。

4-1-O S

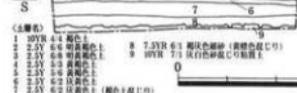
西南西から東北東方向に伸びる。検出長3.1m、幅0.12m、深度0.05mをはかる。埋土は明黄褐色土が堆積しており、層中から土師器・瓦器・土師質羽釜の細片が出土している。

第2面では顕著な遺構は認められないが、調査区西壁付近で踏み込み跡（足跡）を確認している。不整形で小振りなものがほとんどで、径0.1mを超えるものはない。動物種を特定し得ないが、連続性が確認される。南南西から北北東方向への動きが看取される。

断面から見れば第2面のベースとなる土層は水平堆積し安定した様相を示すが、踏み込み跡が見られることより、いまだ後背湿地の湿潤な立地環境を投影していると云えよう。

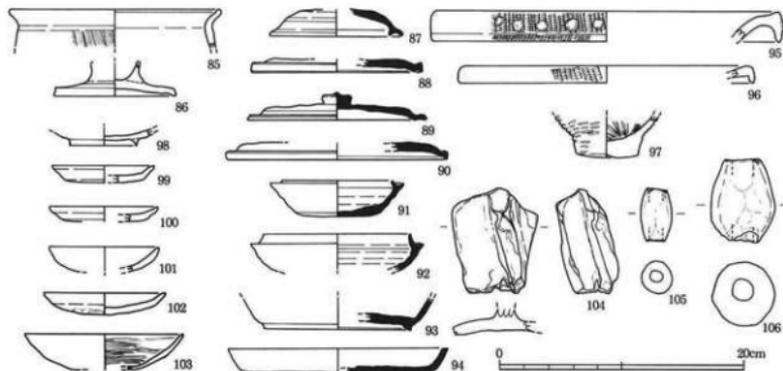
遺物

包含層出土遺物には土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・羽釜・黒色土器・弥生土器・移動式庵・土錘などが出土している。遺構出土遺物には土師器・須恵器・瓦器・羽釜などがある。98は4-1-O Sから出土した。



第22図 4区調査区断面図(1/100)

86, 87, 93, 99~103, 105, 106はII層から出土し、85, 88~92, 94~97, 104はIII層から出土した。85は土師器甕である。外面に刷毛目調整が見られる。86は土師器の蓋で、摘み接合部分篋ケズリされるほかナデ調整される。87~90は須恵器杯蓋で91~93は須恵器杯身である。94は須恵器皿である。95~97は弥生土器である。95は中期広口壺口縁で口縁部下方に垂下し、端部に簾状文施され円形浮文が付く。97は試掘トレンチ埋土中から出土している。内面刷毛目調整され、外面底部までタタキ調整される。出土状況が攪乱土中であるため評価に苦しむところであるが、包含層中の出土であれば今回調査の中で唯一の後期土器である。98は瓦器底部で高台部断面三角形を呈する。99, 100は土師器小皿で101, 102は瓦器小皿である。103は瓦器碗



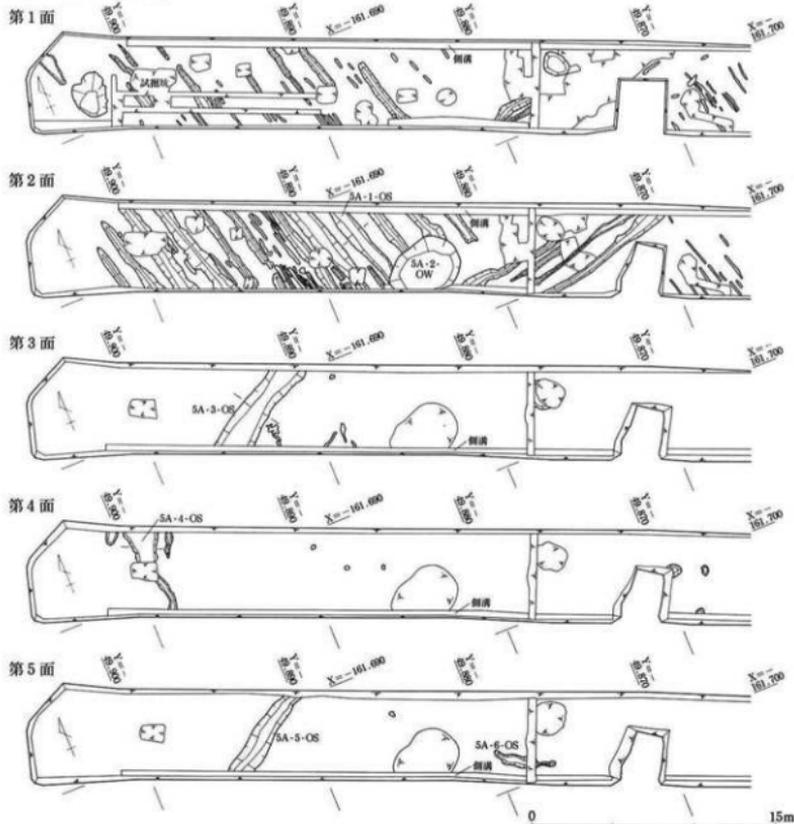
第23図 4区包含層・遺構出土遺物(1/4)

で14C代の高台部退化期のものである。104は移動式竈の鈔の破片である。炊き口側の端部と底部遺存する。105, 106は中空の土師器土錘である。ともに縄による摩耗痕が残る。

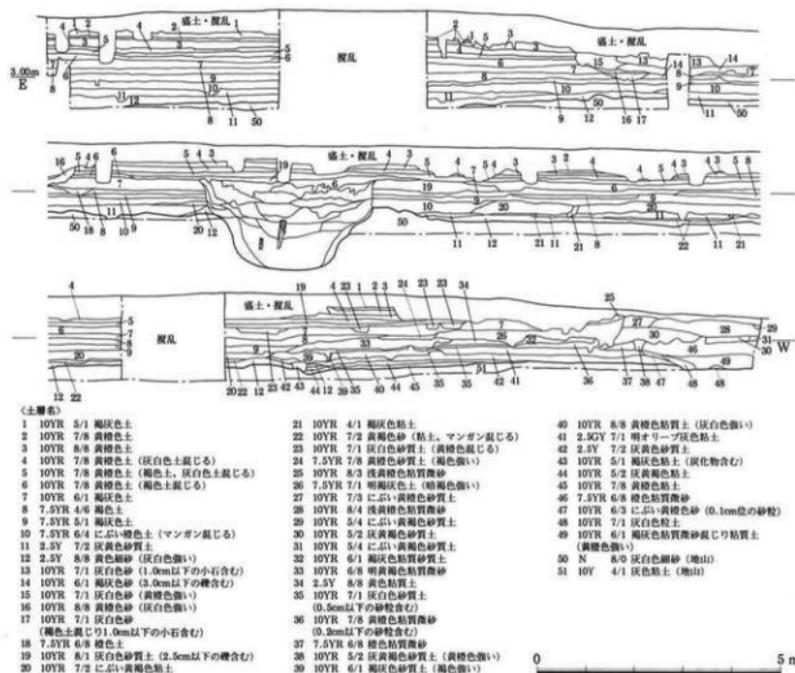
第5項 5区

位置と層序

5区は1区の東側約180mの現道路南側に位置している。現況は更地である。調査区の形状は幅約7m、長さ135mの長方形を基本とする。現地での調査は居宅等への進入路確保などの制約もあり、一度には行えず、4ヵ所に分割して行っている。連続する調査区のため一括した地区割りとしたが、成果については層序・遺構面に不整合もあるため、それぞれの調査ヵ所ごとに便宜上西側よりAからDまでの枝記号を付して報告する。各調査ヵ所の幅は約7mをはかり、長さはA区45m、B区51.5m、C区14m、D区24.5mをはかる。



第24図 5A区遺構配置図 (1/300)



第25図 5 A区調査区断面図 (1/100)

A区

基本的な層序はI層が0.27m, II層が1.4m, III層が0.3m堆積する。遺構面は第1面から第3面をII層中で確認しているほか、以下第5面までをIII層中で確認した。

B区

基本的な層序はI層が0.54m, II層が0.28m, III層が1.1m堆積する。遺構面は第1面・第2面をII層中で確認し、第3面・第4面をIII層中で確認している。最終面には時期の明確な弥生時代・古墳時代の遺構が重複して検出されるので両遺構検出面を第4面とした。

C区

基本的な層序はI層が0.6m, II層が0.25m, III層が1.35m堆積する。遺構面は第1面をII層中で確認し、第2面をIII層中で確認した。

D区

基本的な層序はI層が0.48m, II層が0.5m, III層が1.2m堆積する。遺構面は第1面から第3面までをII層中で確認し、第4面をIII層中で確認した。

遺構

各調査区で検出した遺構には井戸・土坑・溝・堅穴住居などがあるが、遺構面の違いはもとより同

一時期の遺構面が連続せず不整合なため、時代と遺構面は整合しない。概ね中世遺構面と古墳時代遺構面は各々所で検出されている。遺構面の時代別対照は第1表を参照願いたい。

A区

A区では土坑・溝などの遺構を検出している。第1面では耕作関連溝群を検出している。検出長0.6～4.5m、幅0.1～0.6m、深度0.05～0.1mをはかる。調査区西側は北北西から南南東方向に伸びるが、中央東側よりでは東北東から西南西方向に伸び、東側付近で再び北北西から南南東方向に伸びる。溝の方向性により耕作地区画を想定するが、畦畔の検出はない。層位や出土遺物より見て近世の遺構面である。

第2面では井戸と耕作関連溝群を検出している。溝幅については第1面より広いが、方向性は第1面と変わらない。このため耕作地区画も変わらないと考えられる。

5A-1-OS

調査区中央よりで検出した。北北西から南南東方向に伸びる溝である。検出長5.5m、幅1.1m、深度0.35mをはかる。断面形状は段を有する皿型である。埋土は褐灰色砂質土・灰白色砂質土が下層から堆積している。埋土中から土師器・須恵器・瓦器片が出土している。瓦器の年代観から見れば13C後半期以降14C代にかけての時期が考えられる。

5A-2-OW

調査区中央よりで検出した井戸である。南側の一部は調査地外にかかるため全体の形状は不明であるが、概ね東西方向に長い楕円形を示す。検出長径4.4m、短径3.4m、深度1.85mをはかる。断面形状は段を有する深い碗型を示す。深度0.8m付近に段を有し、長径3.2m、短径2.2mの規模に狭まり、わずかに窄まりながら底部へいたる。底部は平坦で底部近くの周縁には打ち込まれた木杭が遺存する。湧水は確認されず、灌漑のための水溜め機能を有する、いわゆる野井戸である。打ち込まれた木杭は水溜め部分を構成する井筒部分に相当するが、土層堆積状況から見て、有段部から上位にまで存在したかは不明である。埋土は有段部を境に上位に黄色・褐色・灰色を呈する砂質土系の土層が堆積する。下位には青灰色系を中心とした粘土・砂層が堆積する。埋土中から土師器・須恵器・黒色土器・瓦器片が出土した。瓦器の年代観からすれば13C中葉から後半期にかけての時期が考えられる。ほかに13C代と考えられる東播系の須恵器片口細片の出土もあり、耕作関連溝出土遺物と時期的にも矛盾はない。

第3面では溝1条のほか小規模な落ち込み地形を検出している。落ち込みについては地形のわずかな起伏を検出したのみで遺物の出土はない。

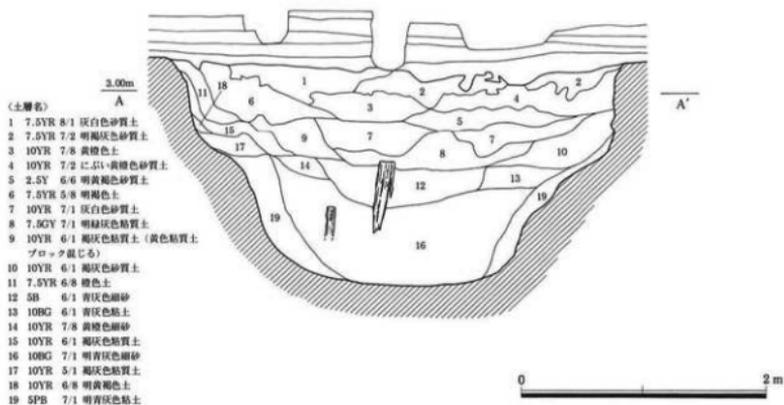
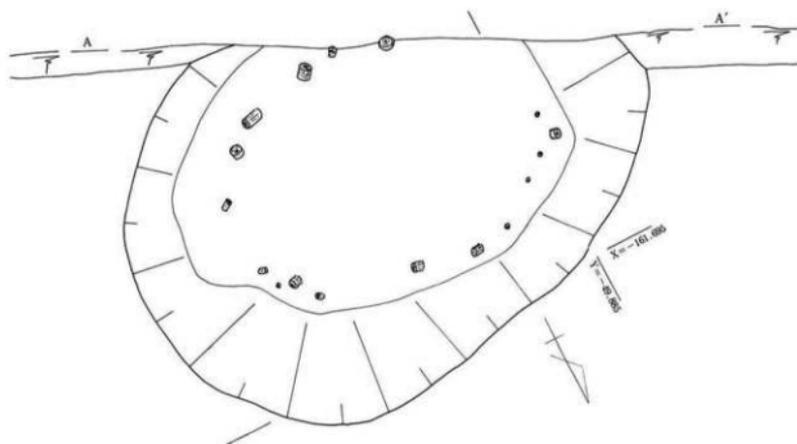
5A-3-OS

調査区西よりで検出した。北東から南西方向に伸びる。検出長7m、幅1.8m、深度0.1mをはかる。断面形状は皿型で、埋土はにぶい赤褐色粘質土が堆積する。埋土中からの遺物の出土はない。遺構面直上の包含層中から12C後半から13C前半期までと考えられる瓦器碗片の出土があるので、古代末から中世の遺構面の可能性が高い。

第4面では土坑・溝・ピットを検出した。土坑はいずれも深度0.05～0.1mの規模である。ピットは深度0.05～0.1mの規模しかなく、小規模な地形の起伏と考えるのが妥当であろう。

5A-4-OS

調査区西よりで検出した。わずかに屈曲しながら南から北方向に伸びる。検出長5.2mをはかるが幅は一定ではなく北側の幅が広く0.5～2.1mをはかる。深度は0.05mをはかる。非常に浅いが断面形状は



第26図 5A区 5A-2-OW平面・断面図(1/40)

基本的に皿型である。埋土は褐色土が堆積する。遺物の出土はない。

第5面では溝2条を検出した。5A-6-O Sは深度0.1m程度の非常に浅いものである。形状や底部の起伏などから見て、小規模な地形の起伏と考えられる。

5A-5-O S

調査区西よりで検出した。南西から北東方向に伸び、検出長5.5m、幅1.4m、深度0.24mをはかる。断面形状は皿型で黄褐色粘土混じり細砂が堆積する。遺物の出土はない。位置と方向などは第3面検出の溝とはほぼ変わらない。しかし人為的なものとは考えがたく、第5面の遺構検出状況から見て自然流路と考えられる。

B区

B区では土坑・溝・竪穴住居跡を検出した。第1面では耕作関連小溝群を検出した。幅0.1~0.3m、深度0.05~0.1mをはかる。検出長はさまざまで0.5~5.3mをはかる。小溝群の方向性は調査区中央部付近が西南西から東北東方向に伸び、西および東側部分は南南東から北北西に伸びる。畦畔の検出はないが耕作地区画の存在が想定される。

第2面でも耕作関連小溝群を検出している。方向性は第1面と変わらない。耕作地区画は少なくとも第1面同様に3区画が考えられる。幅や深度も概ね変わりがないが、とりわけ調査区西側部分の溝は長く、溝間の距離も2.0mをはかるものが見受けられるので、耕作種の違いを反映したのかもしれない。つまり島島状の耕作地が想定されるのであるが、調査区の断面は平坦でその起伏は投影されない。

第3面では複数の溝状遺構と溝2条を検出した。溝状遺構はいずれも浅く、形状も不整形なものが多く土坑状を示す。溝については調査区を横断する形で検出しており、深度も比較的遺存している。

5B-1-O S

調査区西よりで検出した。東南東からわずかに屈曲しながら北西隅に伸びる。溝片部は直線的でなく複雑に入り組んだ形状を示す。検出長17.0m、幅0.5~1.8m、深度0.1mをはかる。断面形状は皿型で、埋土は灰黄褐色・にぶい黄橙色シルトが堆積する。遺物は土師器細片が出土した。

5B-2-O S

調査区中央部で検出した。南西からやや屈曲しながら北東方向に伸びる。検出長7.5m、幅0.7m、深度0.08mをはかる。断面形状は皿型で、埋土はにぶい黄橙色砂礫・黄褐色シルトが堆積する。遺物は土師器細片が出土した。

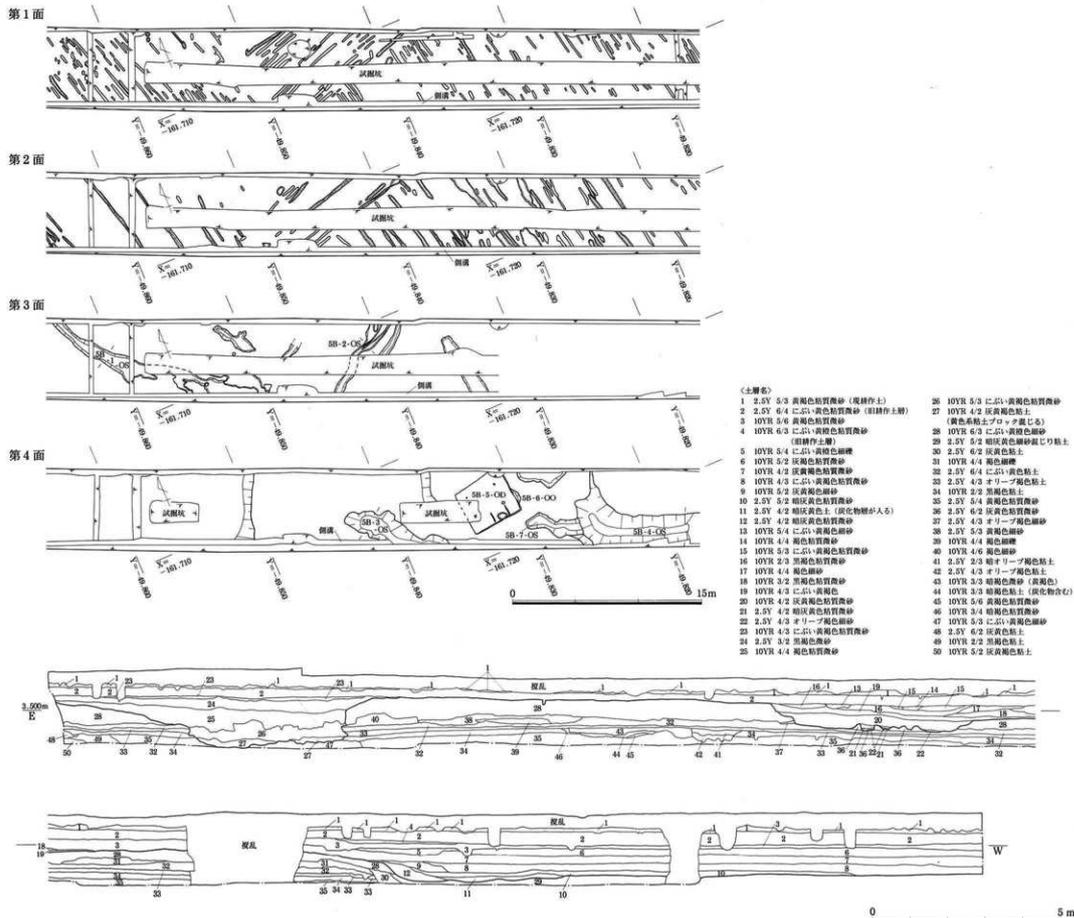
第4面では土坑・溝・竪穴住居跡を検出した。弥生時代と古墳時代の遺構が同一面で検出される。調査区中央部の標高は高く、第2面から第4面の遺構面が同一面で検出される。

5B-3-O S

調査区中央部で検出した。中央部の地形の高まり西側に位置しており、標高は一段下がる。北西から南西方向に伸び調査地外へといたる。検出長8.5m、検出最大幅2.6m、深度0.04mをはかる。断面形状は浅い碗型で底部に起伏が認められる。埋土は褐色土系の砂・粘土・砂質土が堆積している。埋土中からは縄文土器・弥生土器片が出土した。

5B-4-O S

調査区東側南よりで検出した。南側片部は調査地外にかかる。中央部の高まり東側部分に位置している。標高は一段下がり、北から南側調査地の壁面で屈曲し、壁面に添って東南東方向のC区5C-1-O Sへと続く。C区では再び北東方向に屈曲し、調査地外へと伸びる。C区を含む総検出長は約25.0m、



第27图 5B区遺構配置図・調査区断面図(1/300・1/100)

最大幅3.0m、深度1.4mをはかる。断面形状は深い碗型でU字形を示す。埋土は明褐色土・にぶい黄褐色シルトが堆積している。埋土中からは凹線文の施された大型器台などの弥生中期土器や古墳時代前期の布留式土器の出土を見ている。布留式土器は溝最下層中からも出土している。中央部高まり上には堅穴住居跡5B-5-O Dが立地し、住居内からも布留式土器の出土を見ているので、編年観の違いによる詳細な時期差はあるが、概ね同一時期に存在する遺構と云えよう。

5B-5-O D

調査区中央部の高まり上で検出した。北西隅の掘乱と試掘坑跡の掘乱以外全面遺存する。検出した標高はT.P3.7mをはかる。平面形状はやや歪な方形を示す。やや西に振れるが概ね各辺は東西南北の正位置にある。東辺推定4.2m、西辺3.9m、南辺4.0m、北辺推定4.0mをはかる。

主柱穴は4本である。西南部の柱穴は掘乱により消滅しているので、復元して位置を記した。それぞれの柱間距離は東側推定1.7m、西側1.7m、南側推定2.4m、北側2.4mをはかる。柱穴の遺存深度はいずれも浅く0.05m未満である。

壁構は西辺部を除き3辺を巡る。幅0.05~0.1mをはかる。床面からの深度は東側が深く0.1mをはかるが、北および南側は深度0.06mをはかり、西側に行くほど浅くなり消滅する。

壁構の内側直近には垂木を支える柱跡と考えられる柱穴が0.7~0.8mの間隔で並ぶ。柱穴の規模はさまざまで、長径0.1~0.2mをはかり、深度はいずれも0.05mしか遺存しない。

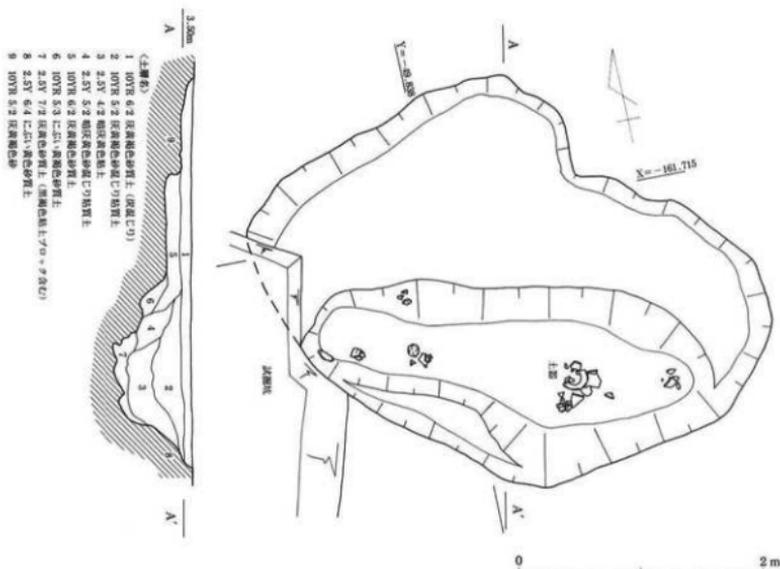
遺構全体の遺存深度は浅い。検出面から床面までの深度は0.12mをはかる。埋土は褐色土系が堆積している。埋土中には炭化物と土器細片を含んでいる。いわゆるベット状遺構と呼ばれる土層の堆積は認められない。

主柱穴に挟まれた中央部には炭化物と土器片の集中する部分があり、土器細片の集積と炭化物が目につくが、いわゆる炉跡や中央ピットのような明確な輪郭を描かない。

南辺中央近くには壁構に接して長径0.8m、短径0.6mをはかる不整形な土坑が位置している。深度は浅く0.15mをはかる。埋土は褐色土系の粘質土が堆積する。埋土中からは布留式土器の小型丸底壺が出土している。土坑は従来から貯蔵穴とする考えが示されてきた。未報告の事例であるが近時の下田遺跡の調査（厳密には同一時期ではない）では土坑上にバラスが敷かれ土器口縁のみが据えられると云う祭祀的な状況が見られていたり、住居内の主要な排水溝にむかって土坑から溝が伸びている事例もあり、一概に貯蔵穴と結論づけられない。

土坑西および東側には南辺に対して直交する形で小溝2条が位置している。溝間の距離1.2mをはかり、この間には垂木を支える柱穴は確認されていない。南面する一辺に対し直交する溝は住居内での一部分を隔絶する観がある。土坑の機能等を考え合わせると、入り口部分と考えることもできよう。つまり直交する溝間の距離は入り口の幅を示唆するもので、土坑上部の空間に昇降のための階段を渡せば、土坑そのものの機能は不明確であるが、祭祀なり水汲み等の行為を合理的に行うことが可能である。また西や東側の垂木を支える柱穴間の距離も狭く不都合が生じ、北に入り口を持つ住居も考えづらい。

住居内出土遺物は全て布留式土器である。細片が多く図示し得たのは土坑出土の小型丸底壺1点のみである。時期的には最古相期以降の時期を考えているが、土器の編年観の違いもあり判然としないが、5B-4-O S出土の土器とは概ね時期的に併行する。詳細な部分では溝出土土器の形態や技法を観察するがぎり布留式期の新しい段階のものと考えられる。住居出土土器の方が古相のものと考えられるが、下田遺跡出土の最古相期にはとうい通り得ない。



第29図 5B区 5B-6-00 平面・断面図 (1/40)

5B-6-00

調査区中央部の高まりで検出した。5B-5-0Dと重複する。平面形状は不整な楕円形を示す。長径4.3m, 短径2.5m, 深度は南側に偏って東西方向に深く0.65mをはかる。断面形状は歪で北側上位に2段のテラス状の平坦面が見られる。下位の斜面および底部は起伏が著しい。南側斜面は徐々に傾斜角を増しながら底部へといたる。埋土は上位のテラス状部分に灰黄褐色砂質土が水平堆積している。下位には灰黄色土系の砂質土・粘質土・粘土が堆積する。底部直上に黒褐色粘土塊を含む灰黄色砂質土が堆積するが、遺物を含まない。

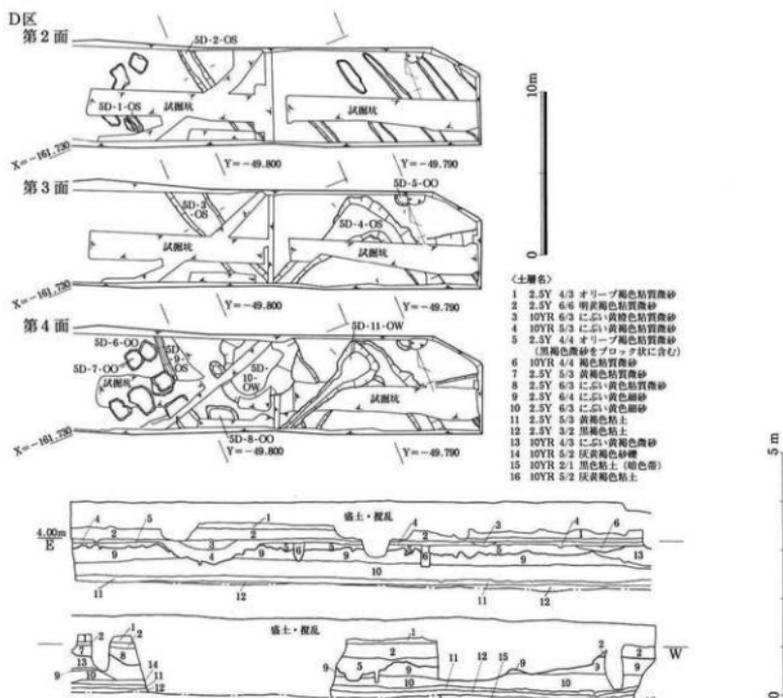
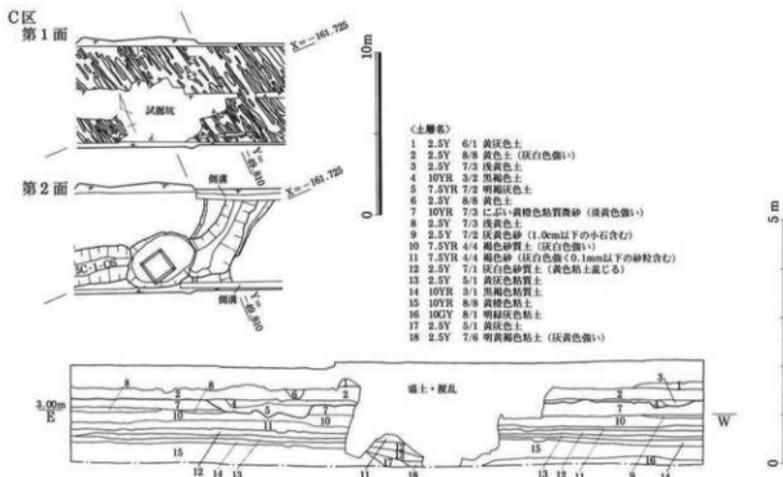
埋土中から壺・飯蛸壺など弥生中期の土器が出土している。その殆どは下位埋土中から出土しているが、上位埋土中出土の土器と時期的に差はない。

5B-7-0S

調査区東側やや南よりで検出した。西から屈曲蛇行しながら南東方向に伸びる。切り合いから見て5B-4-0Sに先行するが、同一の溝の可能性もある。検出長4.7m, 幅1.2m, 深度0.45mをはかる。断面形状は浅い碗型を示し、埋土は褐灰色土系の粘質土が堆積する。埋土中からは弥生中期の壺が出土した。

C区

C区では第1面で耕作関連小溝群を検出している。北北西から南南東方向に伸びる鋤溝群である。検出長1.0~3.0m, 幅0.1m, 深度0.05~0.1mをはかる。断面形状は皿型で、埋土は黄色土が堆積する。埋土中から土師器・瓦器など中世遺物が出土している。



第30图 5 C・D区遺構配置図・調査区断面図 (1/300・1/100)

第2面ではB区5B-4-O-Sの延長部分5C-1-O-Sを検出した。調査地南壁に沿って伸び、中央付近の近代井戸あたりで北東方向に向きを変え調査地外へと続く。屈曲部付近で南から北東方向に向かう溝と重複する以外規模等は変わらない。

D区

D区では井戸・溝・土坑を検出した。第1面では耕作関連小溝群を検出したが、遺存状態が悪い。埋土中からは瓦器などの中世遺物が出土している。

第2面でも同様の遺構を検出している。基本的な方向性は変わらないが、溝間の距離や幅が違う。距離1.0~2.7mをはかる。

5D-1-O-S

調査区西側で検出した。両端部は攪乱される。溝の方向性は北北西から南南東方向に伸びる。検出長1.4m、幅0.4m、深度0.1mをはかる。断面形状は浅い皿型を示し、埋土はにぶい黄橙色のシルト系の土層が堆積する。埋土中から中世土器片が出土した。

5D-2-O-S

調査区西よりで検出した。中央部試掘坑により攪乱される。北北西から南南東方向に伸びる。検出長8.6m、幅0.93m、深度0.16mをはかる。断面形状は浅い碗型を示し、埋土は黄橙色土系の土層が堆積する。埋土中から中世の土器片が出土した。

第3面では溝・土坑を検出した。概ね方向性は同じであるが、直角に屈曲するものもある。全体に溝幅を広げる傾向にある。

5D-3-O-S

中央部から西よりにかけて検出した。中央部試掘坑に攪乱される。北北西から南南東方向に伸びる。検出長8.3m、幅1.8m、深度0.3mをはかる。断面形状は皿型を示すが、西側片口から底部にかけてわずかな段が見られる。東側はなだらかに比高を下げ底部へといたる。概して西側の深度が深くなる傾向にあり、流路がわずかに西側に移動している結果かも知れない。埋土は西側に褐灰色土系の砂質土・シルトがやや水平方向に堆積する。東側は灰黄褐色土の砂質土・シルトが傾斜をもって堆積するが、概ね激しく流れた痕跡は認められない。埋土中からは古代末から中世にかけての遺物が出土した。

5D-4-O-S

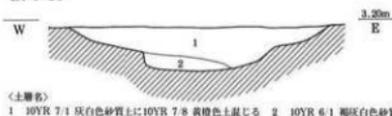
中央部から東側にかけて検出した。中央部試掘坑に攪乱される。調査区東側では南南東から北北西方向に伸びるが、北壁近くで西側わずかに湾曲したのち西南西方向に急激に屈曲直進し、調査地外へといたる。検出長13.8m、幅1.2~1.5m、深度0.28mをはかる。埋土は褐灰色・黄灰色土系の粘質土・砂質土が堆積する。埋土中からは土師器・須恵器・瓦器・青磁などが出土した。

第4面では井戸・土坑・溝を検出した。概して西側に土坑が多く、中央部には井戸が並ぶ。井戸には排水溝状に溝が接続するものもある。遺構面としては時期の複合した面である。井戸などから瓦器の出土もあるが、土坑・溝から弥生土器の出土もある。第3面と第4面の古代末から中世までの遺構の連続性は不明確である。遺構検出の煩雑さもあるが、出土遺物から見てもあまり明確ではない。

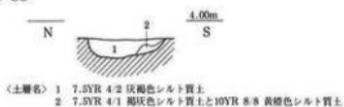
5D-6-O-O・5D-7-O-O

調査区西側北よりで検出した。形状は不整な方形を示し、西側の5D-7-O-Oが切られる。5D-6-O-Oは長径1.2m、短径0.95m、深度0.85mをはかる。断面形状は方形を示し、中央部がやや膨らみを持つ。底部にはわずかな起伏が認められる。埋土は褐色シルトが堆積し、埋土中に瓦器片を含む。

3A-1-OS



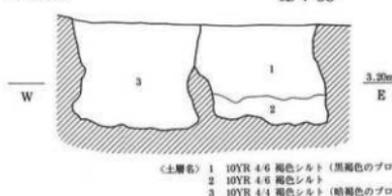
5D-5-00



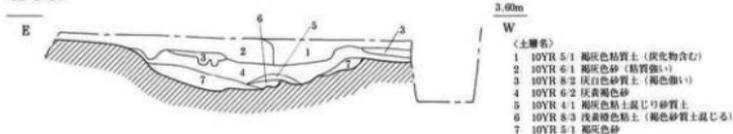
5B-2-OS



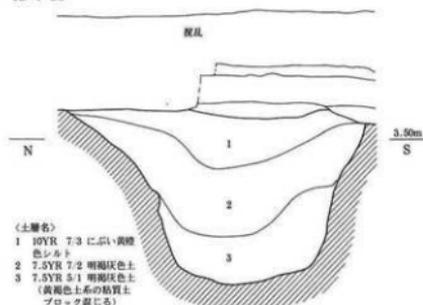
5D-6-00



5B-3-OS



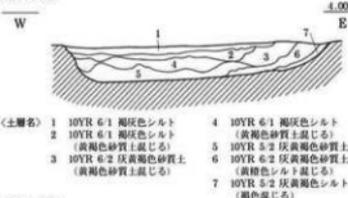
5B-4-OS



5D-2-OS



5D-3-OS



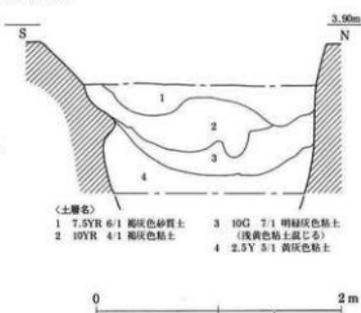
5B-1-OS



5D-4-OS



5D-11-0W



第31図 5区遺構断面図 (1/40)

5D-7-00は長径1.2m, 短径0.95m, 深度0.8mをはかる。断面や底部の形状および埋土や出土遺物などは基本的に変わらない。

5D-8-00

中央西よりの南壁付近で検出した。攪乱により切れ、検出した形状は不整な方形を示す。断面形状は皿型を示し、埋土は褐色土系の微砂が堆積する。遺物は弥生土器が出土した。

5D-9-0S

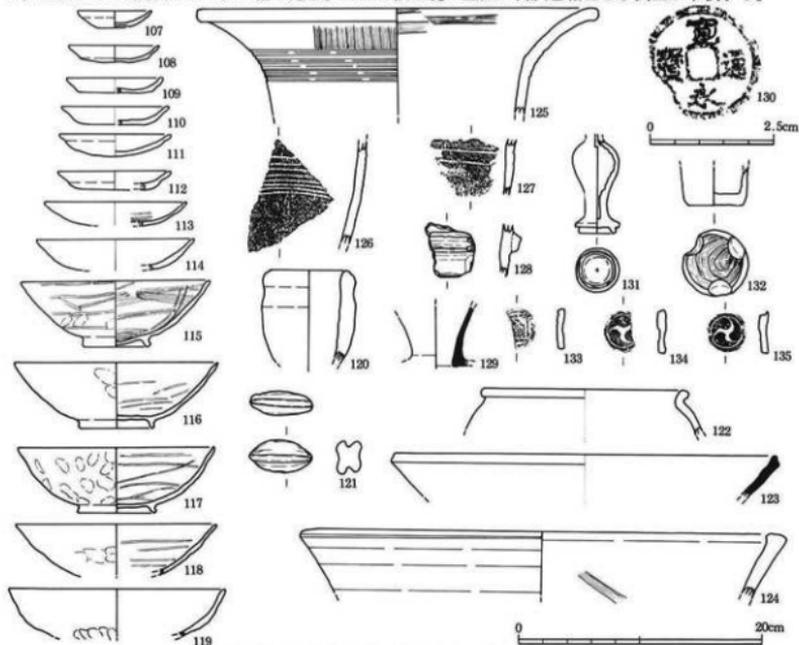
西よりの北側で検出した。北北東から南南西方向に直線的に伸びる。攪乱により西より中央で消滅する。検出長3.0m, 幅0.4m, 深度0.1mをはかる。断面形状は浅い皿型を示す。埋土は褐色土系の微砂が堆積する。遺物は弥生土器が出土した。

5D-10-OW

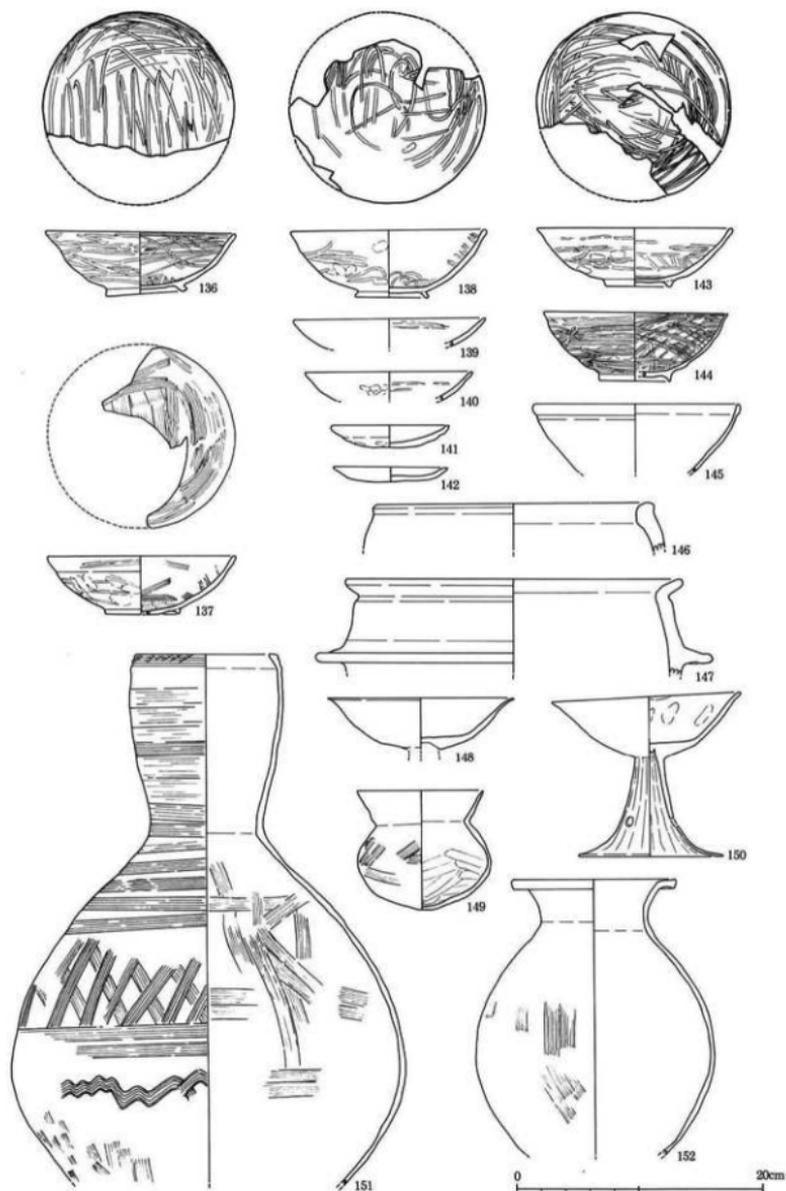
中央部で検出した。平面形状は不整な楕円形を示す。検出長径5.3m, 短径5.3mをはかる。深度は1.0mまで確認した。深度0.5m付近で段をなし、長径3.4m, 短径2.5mの規模となる。埋土はデータがないので省略するが、遺物は瓦器が出土した。

5D-11-OW

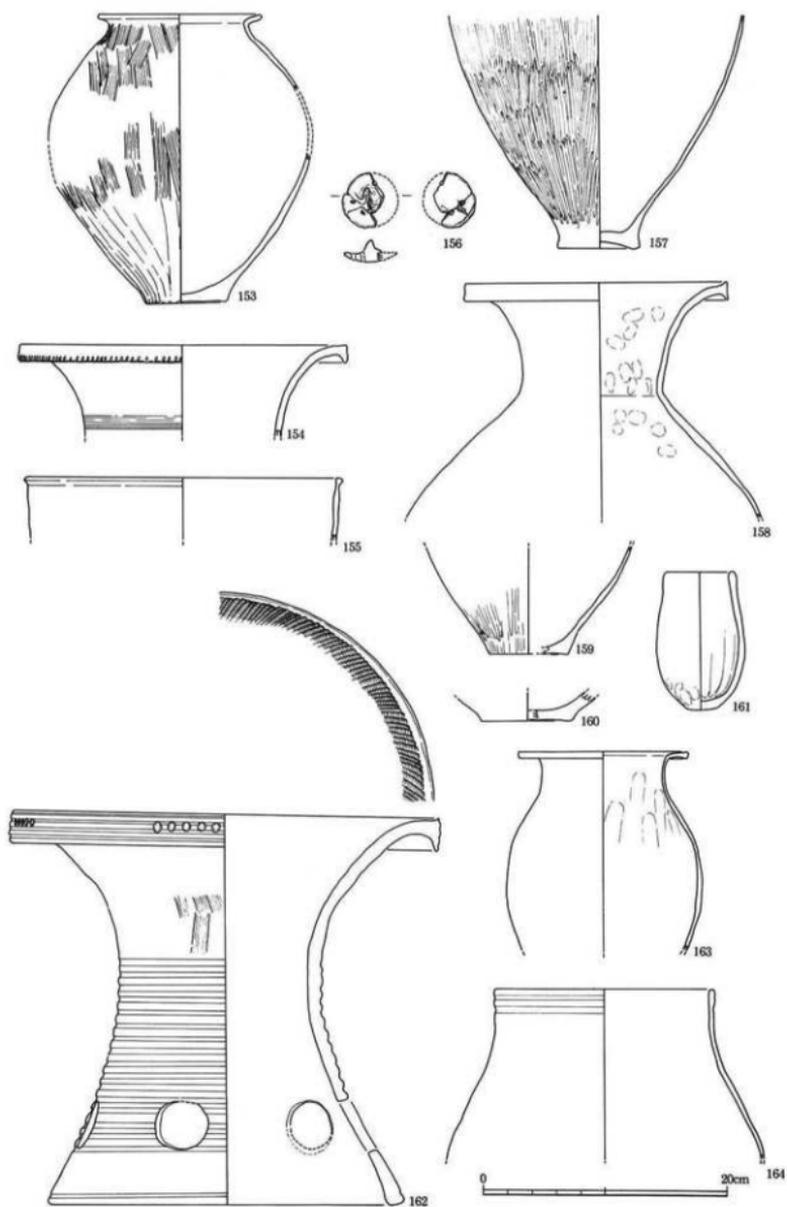
東側で検出した。西側には排水路状の溝が取り付く。平面形状は不整な楕円形を示す。長径2.6m, 短径2.4m, 深度は約1.2mまで確認した。断面形状は南側に明瞭な段を持つ。深度0.7m付近で長径1.8m, 短径1.5mの規模となり直に落ち込む。埋土は段を境に上位に褐色粘土と砂質土が堆積する。



第32図 5区包含層出土遺物(1/1・1/4)



第33图 5区遺構出土遺物(1/4)



第34图 5区遺構出土遺物(1/4)

遺物

包含層からは土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・弥生土器・陶器・埴輪・土鍾・面子・古銭などが出土した。I層から107, 128, 131, 132が出土した。III層から125から127が出土した。ほかはII層から出土した。107は陶器小皿で外面ケズリ調整され、内面ナデ調整される。108, 110, 112は瓦器小皿で113は瓦器椀である。109, 111は土師器小皿で114は土師器椀である。115から119は瓦器椀で高台や器高も比較的高い。120は土師質の飯蝸壺である。底部欠損するが、尖り気味に体部屈曲し、口縁近くには枝縄装着のための窪みが周縁を巡る。121は土師質の土鍾である。側縁に縄装着のための縦長方向の窪みが巡る。122は土師質で口縁部は端部が玉縁状に外反し肥厚する。123は東播系の須恵器片口である。124は瓦質練り鉢である。125から127は弥生土器である。125は畿内第II様式期の壺口縁で、内面口縁部近く刷毛目調整され、頸部ケズリ調整される。外面の外反部には篋描き沈線文が施される。126, 127は第I様式新段階の前期土器である。多重沈線文が施される。128は須恵質の形象埴輪片である。129は瓶の口縁部である。130は寛永通宝銭である。131は陶器仏花瓶で外面緑色釉かぶる。底部削りだす。132は陶器瓶で、底部は回転糸切り後側縁三方向から半円形状に削られる。133から135は土師質のいわゆる泥面子である。巴文などが型押しされ、裏面には指頭圧痕が顕著に見られる。

遺構からは土師器・土師質羽釜・瓦器・磁器・弥生土器・縄文土器・飯蝸壺・ミニチュア土器が出土した。140は5A-1-O-S出土の瓦器椀で、口径は小さく器高も低い。139, 146は5A-2-O-Wから出土した。139は瓦器椀で器高が低い。146は土師質羽釜口縁部である。口縁端部肥厚する。

154から156は5B-3-O-Sから出土した。154は弥生土器壺口縁部である。大きく外反し端部は下方に垂下する。下端部には刻みが施される。内外面ナデ調整され、頸部には直線文が施される。155は長原式の晩期縄文土器鉢である。内外面とも磨耗が著しく、調整は不明である。体部から口縁にかけて直線的に伸びて端部は肥厚する。156はミニチュア土器の蓋である。摘み部分は上方に捻り出され、周囲に4方向の小孔を穿つ。148, 150, 162から164は5B-4-O-Sから出土した。148, 150は布留式土器である。高杯の杯部・脚部の形態や接続技法など新しい段階の要素をもつ。148は脚部を杯部に挿入する挿入接手法により接合される。150も同技法により接合される。脚部は下外方に下ったのち、穏やかに屈曲し、口縁部でわずかに外反する。162から164は弥生中期土器である。162は大型器台で、口縁部には4条の凹線が巡り、5個を単位とした円形浮文を貼り付ける。体部下方には6方向の円形透かしを配置し、体部中央付近にかけて16条の凹線が見られる。外面口縁端部にかけては刷毛目調整される。内面はナデ調整されるが、口縁部周縁は簾状文が施される。163は内外面とも磨耗著しく調整は不明である。164は磨耗著しいが口縁部付近に凹線2条が施される。149は5B-5-O-Dから出土した小型丸底壺である。体部最大径は口径よりわずかに大きく、口頸部は上外方に伸び、体部は扁球形で最大径が体部の中心にあり、底部はわずかに尖り気味である。外面刷毛目調整され、内面はケズリ調整される。158から161は5B-6-O-Oから出土した弥生中期土器である。158は無文の広口壺である。159, 160の底部は外面ミガキ調整される。161は飯蝸壺で、内面ナデ後ケズリ調整される。141, 151, 160は5B-7-O-Sから出土した。141は土師器小皿である。151は弥生中期細頸壺である。外面は口縁部に2条の凹線を施し、体部上位にかけて直線文を施す。体部中央部には2条の直線文と格子状の直線文が施される。また体部下半部には不規則な波状文施される。底部欠損するが、底部近くはケズリ調整される。内面はナデ後刷毛目調整される。152は弥生中期土器広口壺である。外面刷毛目調整され、内面は磨耗著しく不明である。

147は5D-1-OSから出土した土師質羽釜である。13C代のものか。144は5D-2-OSから出土した瓦器碗である。器高も高く、高台径も大きい。142は5D-3-OSから出土した土師器小皿である。136, 145は5D-4-OSから出土した。136は瓦器碗で、高台径も大きく器高も高い。145は青磁で口縁端部弧状に肥厚する。157は5D-8-OOから出土した。一見して縄文晩期や弥生前期土器と見間違えが弥生中期の鉢である。外面刷毛目調整され、内面ナデ調整される。153は5D-9-OSから出土した弥生中期広口壺である。外面底部付近ミガキ調整され、体部から口頸部まで刷毛目調整される。内面はナデ調整される。137, 138, 143は5D-10-OWから出土した。いずれも瓦器碗で、137は内面見込み部に刷毛目調整度が残る。刷毛目調整後口縁部にかけてミガキ調整される。高台は低く、貼り付け高台の断面は三角形に近付いている。138は内面のミガキに粗雑化の感があるが、高台部径や器高は大きく高い。143はやや小さめの高台貼り付けるが口径は他と変わらない。

第6項 6区

位置と層序

6区は1区の東側約350m, 10区の西側約45mの現道路南側に位置している。現況は更地で、調査区の形状は幅約7m, 長さ約13mの長方形を基本とする。

基本的な層序はI層0.3m, II層0.3m, III層0.95m, IV層0.15m, V層0.45mをはかる。遺構面は5面あり、第1面・第2面をII層中で確認し、第3面・第4面をIII層中で確認し、最終第5面をV層中で確認している。

遺構

第1面は中世遺構面である。耕作関連小溝群を検出したこととまる。溝幅もまちまちで攪乱の影響を強く受け遺存状態が悪いため図示し得ない。

第2面でも耕作に関連する溝群を検出した。方向性は第1面と変わらず、西南西から東北東方向を示す。全体に溝の幅が広く最大1.0mをはかり、深度も最大0.2mをはかる。

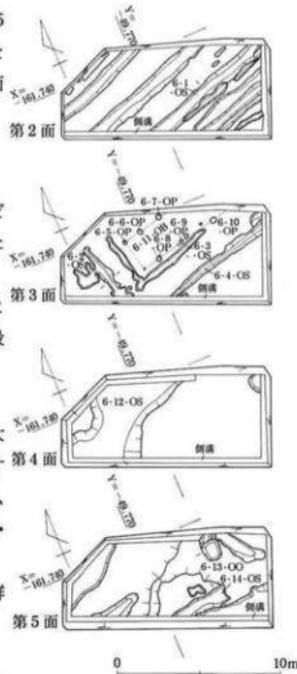
6-1-OS

調査区中央から東よりにかけて検出した。検出長8.6m, 最大幅0.95m, 深度0.19mをはかる。断面形状は基本的に皿型を示すが、東片部はテラス状に段をなす。埋土は灰黄色砂質土が堆積し、底面には灰黄色土がブロック状に堆積する。埋土中からは土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・土師質羽釜が出土している。

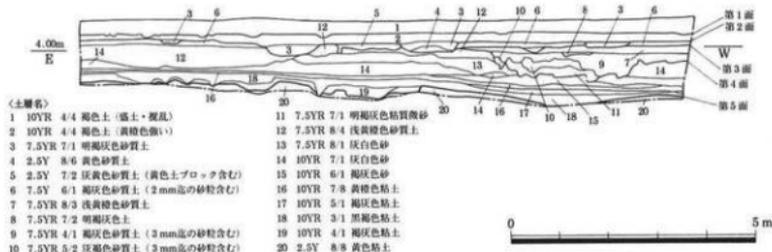
第3面では溝のほかピット群を検出した。これら一連の遺構群は掘立柱建物を中心とした遺構群に集約されるようである。

6-2-OS

調査区西側で検出した。方向は南南東から北北西を示す。形状



第35図 6区遺構配置図 (1/300)



第36図 6区調査区断面図 (1/100)

は極めて歪である。検出長4.2m、突出部を除いた幅0.45~0.8mをはかる。深度は溝幅に比べて浅く、0.1mをはかる。断面形状は皿型で褐灰色砂質土が堆積する。埋土中から土師器・須恵器・瓦器片が出土した。

6-3-O S

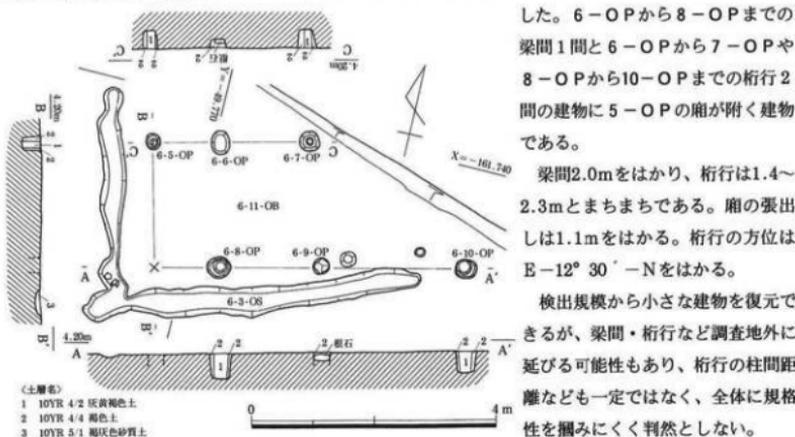
調査区中央部で検出した。方向は東北東から西南西に伸び、直に屈曲し、北北西に伸びる。全体の形状はL字形を示す。検出長約9.0m、幅0.45m、深度0.09mをはかる。断面形状は皿型で褐灰色砂質土が堆積する。埋土中から土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦片が出土した。

6-4-O S

調査区中央から東よりにかけて検出した。方向は東北東から西南西方向に伸び、直線的である。検出長7.4m、幅約0.5m、深度0.1mをはかる。断面形状は皿型で、埋土は明褐色灰色砂質土が堆積する。埋土中から土師器・須恵器・瓦器が出土した。

6-11-O B

調査区中央部で検出した。6-5-O Pから6-10-O Pまでの掘立柱柱穴群により構成される。調査地の狭さもあり、建物全てのプランを検出できていない。南北1間×東西2間と西側の南部分を検出



第37図 6区 6-11-O B 平面・断面図 (1/80)

した。6-O Pから8-O Pまでの梁間1間と6-O Pから7-O Pや8-O Pから10-O Pまでの桁行2間の建物に5-O Pの廂が附く建物である。

梁間2.0mをはかり、桁行は1.4~2.3mとまちまちである。廂の張出しは1.1mをはかる。桁行の方位はE-12°30'-Nをはかる。

検出規模から小さな建物を復元できるが、梁間・桁行など調査地外に延びる可能性もあり、桁行の柱間距離なども一定ではなく、全体に規格性を掴みにくく判然としにくい。

柱穴の規模は直径0.3~0.4mをは

かる。深度は0.15～0.4mをはかる。柱穴を断割り確認した柱痕の径は0.15～0.2mをはかる。埋土は褐色土系の土層が堆積する。埋土中から須恵器・土師器・瓦器片が出土した。概して根石の存在する柱穴の深度が浅く、9-O Pのごとく柱穴の底部全面が覆われる礎石状の根石も認められる。

建物を囲う形で存在する溝6-3-O Sは建物に付随する雨落ち溝である。また6-2-O Sと6-4-O Sはそれぞれ直線的に伸びて調査地外で合流する可能性もある。建物の方位や囲う溝の方位はほとんど変わらない。埋土や包含する遺物から見ても同時存在したものと云えよう。各溝の西と南に建物や柱穴が見られないので、建物と敷地を囲い区画する溝と考えられるが、幅もさほど大きくなく、深度も深くない。扉や櫓の痕跡も確認されていない。調査により確認された範囲は極めて小さいもので、どのような規模の集落の一部かは今後の調査の課題と云えよう。

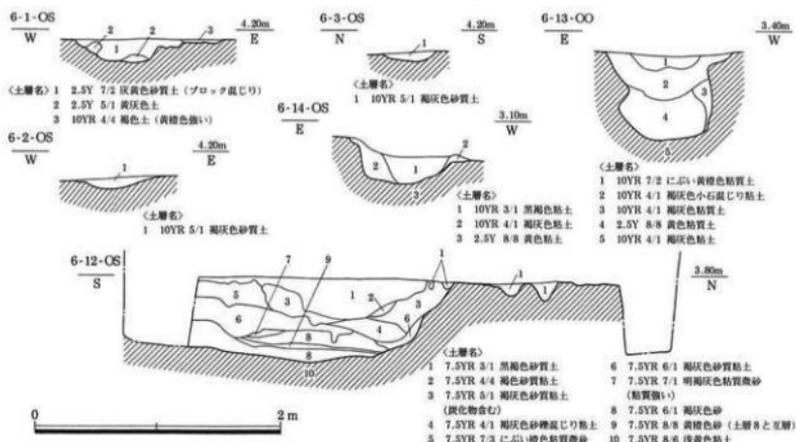
第4面では比較的大きく深い溝を検出している。ほかに北西隅部で浅い落ち込みを確認したが、自然地形の起伏であった。遺構面全般に起伏が顕著に認められる。

6-12-O S

調査区中央から西よりにかけて検出した。ほぼ南西から北東方向に伸びる。平面形状は直線的ではない。両片部は屈曲し中央部分で括れる。検出長8.5m、幅約3.0～4.5m、深度0.7mをはかる。断面形状は基本的に浅い碗型を示す。埋土は下層が褐灰色と黄橙色の砂層が互層をなし、中層には褐色土系の粘土・微砂が堆積する。上層には褐灰色の砂質および礫混じりの粘土が堆積し、最上層には黒褐色砂質土が堆積する。

また断面観察によれば溝北側片付近に窪みが見られる。埋土が溝最上層埋土と同じであることから考えて、溝をオーバーフローした水が大きな範囲で流れていたと考えられ、本来的には溝そのものの規模も大きな流路状のものであったのかもしれない。遺物は土師器・弥生土器片が出土した。

第5面はIV層の暗色土層を除去して検出している。暗色土層は東側に向かって比高を上げる。検出した遺構には溝・土坑がある。



第38図 6区 6-1-OS, 6-2-OS, 6-3-OS, 6-12-OS, 6-13-OO, 6-14-OS断面図 (1/40)

6-13-00

調査区東側の北よりで検出した。平面形状は隅丸方形を示す。長径1.2m、短径1.0m、深度0.7mをはかる。断面形状は基本的にU字型を示すが、途中で段を有し、下半部は袋状を示す。埋土は下半部に黄色・褐色を示す粘質土が堆積し、上半部には小石混じりの褐色粘土とにぶい黄褐色粘質土がレンジ状に堆積する。遺物の出土はない。

6-14-00

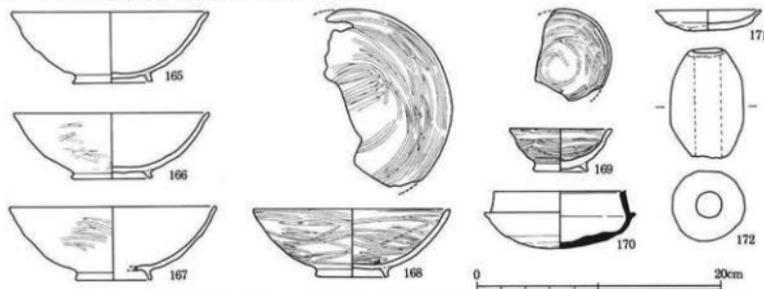
調査区東側の南よりで検出した。西南西から東北東方向に伸びるが、東側中央付近で消滅する。形状はわずかに屈曲するが、直線的である。検出長3.7m、最大幅1.0m、深度0.38mをはかる。断面形状は碗型で東側片部の比高が高い。埋土は両片部に褐色粘土が堆積し、中央部にはIV層の黒褐色粘土が堆積する。遺物の出土はない。

遺物

包含層中からは170、172が出土した。170はIII層から出土した須恵器杯身である。立上り部はわずかに肥厚しながら鋭角的に高く立上り、端部は面をなす。受部は水平で短く、基部は篋ケズリ調整されわずかな凹面を成す。底部は球形で平坦面はない。外面篋ケズリ調整され、内面ナデ調整される。172は中空の大型土鍾である。両端部や外面を観察すると磨耗痕が顕著に見られる。これは漁具の鍾として使用される際の縄によるものである。

遺構からの出土遺物は細片が多く図示し得たものは少ない。遺構出土遺物は瓦器が最も多い。口径や高台径も大きいものが多く、器高や高台高も高いものが多い。全般に大きくて深いがっしりとした古手のものが多い。

165、169は6-11-OB建物を構成する柱穴群中から出土した。165は6-7-O-Pから出土した瓦器碗である。磨耗著しく内外面の調整は不明である。器壁は薄いが口径や高台径も大きく器高や高台高も高い。169は6-9-O-Pから出土した小型の瓦器碗である。口径と内底面の深さはともに通常の瓦器碗のほぼ半分をはかる。口径のほぼ半分の径の高台が付く。高台高もあり、器壁も厚く、全体ががっしりとしたもので、内外面ともナデ調整後密にミガキ調整される。166、167は6-1-OSから出土した。166は口径や高台径も大きく、器高も高い。器壁も厚く高台もがっしりしている。167は口径がかなり大きく、器高も高いが、全体としてはやや小さめで高い高台が付く。168は6-4-OSから出土した。内外面ともに比較的密にミガキ調整される。



第39図 6区包含層・遺構出土遺物(1/4)

第7項 7区

位置と層序

7区は1区の東側約180m, 10区西側約175mの現道路北側に位置している。現況は更地である。調査区の形状は幅約7m, 長さ約26mの長方形を基本とする。今回の全調査範囲のほぼ中間地点に位置しており、後背湿地部分にあたると考えられる。

基本的な層序はⅠ層が0.4m, Ⅱ層が0.3m, Ⅲ層が0.65m, Ⅳ層が0.1m堆積する。遺構面は第1面・第2面をⅡ層中で確認し、第3面・第4面をⅢ層中で確認した。第4面は暗色土層であるⅣ層上面で検出している。調査区中央から東側にⅣ層はなく、第3面より切り込まれる大きな落ち込みが認められるのみである。

遺構

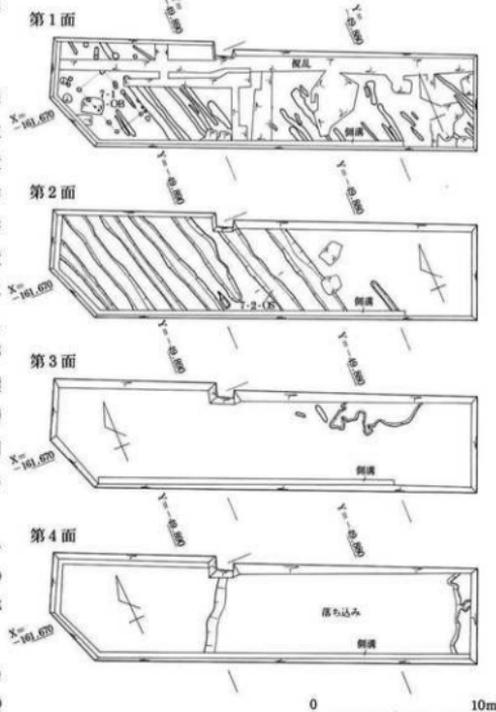
第1面は攪乱が顕著に見られる。遺構は耕作関連小溝群と柱穴群を検出している。小溝群は南南東から北北西方向に伸びる。幅や長さともまちまちで深度は0.1m未満のものが多い。畦畔の検出はない。埋土中から中世遺物の出土を見ている。柱穴群では1棟の建物を復元確認した。

7-1-OB

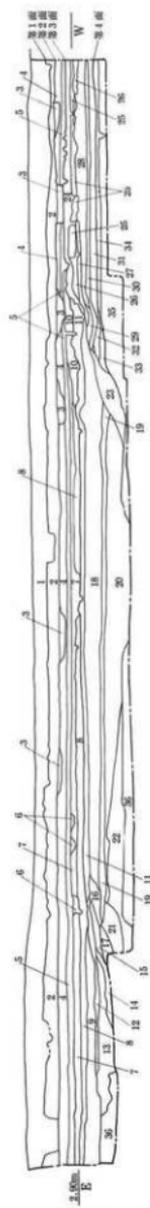
調査区西側で検出した柱穴群により構成される建物である。東側には第1面検出の小溝群の中でもやや幅広の溝が位置しており、建物の立地する一角には耕作関連小溝群は殆ど認められず、建物と耕作地の間を隔絶している。立地する位置を断面図の観察から見てみると、建物は安定した土層上に立地しているのに対し、耕作地は落ち込み上に立地しているのが見られる。調査区全般に安定した立地環境となるのは中世段階であり、堆積土層も水平堆積が見られるものの、土地利用に関しては適宜選別され利用されていると云えよう。

梁間1間, 桁行2間分の規模を確認しているが、北側にも柱穴が認められるので、廂あるいは別棟の存在する可能性がある。

柱穴の規模は0.2~0.25mの小さなものであり、柱痕の径も0.1m程度のものである。深度も0.15~0.4mとまちまち



第40図 7区遺構配置図 (1/300)



第41図 7区調査区断面図(1/100)

〈土層名〉

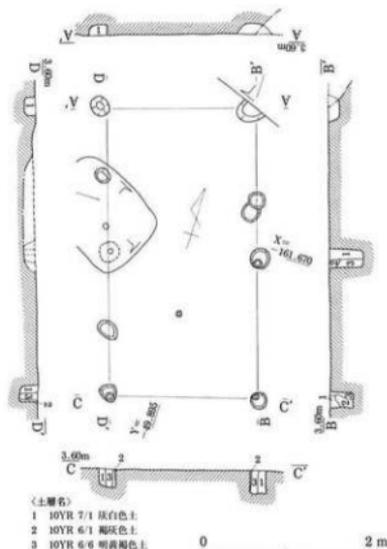
- 1 腐土・埋土
- 2 10YR 8.4 褐色腐土
- 3 10YR 8.1 灰白色砂質土 (黄褐色土層下)
- 4 10YR 8.8 黄褐色土
- 5 10YR 4.1 褐色粘質土
- 6 7.5YR 8.1 褐色粘質砂土 (黄褐色土層下)
- 7 7.5YR 5.4 に近い褐色粘質砂土 (黄褐色土層下)
- 8 7.5YR 4.2 褐色粘質砂土 (黄褐色土層下)
- 9 7.5YR 8.2 褐色粘質砂土 (黄褐色土層下)
- 10 10YR 7.8 黄褐色粘質砂土

- 11 7.5YR 7.8 黄褐色粘質砂土
- 12 10YR 8.8 黄褐色粘質砂土
- 13 10YR 5.2 灰褐色粘質土
- 14 10YR 8.3 灰褐色粘質土
- 15 7.5YR 8.9 黄褐色粘質砂土 (黄褐色土層下)
- 16 7.5YR 8.9 黄褐色粘質砂土 (黄褐色土層下)
- 17 7.5YR 8.1 褐色粘質砂土 (黄褐色土層下)
- 18 10YR 8.8 黄褐色粘質砂土 (黄褐色土層下)
- 19 10YR 8.1 灰白色粘土 (灰白色粘土)
- 20 50Y 7.8 黄褐色粘質砂土 (灰白色粘土)

- 21 10YR 5.2 灰褐色粘土
- 22 2.50Y 7.1 暗灰色〜灰褐色土
- 23 50 7.1 暗灰色粘質砂土
- 24 10YR 8.4 黄褐色粘質砂土
- 25 15YR 7.8 黄褐色粘質砂土
- 26 50 7.1 暗褐色粘土
- 27 5Y 8.2 灰白色粘土
- 28 10YR 6.6 黄褐色粘質砂土 (粘性強い)
- 29 2.5Y 8.2 灰白色粘質土
- 30 10YR 5.2 灰褐色粘土

31 10YR 7.1 灰白色粘土 (黄褐色土層下)

- 32 10YR 7.1 灰白色粘土
- 33 10YR 6.6 黄褐色粘土
- 34 10YR 7.2 に近い黄褐色土
- 35 50 7.1 暗褐色粘土
- 36 50 7.1 暗褐色粘土



〈土層名〉

- 1 10YR 7.1 灰白色土
- 2 10YR 6.1 褐色土
- 3 10YR 6.6 黄褐色土

第42図 7区 7-1-OB平面・断面図(1/60)

である。埋土は掘方に灰白色土・褐灰色土が充填される。埋土中からは土師器・瓦器の細片が出土した。

柱間距離は梁間・桁行ともに基本的に1間1.8mをはかるが、桁行距離にはバラツキがある。復元される建物も少し歪である。方位はN-18°-Wをはかる。

第2面では第1面と同様の耕作関連溝群を検出した。方向性は第1面と変わらないが、溝幅は広く作付け種の違いも考えられる。5A区第2面と同一の遺構面である。検出幅0.5~1.1m、深度0.15m、溝間距離0.7~1.3mをはかる。埋土は灰白色砂質土が堆積する。埋土中からは土師器・須恵器・瓦器の細片が出土している。

7-2-OS

調査区中央で検出した。南南東から北北西方向に伸びる。検出長7.0m、幅1.1m、深度0.14mをはかる。断面形状は皿型で、埋土は灰白色砂質土が堆積する。埋土中から瓦器の細片が出土した。

第3面では調査区東側北よりで浅い不定形の落ち

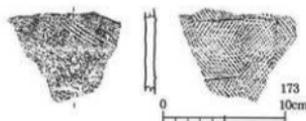
込みを確認した。断面観察によれば中央部から東側の大きな落ち込みは第3面から切り込まれる。この落ち込み最上層付近では水平堆積が認められ、東側よりに低い畦畔状の高まりも認められることから、埋没の最終段階で耕作地化されたことが窺える。この耕作地面の起伏と考えられる。埋土は黄橙色系の微砂が堆積する。深度は0.1m未満である。遺物は出土しなかった。

第4面は第IV層上面で検出した。中央部から東側に広がる大きな落ち込みが調査地の大半を占めている。落ち込み以外の遺構の検出はない。

落ち込み部のベース面は第IV層の黒褐色をはじめ黄橙色・青灰色系の粘土である。落ち込み最下層は炭化物混じりの灰白色粘土が堆積し、上位には黄橙色・灰白色を示す微砂が水平堆積している。第3面の最上層の堆積状況と合わせて考えると、小さな谷地形の埋没過程で人為的な整地行為が行われたのかもしれない。検出最大深度0.4mをはかる。埋土中から顕著な遺物の出土はない。

遺物

遺構からは図示し得る遺物の出土はない。173は第II層の包含層から出土している。器形は不明である。土師質で焼成は良好である。内面は黒褐色を呈し、粗い刷毛目調整が見られる。外面は暗灰色を呈し、綾杉文状のタキで調整される。全体に磨耗著しい。



第43図 7区包含層出土遺物(1/4)

第8項 8区

位置と層序

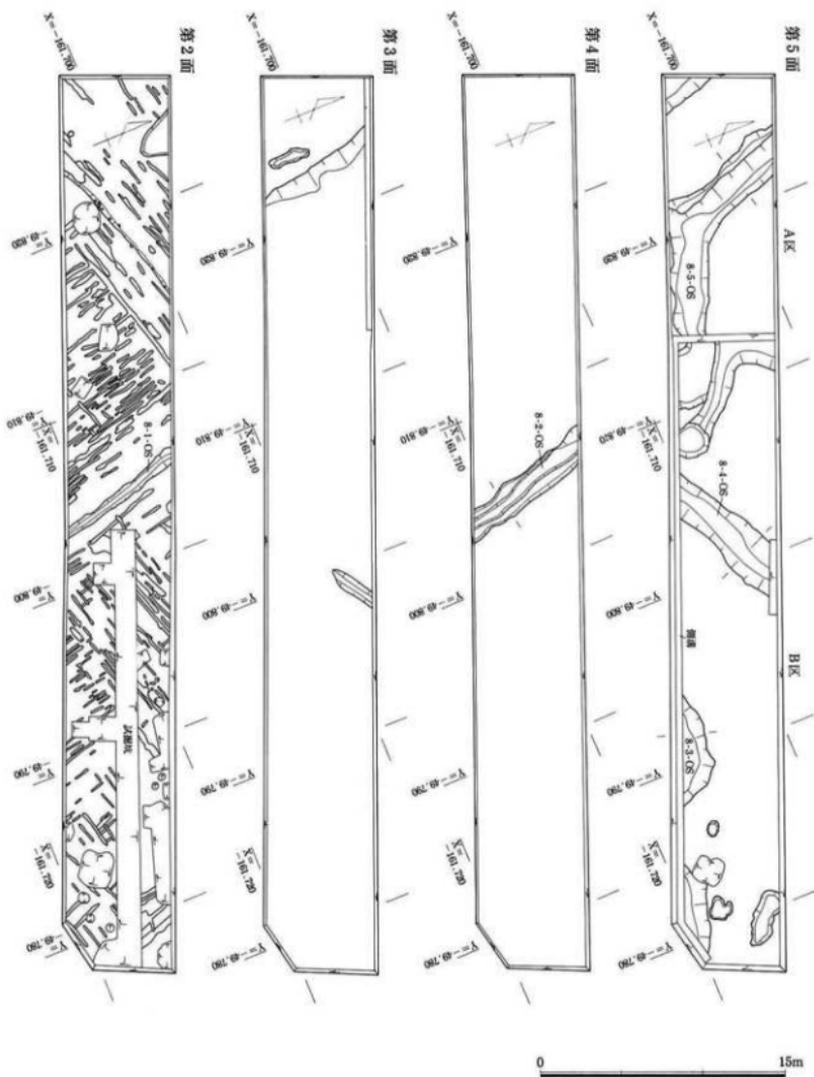
8区は1区の東側260m, 10区の西側65mの現道路北側に位置する。現況は更地である。調査区の形状は幅約7m, 長さ55mの長方形を基本とする。調査は現地での制約もあり2回に分けて行った。調査地は連続しており一括して地区名を付したが、便宜上A, Bの枝番を付している。各調査地の規模はA区約7×15m, B区約7×40mである。層位や検出した遺構面数も違うが、遺構面を整合させることができたので、報告では平面図・断面図を一括して図示し遺構面を記した。各個別の遺構面と層位の時代対照は第1表を参照願いたい。

基本的な層序はI層が0.4~0.75m, II層が0.3~0.45m, III層が0.3m堆積する。遺構面は第1面・第2面をII層中で確認し、第3面から第5面をIII層中で確認した。第6面についてはA区の第5面から下層のIII層中で自然流路を部分的に確認したにとどまる。調査区全体の面としては確認されていないが第6面とした。IV層は確認されていない。

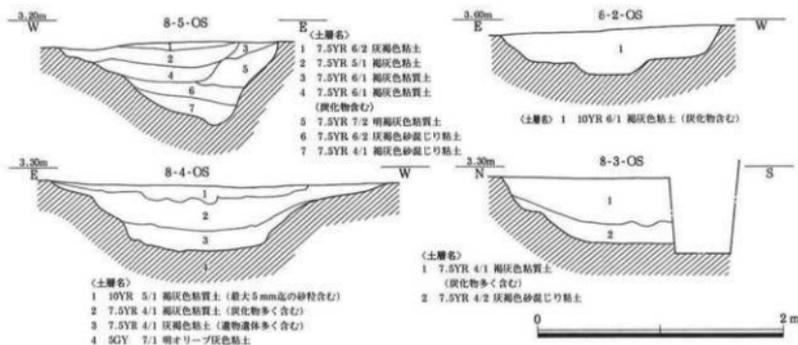
遺構

第1面では中近世耕作関連小溝群を検出したが遺存状態は極めて悪く図示し得ない。方向性や幅・深度などは第2面と基本的に変わりがない。耕作地区画も攪乱著しく判然としないが、概ね第2面に添うものであろう。

第2面では中世耕作関連小溝群を中心とした溝遺構群を検出している。方向性はまちまちで、南南東から北北西方向の溝と西南西から東北東方向の溝群が交互に検出される。調査区西端近くには段が検出



第44图 8区遺構配置図 (1/300)



第46図 8区 8-2-OS, 8-3-OS, 8-4-OS, 8-5-OS断面図 (1/40)

されており、段に沿っていわゆるピットが列をなしている。これなどは耕作地区画を明示する枕列と考えられる。中央部には幅広の区画溝などもあり、調査区内では少なくとも最低5つの耕作地区画が想定される。小溝群は概ね溝幅0.15m前後をはかり、埋土は黄色や灰白色土系の土層が堆積する。埋土中からは土師器・須恵器・瓦器などの細片が出土している。

8-1-OS

調査区中央部で検出した。南南東から北北西方向に直線的に伸びる。前述の段と調査地外で交わりと考えられる耕作地区画溝である。溝の東側0.5mと西側1.0mの範囲は小溝遺構のない無遺構地帯である。畦畔の存在が考えられるが、断面では平坦な堆積が見られるのみである。西側に幅広の畦畔を想定するが、第1面の耕作地区画造成時に削平を受けたものと考えられる。

検出長8.5m、幅0.5~0.9m、深度0.4mをはかる。断面形状は碗型で片部から底部の傾斜面に起伏が著しく見られる。埋土は小石混じりの灰白色砂質土と粘土が堆積する。埋土中から土師器・瓦器の細片が出土した。

現地調査担当者によれば、この溝は条里遺構の坪境溝の可能性があるとされる。幾分幅広な溝で、幅広の畦畔(道)が付くもので、耕作地区画の明確な事例であり、その当否については条里遺構の研究の成果を待ちたい。

第3面では段・土坑・溝を検出した。段は調査区西端よりで検出した。西側から東側に比高を下げ、比高差は0.1mをはかる。

段西側には長径2.5m、短径0.8m、深度0.1mをはかる溝状の不定形土坑があるが、段際の自然の起伏と思われる。断面形状は不規則な凹凸を示し、砂混じりの淡黄色粘質土が堆積している。遺物の出土はない。

溝は中央部北側で検出した。北東から南西方向に直線的に伸び、調査区中央部で攪乱され消滅する。検出長3.4m、幅0.8m、深度0.3mをはかる。断面形状は碗型で底部にわずかな起伏が認められる。埋土にはぶい褐色土が堆積し、埋土中から土師器・瓦器の細片が出土している。

第4面では溝1条を検出したのみである。遺構面は西側でわずかに比高を上げた後西に向かって下がるが、東側では平坦で中央に向ってわずかに比高を下げる。中央部は相対的にわずかに低く、遺構面には起伏が顕著に認められる。

8-2-OS

調査区中央部で検出した。南南東から北北西方向に直線的に伸びる。検出長9.5m、幅1.8m、深度0.4mをはかる。断面形状は基本的に深い皿型を示す。途中で段を有し、中央の流心部の形状も皿型となる。断面観察では付近の遺構面に耕作による踏み込み跡と考えられる顕著な起伏が認められるので、人為的に掘削された水路と考えられる。断面の形状から見れば、護岸の痕跡は確認されていないが、中心部下位の凹の幅が実際の溝幅と考えることもできよう。流心部の幅は0.6mをはかる。埋土は炭化物混じりの褐灰色粘土が堆積する。埋土中から瓦器碗が出土した。

第5面では溝を検出した。浅い土坑状の落ち込みもあるが遺物の出土はない。溝は直進するものや屈曲するものなど比較的幅広のものがある。

8-3-OS

調査区西側の南壁に接して検出した。南側は調査地外で形状は弧状を示す。検出長径6.8m、短径1.9m、深度0.54mをはかる。断面形状は北側片部のみを検出で判然としない。検出した片部斜面は段を有する。底部は平坦である。埋土は灰褐色粘土や炭化物を多く含む褐灰色粘質土が堆積する。埋土中からは須恵器・布留式土器が出土した。

8-4-OS

調査区中央部で検出した。南西から北東方向に直線的に伸びる。検出長9.0m、幅2.75m、深度0.54mをはかる。断面形状は深い皿型で段を有す。底部はほぼ平坦で、段ごとに外反し、片部にかけての段はテラス状を示す。埋土は下層に植物遺体を含む灰褐色粘土が堆積し、上層部には褐灰色粘質土が堆積する。埋土中からは弥生土器・布留式土器片が出土した。

8-5-OS

調査区西側で検出した。北北西から南南東方向に伸びた後屈曲し、南壁に沿って南東方向に伸び、再び南に屈曲して調査地外に伸びる。断面形状は最深部が東側に偏った深い不整な逆三角形を示す。片口の平面形状は歪で、特に西側の片口は歪で断面も西上がりの形状を示す。調査では断面図に西側の高まりを図示していない。検出長17.0m、幅1.8~3.5m、深度0.68~1.45mをはかる。埋土は上層に灰褐色・褐灰色の粘土と粘質土が堆積し、下層にも砂混じり粘土と粘質土が堆積する。埋土中からは布留式土器が出土した。

埋土の堆積状況を観察すると流心部が西よりに移動している様子が見られるが、流れの攻撃面の反対側が深く鋭角的な斜面を形作っており、人為的なV字溝と考えるのが妥当であろう。

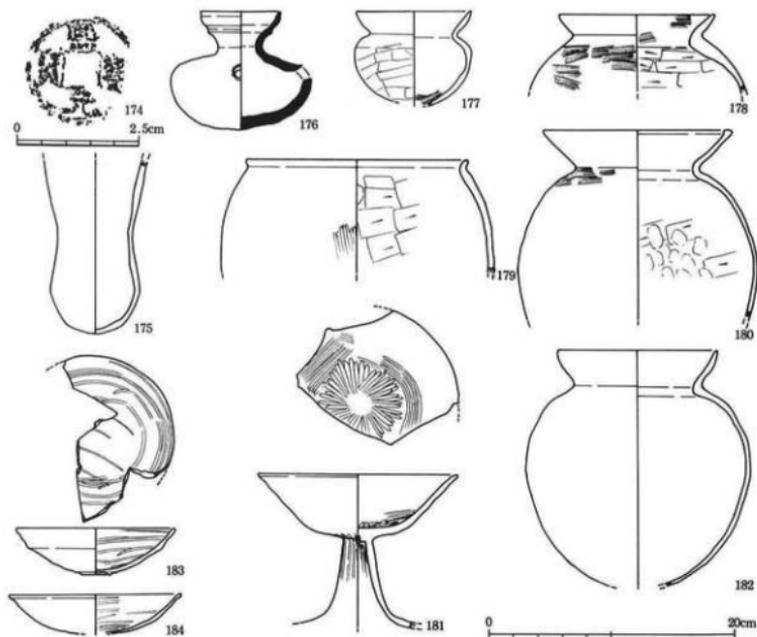
第6面はA区第5面より下層の土層堆積状況の確認のためトレンチ掘して確認したもので、面的には確認されていないが、自然流路8-6-ORを確認している。シルト・砂層の堆積が認められ、弥生中期土器の出土を見ている。

遺物

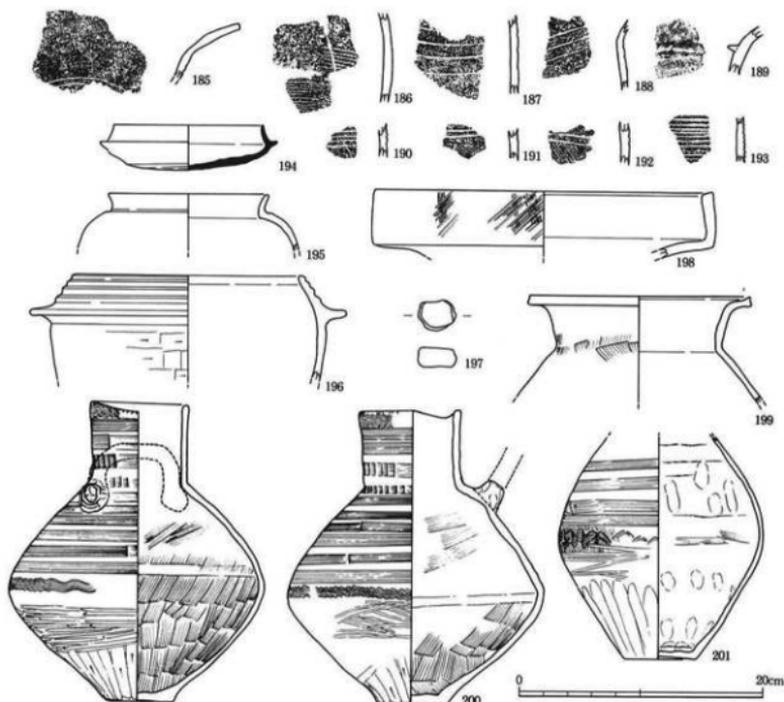
包含層からは174、185から199が出土した。174、196、197はII層出土である。174は黒寧元宝で、196は口縁部有段の瓦質羽釜で内面と罎下の体部外面篋ケズリ調整される。197は瓦転用の面子である。185から195、199はIII層出土である。185から193は多重沈線文を持つ弥生土器片である。189は内面に断面三角形の貼り付け凸帯を持つかは刷毛目調整後沈線篋描きされる。194は須恵器杯身で、195は土師器壺で頸部外面強く撫でられ凹状を示す。198は弥生土器壺で口縁外面斜格子文状の刷毛目が見られる。

199は弥生土器壺で口縁頸部は綾杉文状に刷毛目調整される。内面は磨耗著しく不明である。

その他は遺構出土遺物である。183, 184は8-2-O Sから出土した瓦器碗である。口径は小さく器高も低い。高台径も小さく断面三角形の簡略化された高台貼り付けられる。175, 176は8-3-O Sから出土した。175は丸底式の製塩土器である。器壁は薄く、磨耗も著しい。176は須恵器甕である。内面底部未調整で内外面ナデ調整される。体部下半部はケズリ後ナデ調整される。179は8-4-O Sから出土した弥生土器無頸壺である。内面寛ケズリされ外面ミガキ調整される。口縁部近くは短く外反して一条の凹線が巡る。178, 180から182は8-5-O Sから出土した布留式土器である。甕は体部球形で頸部は鋭角的に屈曲し口縁部はわずかに内湾気味に外上方へ伸びる。口縁端部が内面に肥厚し断面三角形を示す固体もある。体部内面ケズリ調整され、外面および口縁内面刷毛目調整される。高杯は脚部内面絞り目が見られ、脚部外面および杯部内面ミガキ調整されるほかはナデ調整される。杯部と脚部は挿入接手法により接合される。200, 201は第6面の自然流路8-6-O Sから出土した弥生中期土器である。200は把手付注口壺である。口縁端部に列点文施され、口頸部は波状文、直線文、藤条文が上位から施される。体部中央の波状文までには直線文が六段施される。体部下半部は底部付近ナデ後ミガキ調整され、ほかはナデ調整される。内面は体部下半部ナデ後刷毛目調整され、ほかはナデ調整される。把手接合部は内外面とも指押えされる。201の壺は体部内面ナデ調整されるが、刷毛目、指頭圧痕も見られる。体部外面は中央部刷毛目上に波状文、上半部に直線文施され、下半部ミガキ調整される。



第47図 8区包含層・遺構出土遺物(1/1・1/4)



第48図 8区包含層・遺構出土遺物(1/4)

第9項 9区

位置と層序

9区は1区の東側約350m, 10区西側約10mの現道路北側に位置している。現況は更地である。調査区の形状は幅約6m, 長さ15.4mの長方形を基本とする。

基本的な層序はI層が0.45m, II層が0.3m, III層が0.65~0.85m, IV層が0.1~0.15m堆積する。遺構面は第1面・第2面をII層中で確認し、第3面・第4面をIII層中で確認した。第4面はIV層上面で確認している。第5面はIV層を除去したV層中で遺構の検出を試みている。

遺構

第1面では中世の耕作関連小溝群を検出している。小溝群は西南西から東北東の方向性を持つ。調査区内で畦畔や方向の違う溝群の検出もなく、一つの耕作地区画に収まるものと考えられる。検出長0.5~3.3m, 幅0.1~0.15m, 深度0.05mをはかる。断面形状は皿型で、埋土は灰白色土が堆積する。埋土中から土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器などの細片が出土した。

第2面では中世の耕作関連溝群を検出している。溝群は第1面と同様に西南西から東北東の方向性を

持つ。幅広の溝と幅の狭い小溝とが混在して検出されており、作付け種の違う耕作の痕跡が見られる。調査区内では畦畔や方向性の違う耕作起痕もない。小溝の検出長0.5~2.5m, 幅0.1~0.15m, 深度0.05mをはかる。幅広の溝の検出長2.0~6.5m, 幅0.4~0.75m, 深度0.05~0.1mをはかる。溝間の幅1.5m前後をはかる。断面形状はともに皿型である。埋土とともに黄橙色土が堆積しており、埋土中から土師器・須恵器・瓦器の細片が出土した。

第3面では土坑群を検出している。平面形状は楕円や不整形のものが殆どである。長径0.3~1.95m, 短径0.1~0.95m, 深度0.08~0.27mをはかる。断面形状は碗型を示す。埋土は黄橙色土が堆積する。埋土中から土師器・須恵器・弥生土器の細片が出土している。

中世や古代と確証し得る遺物の出土もなく時期は判然としないが、包含層出土遺物で見ることが、古墳時代の遺構面かもしれない。

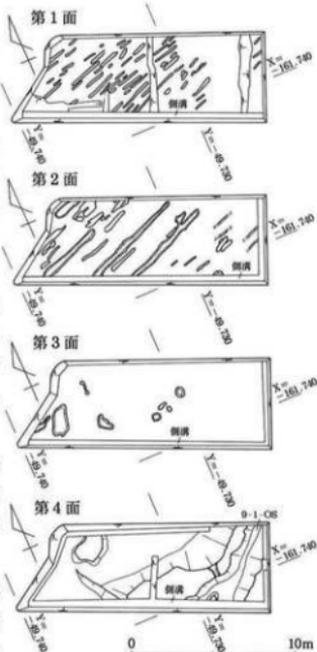
第4面では東側に段丘礫層が露呈する。西側は暗色土層IV層上面で遺構の検出を試みている。東側で礫層を削り込む溝1条と西側IV層までの間の自然地形を検出している。IV層も西側に下降しており、調査区全般に起伏に富んだ地形を示している。

9-1-O S

西側の段丘縁辺部の砂礫層上で検出した。北東から南西方向に直線的に伸びるが、南側壁面直前で二股に分れ一方はわずかに西方向に屈曲しながら調査地外に伸びる。西側の片部の平面形状は変化に富むが、東側は直線的である。段丘縁辺部に沿いながら伸びて行くと考えられる溝である。

検出長6.5m, 幅2.0m, 深度0.5mをはかる。断面形状は基本的に皿型であるが、西側の片部平面形状と同様に、片口斜面や底部ともに起伏に富んだ形状を示す。埋土は褐色シルトが堆積する。埋土中から弥生中期土器が出土した。

第5面は西側のIV層を除去し、東側は段丘面に沿って遺構検出を試みたが、段丘面の地形の起伏を確認したにとどまる。西側は地形的に西に下降するものの基本的には水平堆積を示しており、IV層下の層中で遺構は検出されていない。



第49図 9区遺構配置図 (1/300)

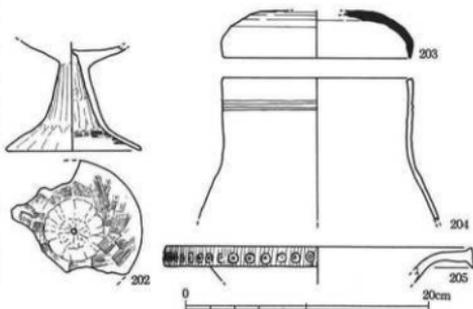


第50図 9区調査区断面図 (1/100)

遺物

202, 203, 205は包含層Ⅲ層から出土した。202は布留式土器高杯である。杯部の遺存部分は内外面ともナデ調整される。脚部外面ナデ後ケズリ調整され、端部付近はナデ調整される。内面脚柱部には紋り目が見られ、脚裾部はナデ後刷毛目調整される。杯部と脚部は挿入接手法により接合される。203は須恵器杯蓋である。外面上位篋ケズリされる以外ナデ調整される。205は弥生土器壺である。口縁部は水平方向に近く外反し、端部は上・下方に肥厚し面を持つ。口縁端部の平坦面は簾状文を施した後円形浮文を貼り付ける。口縁部内外面はナデ調整される。

204は9-1-O Sから出土した弥生中期土器壺である。全体に磨耗著しい。内外面ナデ調整され、外面口縁近くに二条の凹線が施される。



第51図 9区包含層・遺構出土遺物(1/4)

第10項 10区

位置と層序

10区は1区の東側380mに位置しており、今回の調査区中最も東よりに設定された調査区である。立地環境からいえば段丘縁辺部に立地している。現地表面の標高は最も西側に位置する1区より約1.5m高い。現況は更地である。調査区の形状は幅約6m、長さ約20mの長方形を基本とする。

基本的な層序はI層が0.6m、II層が0.75m、III層が0.35m堆積する。IV層はない。遺構面は第1面・第2面・第3面をII層中で確認し、第4面・第5面をIII層中で確認した。

遺構

第1面では耕作関連小溝群と耕作地を区画する幾分幅広の溝1条を検出した。調査区東半部は段丘礫層が露呈する。区画溝から東側では遺構の検出はない。西南西から東北東方向に伸びる小溝群には溝間の距離が0.8~1.2mをはかる広いものもあり、作付け種の違いによる起痕が混在している。検出長0.5~4.4m、幅0.1~0.15m、深度0.05mをはかる。埋土は灰白色土が堆積する。埋土中から土器・須恵器・瓦器・陶磁器の細片が出土した。

10-1-O S

調査区中央から東よりで検出した。小溝群とほぼ同一方向の西南西から東北東方向に伸びる。直線的には伸びず、西側で南方向にわずかに屈曲している。調査区東半部は検出面で段丘礫層が露呈しており、段丘礫層上に穿たれた水路である。水路北側には耕作起痕が検出されておらず、幅1.0m程度の大畦畔(道)が付随するものと思われる。南側は段丘面にあたるが、検出した遺構面は平坦で、かなり削平を受けたものと考えられ、遺構の検出はない。検出長7.5m、幅0.8m、深度0.25mをはかる。断面形状は皿型で北側片部の標高が高い。埋土は灰白色土が堆積する。埋土中から土器・瓦器・陶磁器片が出土

した。

第2面では耕作関連小溝群とかなり幅広の溝1条を検出した。小溝群の方向性は第1面と同じ西西南から東北東を示すものと、わずかに北方向に向くものや、最大の溝幅0.5m、最大の溝間距離1.5mをはかる大きく間隔も広いものがある。北西隅部に耕作地区画が存在するのかも知れない。検出長0.5~3.3m、幅0.1m、深度0.1m未満をはかる。断面形状は皿型で、埋土は黄色土が堆積する。埋土中から土師器・須恵器・瓦器片が出土した。

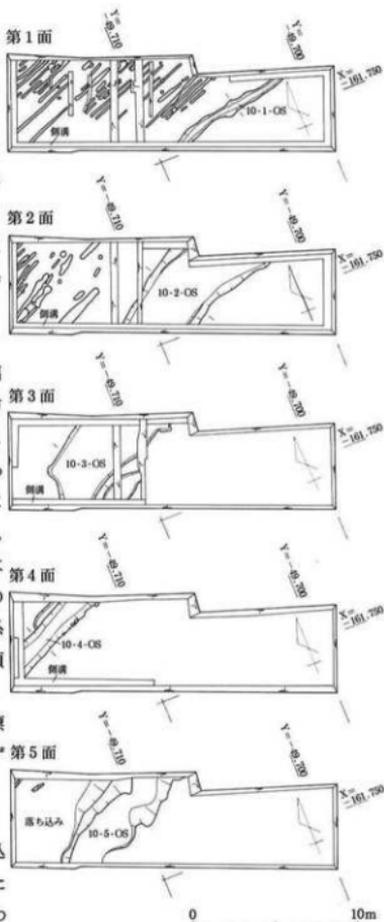
10-2-O-S

調査区中央から東よりにかけて検出した。かなり幅広の溝で南西から北東方向に伸びるが、途中東北東方向に屈曲し調査地外に伸びる。検出長9.0m、幅4.1m、深度約0.5mをはかる。断面形状は基本的に皿型であるが、底部の起伏が顕著に見られる。断面の観察によれば中央底部が盛り上がり、埋土の堆積状況から見て、流路の流心部は北から南に移動している。本来的には推定幅約3.0m程度の溝と考えられる。片側は南側の段丘側が高く、段丘礫層を削り込む。埋土は褐色土系を中心とした土層が堆積する。埋土中から土師器・須恵器・瓦器などの細片が出土した。

第3面ではかなり幅広の溝を検出した。遺構面の標高は約4mをはかり、東側の段丘に向かってわずかずつ標高を上げる。

10-3-O-S

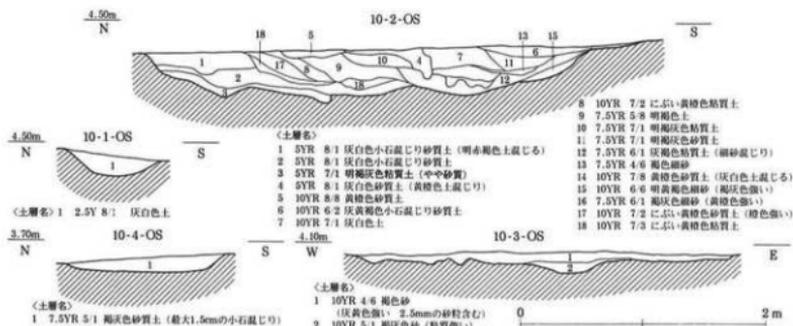
調査区西よりで検出した。平面形状は不整で落ち込み状を示す。西側片の平面形状は南西方向に突出した後南方向に引き溝幅を狭める。東側片の平面形状はわずかに東方向に振る。概ね南西から北東方向に伸びる



第52図 10区遺構配置図 (1/300)

(土層色)		1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12		13		14		15		16		17		18		19		20		21		22		23		24		25		26		27		28		29		30		31		32	
1	黄土	2	2.5Y 5/1 灰色砂質粘土	3	2.5Y 8/1 灰色土	4	2.5Y 8/8 黄色土 (灰白色砂)	5	10YR 7/1 灰白色砂質土 (黄褐色微く砂粒含む)	6	10YR 6/3 濃い黄褐色砂粒 (最大3mmの礫)	7	2.5Y 8/8 黄色砂 (最大1.5cmの小石含む)	8	10YR 7/3 濃い黄褐色土 (ワシダガ砂含む)	9	7.5YR 6/1 褐色砂質土 (最大1cmの小石含む)	10	7.5YR 7/8 黄褐色土 (明褐色土と混じる)	11	10YR 7/2 濃い黄褐色土 (褐色土と混じる)	12	7.5YR 6/1 褐色砂質土 (黄褐色微く砂粒含む)	13	7.5YR 7/1 明褐色砂質土 (最大1mmの礫)	14	7.5YR 7/1 明褐色砂質土 (褐色砂質土と混じる)	15	7.5YR 5/1 褐色砂質土 (最大1.5cmの小石含む)	16	7.5YR 5/2 褐色砂質土	17	10YR 7/2	18	10YR 7/2	19	10YR 8/3 黄褐色砂粒 (反黄褐色土と混じる)	20	7.5YR 6/2 反黄褐色砂 (最大2cmの小石含む)	21	7.5YR 5/1 明褐色砂質粘土	22	10YR 6/2 反黄褐色砂 (最大2cmの小石含む)	23	10YR 5/1 明褐色砂質粘土	24	10YR 6/3 濃い黄褐色砂粒	25	10YR 5/1 明褐色砂粒	26	10YR 4/1 反黄褐色土	27	10YR 6/2 反黄褐色砂	28	10YR 6/3 濃い黄褐色砂粒	29	10YR 5/1 明褐色砂粒	30	10YR 4/2 反黄褐色土	31	10YR 7/1 明褐色砂	32	2.5Y 8/8 黄色土		

第53図 10区調査区断面図 (1/100)



第54図 10区 10-1-OS, 10-2-OS, 10-3-OS, 10-4-OS 断面図 (1/40)

溝である。検出長8.0m, 幅3.1m, 深度0.16mをはかる。断面形状は浅い皿型を示す。中央部には約0.7mの幅の流心部が見られる。埋土は褐灰色砂が堆積する。埋土中から土師器・須恵器・瓦器などの細片が出土した。

第4面でも溝を検出している。遺構面の標高は約3.6mをはかり、検出面での段丘礫面の占める割合は非常に高い。

10-4-OS

調査区北西端部で検出した。南西から北西方向に直線的に伸びる溝である。検出長6.5m, 幅1.3m, 深度0.12mをはかる。断面形状は皿型を示す。埋土は褐灰色砂質土が堆積する。埋土中から土師器・黒色土器が出土した。

第5面では溝と溝底部から切り込まれる落ち込みを検出した。落ち込みについては狭い範囲での検出であり、大溝かもしれない。

10-5-OS・落ち込み

10-5-OSは調査区西よりで検出した。南西から北東方向に伸びる。東側は段丘礫面が露呈しており、段丘礫面の傾斜変換点斜面上位にあたる。西側片底部付近に落ち込みの切り込み面があり、西側に急激に落ち込んでいる。厳密にはこの落ち込みの埋没最終課程で形成された溝である。検出に充たっては落ち込みと同時に検出したので、西側片は遺存せず、落ち込みの斜面状を呈している。検出長9.0m, 幅約2.5m, 深度0.3mをはかる。断面形状は皿型を示す。埋土は小石混じりの明褐色砂が堆積している。埋土中からの遺物の出土はない。

落ち込みは段丘縁辺部に沿って流れる溝かもしれない。確認し得た深度は1.25mをはかる。堆積土層は北西方向に傾斜をもって堆積する。10-5-OSベース面は起伏があるものの傾斜はなく、埋土上層部の土層中より黒色土器片の出土を見ている。

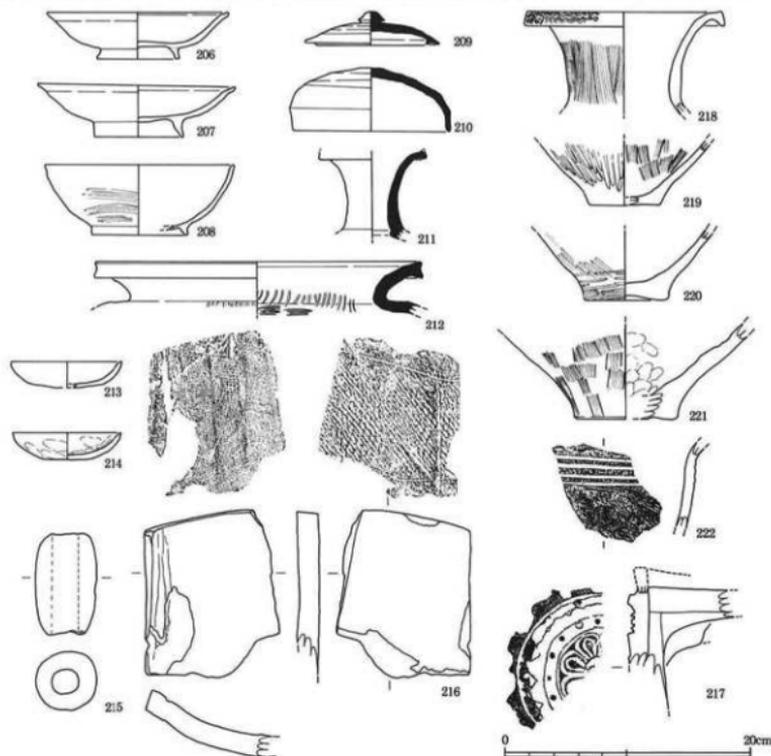
遺物

206から208, 211は10-4-OSから出土した。206, 207は高台付きの土師器碗で、口縁や高台ナデ調整される。208は黒色土器碗 (A類) である。外面高台付近まで密にミガキ調整される。211は須恵器瓶である。口縁部大きく外湾し、端部は上・下方に肥厚して面をなす。内外面ナデ調整される。

他の遺物は包含層III層から出土した。209、210は須恵器杯蓋で、209の宝珠つまみは幾分低い。210は器形歪で明確な稜もなく、口縁部高も低い。212は東播系須恵器甕である。口縁部内外面ナデ調整される。体部は外面タタキ調整され、内面は頸部付近に痕跡を残す。213、214は土師器小皿である。内外面はナデや指押えで調整される。215は土師質の中空の土鍾である。縄による磨耗痕が見られる。

216、217の平瓦・軒瓦は中世以前の古い様相を示す。216は平面形状縦長の台形状を示す平瓦で、四隅の一部分のみ出土した。凸面に砂の付着はなく、部分的に縄タタキ後ナデ消しされる。凹面も砂の付着はなく、長軸方向に布目の筋を顕著に残す。217は単弁8葉蓮華文軒丸瓦で、瓦当直径は推定16.0cmをはかり、瓦当厚は1.6cmをはかる。外区は内縁が0.7cmの幅で突出し、外縁までは平坦で、幅1.6cmをはかる。内縁から珠文外側の圏線までに鋸歯文を配し、珠文数は推定16を数える。内区中房の径2.8cmをはかる。中房内の蓮子数は不明である。内区径7.4cmをはかる。鋸歯文を有するが、内区径は小さく珠文数も少ない。花卉は鮮明であるが、奈良時代までは遡り得ない。平安後期迄の所産か。

218から221は弥生土器である。218は口縁端面を成し、端面に波状文二条を施す。219から221の底部には多様な調整が見られる。222は多重沈線文土器で刷毛目をナデ消し後篋書き沈線文施される。



第55図 10区包含層・遺構出土遺物(1/4)

第11項 石器・金属製品

金属製品

鉄釘 1点のみ出土した。228は2-3-O S出土の角釘で尖端部欠失する。残存長4.8cmをはかる。

石器

石鏃の材質はすべてサヌカイト製である。223, 225, 229, 230, 231は凹基無茎式石鏃である。抉りや逆刺の形態などに差異がある。223は1区包含層, 225は1区第1面, 229は8 B区包含層, 230, 231は4区包含層から出土している。

235, 236, 239は凸基有茎式石鏃である。明瞭な凸基はなく、基部のわずかな抉りと基部先端の形態により凸基式とした。235は10区包含層, 236は4区包含層からの出土で、5 B-5-O D埋土内出土の239は出土石鏃中最も大型のものである。残存長4.0cm, 幅1.7cm, 厚み0.6cm, 重さ2.84gをはかる。

224, 232, 233, 237は円基無茎式石鏃である。厚みは全体に薄手のものが多く、基部の描く弧の形態に差異がある。224は2区包含層, 232は3区包含層, 233は3区包含層, 237は5 C区包含層から出土している。

238は5 B区包含層出土の尖基無茎式石鏃で、基部は鋭く尖り、背面は基部からの剝離面を残し、先端部にかけての側縁剝離加工される。肉厚は非常に薄い。

234は4区包含層出土の石鏃未製品である。剝片尖端部に錐部を意識した両面からの剝離が認められるが完結していない。錐部以外は未加工である。226は2区第2面出土のサヌカイト製の石斧である。剝離面の両側縁に集中して細かな剝離が見られる。残存長8.6cm, 幅6.4cm, 厚み2.4cm, 重さ180.6gをはかる。

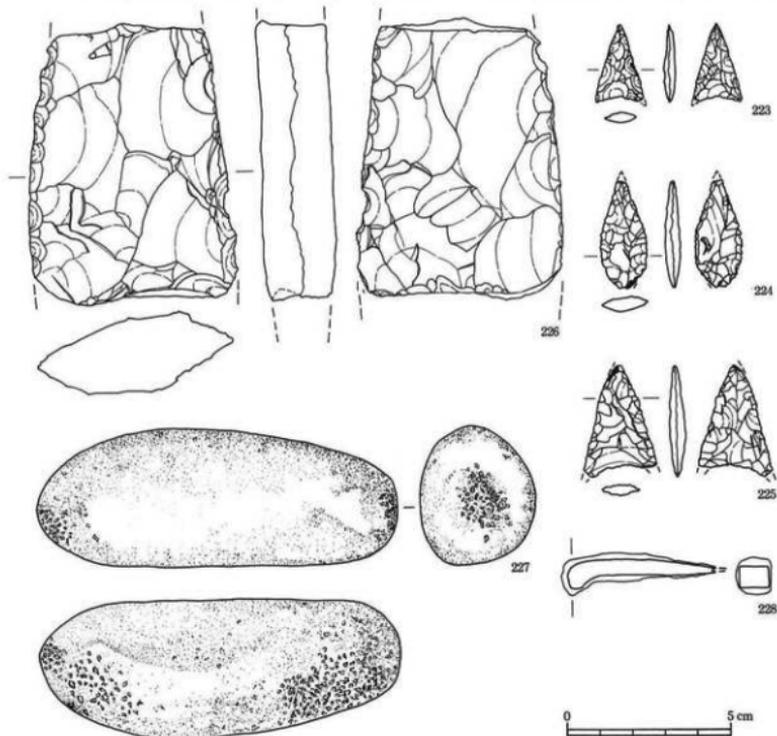
249から251はサヌカイト製の石槍である。249は9区包含層から出土した。全体に細く厚みがある。基部に自然面を残し、側縁は両面から剝離される。残存長11.0cm, 幅1.6cm, 厚み3.7cm, 重さ79.05gをはかる。250は10区包含層から出土した。端部と側縁は背面から剝離され、基部先端は尖り気味で歪である。251は10区第4面から出土した。基部は平坦で両隅が丸い。端部は背面から大きく剝離され鋭角的に尖り、側縁は両面から粗く剝離される。両面概ね平滑に剝離されるが、稜の位置は非対称であり、厚みを残す結果となっている。残存長5.8cm, 最大幅4.3cm, 厚み1.5cm, 重さ49.96gをはかる。

二次加工のある剝片には側縁の剝離加工の顕著なものもある。240は10区包含層から出土した。腹面・背面ともに平滑に剝離加工される。241は5 A区第1面から出土した。背面に階段状の剝離を残し、側縁は両面加工される。242は5 B-6-O Oから出土した。縦長剝片片側の長軸側縁を両面から剝離加工し弧状の刃部を造る。背面は自然面を残し、側縁から大きく剝離加工される。243は8 B区包含層から出土した。三側面に自然面を残す板状の剝片である。腹面側の側縁のみ直線的に加工する。244は3区第5面から出土した。側縁の剝離加工顕著で、小型の石匙の破片の可能性もある。245は8区包含層から出土した。薄く小さな剝片の側縁をわずかに加工する。246, 247は4区包含層から出土した。いずれも長軸方向の側縁を加工する。248は5 A区第2面から出土した。背面は自然面を残し周縁のみ加工される。腹面は周縁から大きく加工する。252は7区包含層から出土した。横長の剝片で背面・腹面の打点方向は非対称である。両面周縁はまばらに加工される。253は6区第2面から出土した。大きな縦長剝片で、三側縁と残りの側縁の一部に自然面を残す。打点反対側の側縁を中心に剝離加工される。

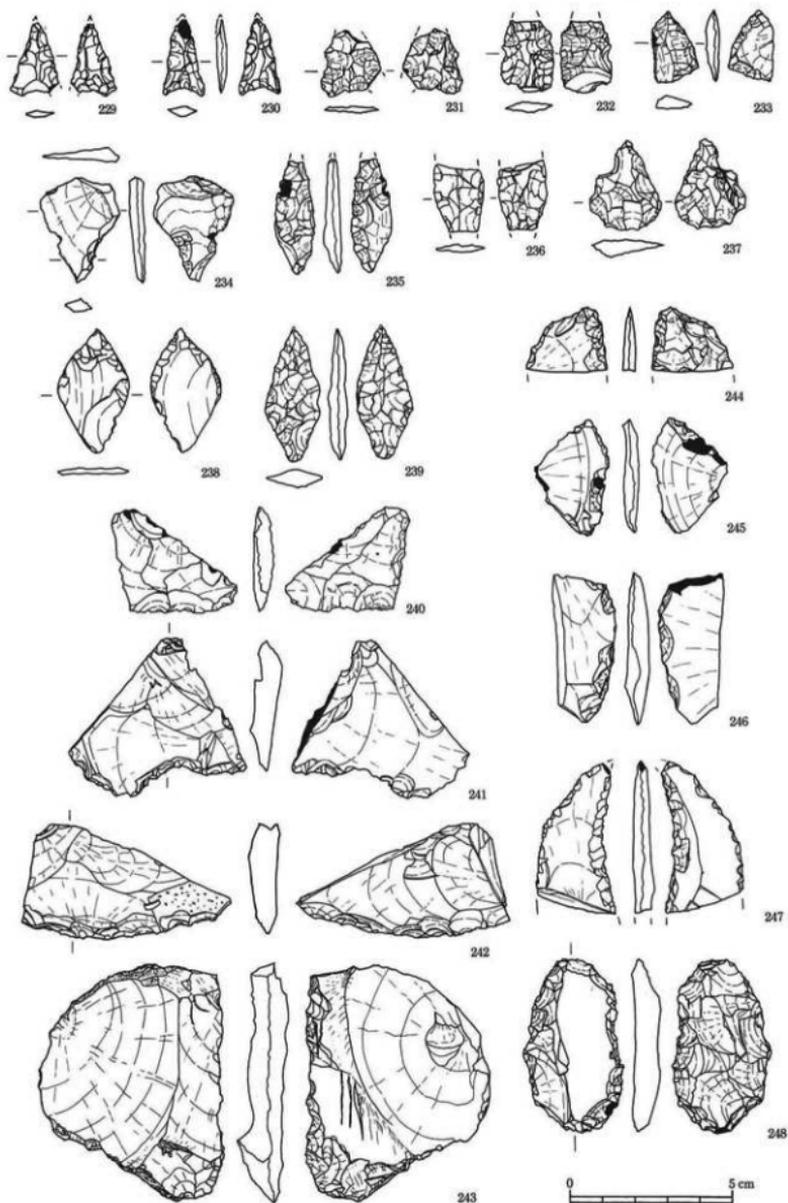
検出した敲石は全て砂岩を素材としており、敲打痕の明瞭なものを図示した。227は1区第1面から

出土した。砂岩素材の両端部に敲打痕を残す。257は3-7-O-Sから出土した。端部に向かって斜め方向の磨耗痕が見える。259は5 B区包含層から出土した。敲打痕は端部に狭小な面を成し、側面の磨耗も顕著である。260は5 B区包含層から出土した。端部には敲打痕と斜め方向の磨耗痕が見える。261は8-6-O-Sから出土した。端部は敲打痕による狭小な平坦面が連続し、側面には長軸に対し斜め方向の幅広い擦痕が見える。

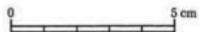
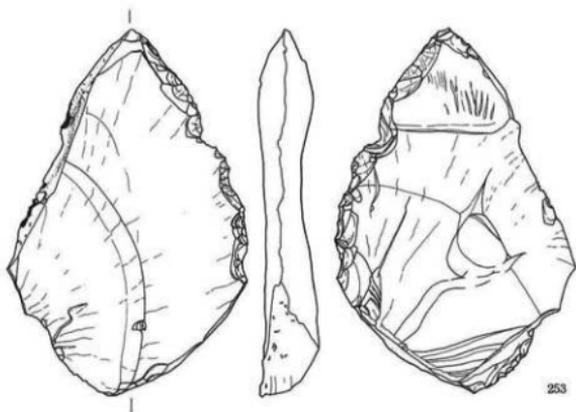
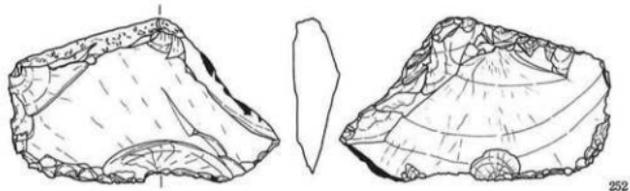
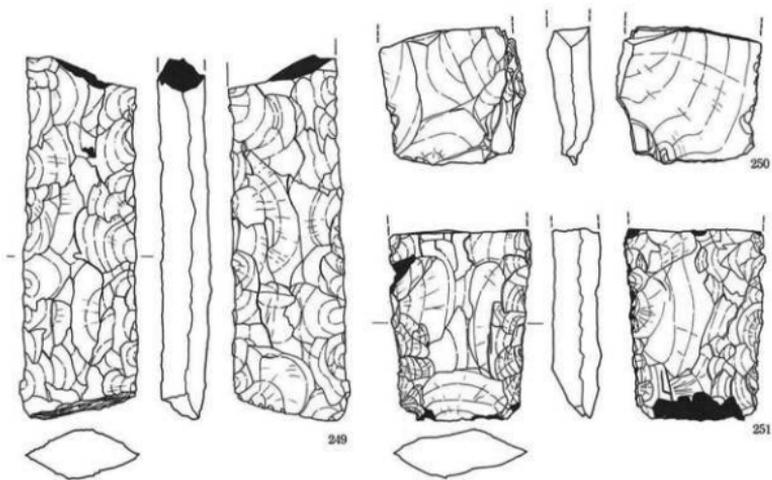
石包丁は破片が3点出土した。254は10-4-O-Sから出土した。刃部尖端破損後の使用による磨耗が見られる。255は7区包含層から出土した。破損が著しい。256は4区包含層から出土した。尖端部に磨耗が見られる。砥石は3点図示した。258は5 B-5-O-Dから出土した岩塊状の大きなものである。古墳時代前期の竪穴住居の出入口と考えられる部分近くの床面に接して出土している。長軸方向の尖端部にいたる中央付近まで大きく削られ、尖端部には敲打痕が見られる。削り取られ平滑化した部分には長軸方向に筋状の深い擦痕が密集しており、原礫面を残すと考えられる部分には金属器によると考えられる深く鋭い刺突痕が見られる。また礫面の稜部分には稜線と交わる方向の深い筋状の擦痕が集中して見られる。この岩塊状の全ての礫面には刺す・磨ぐ・研くのいずれかの擦痕が観察された。262は5 D-10-O-Wから出土した。263は8 B区包含層から出土した。いずれも板状の石材に擦痕が見られる。



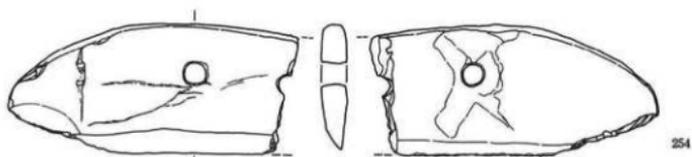
第56図 石器・金属製品 (1) (2/3)



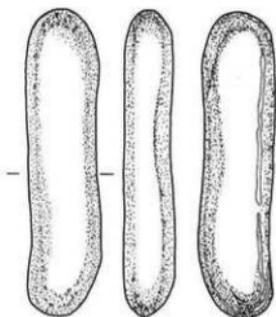
第57图 石器(2) (2/3)



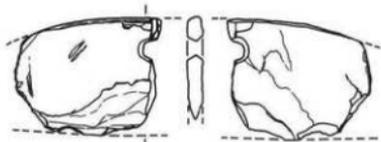
第58图 石器(3) (2/3)



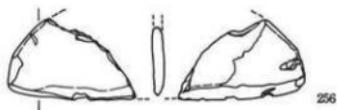
254



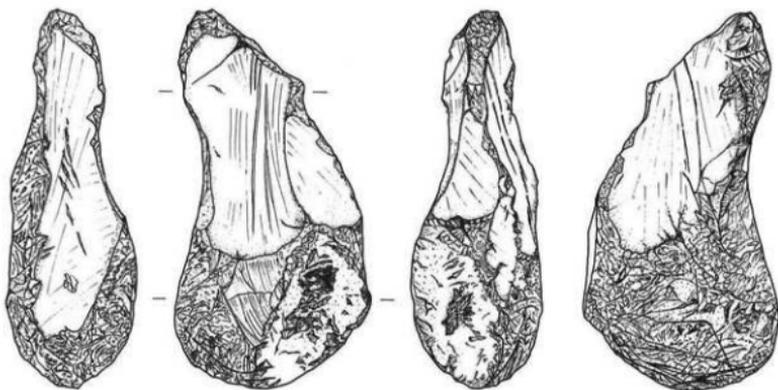
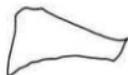
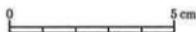
257



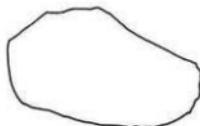
255



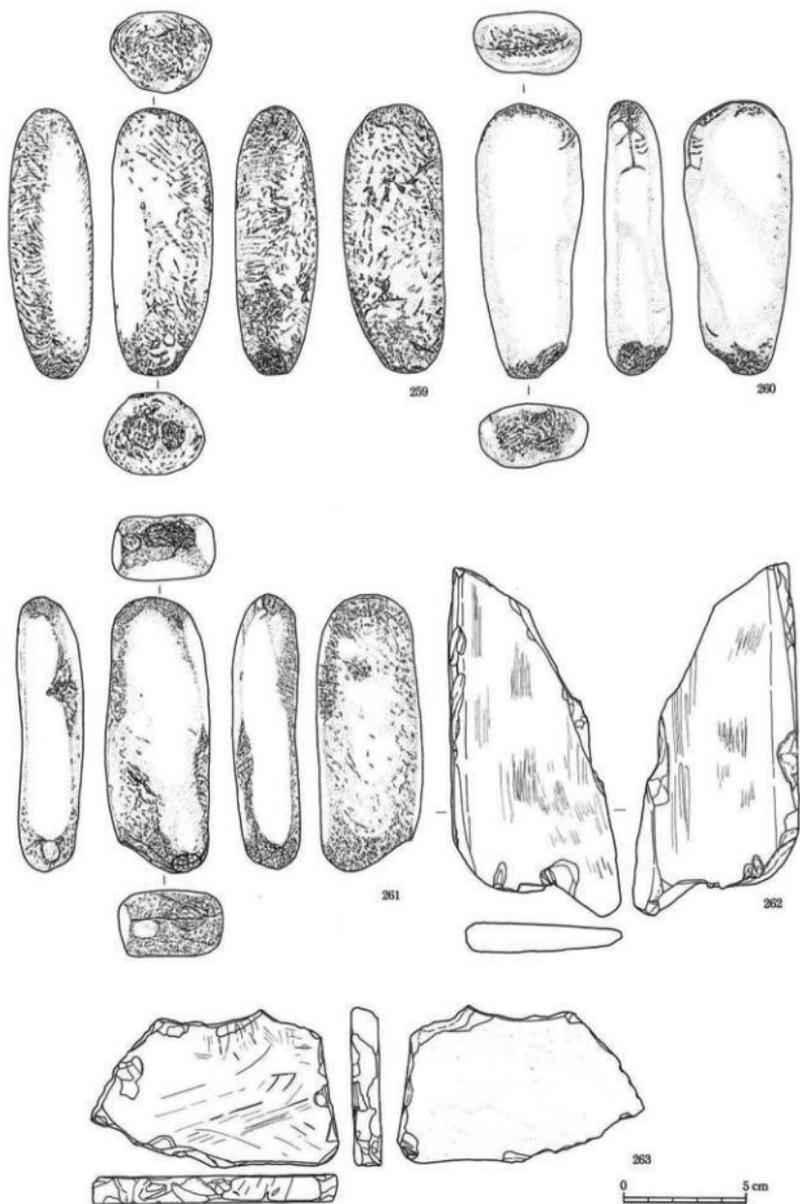
256



258



第59图 石器(4) (2/3 · 1/3)



第60图 石器(5) (1/2)

第4章 まとめ

調査は東南東から西北西方向に細長い現道路の幅に伴い、道路両側に調査区を設定し行っている。各調査区の立地環境は一律ではなく、地理的には「四ッ池遺跡」の集落が立地する通称「三光台地」の縁辺部から海側の砂堆に向かって調査区は配置される。台地側から段丘縁辺部・段丘下の低地・浜堤・後背湿地に分類される。

最も東側の10区は段丘縁辺部にあたり、9区は段丘と沖積地の地形変換地点にあたる。6区は段丘下の低地部にあたり、5D区・8B区は低地から浜堤への地形変換点にあたる。5B区・5C区・8A区は浜堤上にあたる。2区・3区・4区・5A区・7区は後背湿地にあたる。さらに最も西側の1区は海浜近くの沖積低地斜面上にあたり、海側へと下降して行く。

各調査区に分布する土層と標高を概観すると、概ねI層からIII層の上面の標高に各調査区の立地環境を投影した標高の変化が現れる。しかしI層・II層は堆積状況から見て、整地・客土されて水平堆積し平均化されており、各調査区の堆積土層から見れば、III層上面の標高の変化が最も立地条件の違いを投影したものと云えよう。(第6図参照)

各調査区で検出した遺構と遺構面を概観すると、中近世に該当するII層は整地・客土され水平堆積しており、安定した立地環境であったことがわかる。II層中では耕作関連溝群を主とする複数の遺構面を検出しており、土層形成時期にはほぼ全域にわたって耕作地化されている。

古代・古墳・弥生の各時代の遺構面が存在するIII層の堆積状況は各調査区とも一律ではない。それぞれに起伏に富んだ堆積状況を示しており、立地環境の不安定差を示すものと云えよう。III層中の各時代の遺構面から検出した遺構は溝が殆どで、検出遺構から見ても全般的に不安定な立地条件にあったと云えよう。しかし5B区のように浜堤上と考えられる調査区では狭小な高まり部分で古墳時代前期の竪穴住居や弥生時代中期の土坑を同一面で検出している。立地環境の良好な部分では生活の痕跡が残されており、地形的な狭小さゆえに面的な広がりも期待できないが、当該時期の人々の沖積地への進出は確実なものだと云えよう。

IV層の暗色帯は調査区全域に分布せず、6区・7区・9区に部分的に分布する。水平堆積せず概ね均一な層厚を示し、海側の西方向に下降して堆積する。層中に遺物の包含はないが近隣の調査で指摘されるごとくその形成時期は縄文時代と考えられている。V層も縄文時代に形成されたと考えられるが遺物の出土はなく、その正確な時期は判然としない。

調査にあたっては周辺地域での古植生・堆積環境の推定を目的として、微化石分析を行なった。分析は川崎地質株式会社へ委託した。3区17点、8区9点、10区10点の資料を採取し、花粉分析・珪藻分析を行なっている。分析の結果をもとに古環境の復元を試みており、次のことが指摘されている。

弥生時代頃の古環境

大阪湾周辺地域の花粉組成変遷と比べた場合、9区第4面(暗色帯上面)が弥生時代中期の生活面と考えられることと矛盾しない。珪藻分析からは3区・9区ともに、調査地点に海水の影響のある沼沢地や湿地が広がっていたと考えられる。花粉分析からはイネ科の出現率は低く、水田を示唆する要因はない。この時期には遺跡の周辺まで森林が迫っていた可能性がある。照葉樹林のほか、クロマツを要素とする海岸林などが周辺に分布していたと考えられる。

古墳時代から10世紀頃の古環境

10区10-5-O-S・落ち込み内では、イネ科花粉が高率で安定して出現する。周辺部を含めて水田耕作が連続して行なわれていたと考えられる。9区西側の南壁断面で観察された第3面下の落ち込み（平面では未検出）状の堆積土層からもイネ科花粉が高率で安定して出現する。これも周辺部を含めて水田耕作が考えられる。

分析の結果から弥生時代頃には9区の段丘下の低地部や3区周辺の湿地部は海水の影響下にあり、稲作をこれらの地域で全面的に行なうことは不可能に近いと云えよう。しかし出土土器には貼り付け凸帯文土器や多重沈線文土器が中期初頭（畿内第Ⅱ様式期始め）頃の土器とともに出土しており、低地部への人々の進出時期を示唆していると云えよう。もちろんそれは従来からの指摘どおり前期古段階には遡り得ないものであることも示唆するものである⁽¹⁾。

生活の基盤である稲作農耕は海水の影響下での生産は望めない。稲作適地の選択には真水の供給と水捌げが重要な条件となる。直時さが主流と考えられる技術水準によって海水の影響を受ける立地条件での生産は絶望的である。狭小な可耕地のもとでは生産の規模は限られる。生活のための不足を漁労に求めることは十分に考えられる。あるいは母村たる四ッ池集落に求めたかもしれない。比較的立地条件の良い四ッ池集落の生産性と比較して、この時期技術的な差もなく、余剰生産性は考えがたい。すなわち生産基盤に裏打ちされた規模の集落が存在したであろうことは想像に難しくなく、浜寺元町遺跡の集落は脆弱な生産基盤のもとに成立した集落と考えられる。集落の規模や稲作生産地の確認など現時点では不明な部分が多く今後の課題として残る。

土器の出土状況を見てみると中期後半期のものが多い。石津川中流域への弥生集落の遡上は中期からとされており、四ッ池台地集落の統合と稲作技術の向上により可能となったと考えられている⁽²⁾。浜寺元町遺跡での弥生集落の出現は遡上前の四ッ池台地上の集落の拡大・拡散と考えられる。中期土器の増大は四ッ池遺跡集落の全盛期にあたり、浜寺元町遺跡での増加傾向は中流域への分村後の生産技術向上による生産性の拡充から来るものと考えられよう。

遺構・包含層から確実なものとしての弥生後期土器の出土はない。この傾向は石津川流域と同様な傾向を示す⁽³⁾。中期末から後期始めにかけて石津川上流域では高地性集落が現れ、流域全般の衰退現象としてとらえ得る。しかし四ッ池台地上には規模を縮小しながらも集落が存続したようである。浜寺元町遺跡に再び集落が出現するのは古墳時代にまたねばならない。5B区検出の堅穴住居の年代観では少なくとも石津川の形成した沖積低地上に立地する下田遺跡集落の出現時期⁽⁴⁾より遅れると考えられる。旧来の四ッ池台地上にはこの時期の拠点的な集落は見いだされておらず、低地部の地理的要衝を押さえた下田遺跡の優位性をもった集落の出現が地域支配の上で何を意味するかは今後の課題と云えよう。

古墳時代の始まりについては議論されるところであるが、便宜上布留式土器出現期を古墳時代の始まりとすれば、分析の結果から浜寺元町遺跡では古墳時代前期頃再び稲作が行われたと云えよう。このことは海水の影響下にあった土壌が、時間を経て、農耕生産に適した可耕地へと変換したことを示すものである。弥生中期末から後期前半にかけて石津川流域の変動が看守され、その要因の一つとして河川の氾濫が指摘されている。このことから自然環境の変化も十分に考えられるが、何よりも重要なことは鉄の普及などにより開墾や工具加工などを容易ならしめた結果、灌漑や水利などを通じた可耕地の開発という人為的な要因が考えられることである。

弥生時代中期に農耕技術の発達を背景に石津川を遡上した集落は後期後半から再び四ッ池台地周辺

部の低地へ回帰する現象が指摘されている⁶⁾。またこの間地的宗儀から天的宗儀への脱却行為としての農耕祭祀の象徴である銅鐸の埋納や破砕が行われ、その後土地開墾を容易ならしめた新たな農耕技術のもとでの流域の再編・再生が顕在化して行く時期にあたる。後期全般の様子は現時点であまり解っていないが、いわゆる庄内式期の集落の動態の解明はその過程を説き明かす鍵となる。

(註)

1. 壺田 直 『堺市 四ヶ池遺跡』 1969. 3 堺市教育委員会
2. 樋口 吉文 「まとめ」『四ヶ池遺跡』 1978 四ヶ池遺跡調査会
- 樋口 吉文 「まとめ」『四ヶ池遺跡発掘調査報告書』 1981 堺市教育委員会
- 池峯 龍彦 「石津川流域の弥生時代集落の動向—堺市四ヶ池遺跡を中心として—」
『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論集』 1993
3. 2に同じ
4. 報告書未発行
(財)大坂府埋蔵文化財協会の調査(1993年度)では田河川埋没の最終過程で、最古相の布留式土器を多量に包蔵する溝を検出している。土器の一括資料などから見て弥生中期(畿内第Ⅱ様式期)以降集落の断絶期があり、後期後半期から再び集落が現れる。
銅鐸の埋納行為もこの断絶期に行われた可能性が高く、四ヶ池集落そのものの命運をかけた祭祀行為であった可能性が指摘される。それは石津川下流域の大きな動向を予感させる。
2に同じ
5. 2に同じ

圖 版

遺跡遠景	1
遺構	2~18
遺物	19~43



遺跡遠景（東から）



遺跡遠景（西から）



1区 第1面全景(北東から)



1区 第2面全景航空写真



2区 東半部第1面全景(西から)



2区 東半部第2面全景(西から)



2区 西半部第1面全景(東から)



2区 西半部第2面全景(東から)



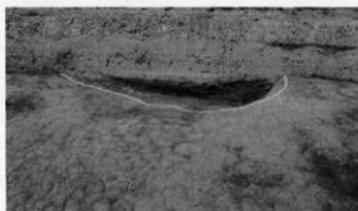
2区 2-6-OS全景(東から)



2区 2-6-OS内遺物出土状況(南から)



2区 2-6-OS内護岸杭列



2区 2-5-00全景(南から)



2区 2-6-OS内護岸杭列断割り



2区 噴砂砂脈



3区 第1面全景(東から)



3区 第4面全景(東から)



3区 第5面全景(東から)



3区 第6面全景航空写真



3区 第3面西端部
遺構検出状況(東から)



3区 第3面南東部
遺構検出状況(北から)



3区 第6面3-8-OS内
遺物出土状況



3区 南壁西端部土層断面



4区 第3面全景航空写真



5A区 第2面全景(東から)



5A区 第3面全景(東から)



5A区 第4面全景(東から)



5 A区 第5面全景航空写真



5 B区 第2面全景 (西から)



5 B区 第3面全景 (西から)



5 B区 第4面全景航空写真



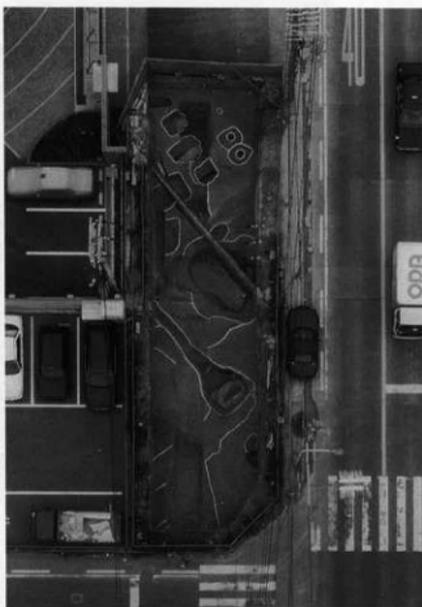
5 C区 第2面全景航空写真



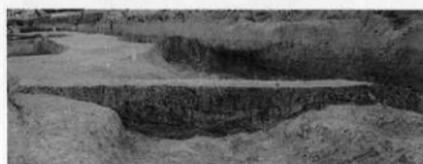
5 D区 第2面全景(東から)



5 D区 第3面全景(東から)



5 D区 第4面全景航空写真



5 B区 5 B-3-OS断面(北から)



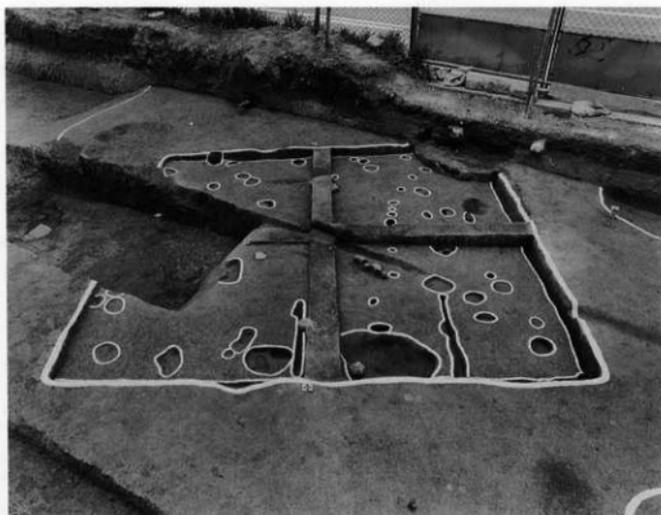
5 C区 5 C-1-OS断面(B区から)



5 A区 5 A-2-OW全景(北から)



5 C区 5 C-1-OS内遺物出土状況(B区から)



5B区 5B-5-OD全景(南から)



左: 5B区 5B-5-OD
内遺物出土状況(南から)



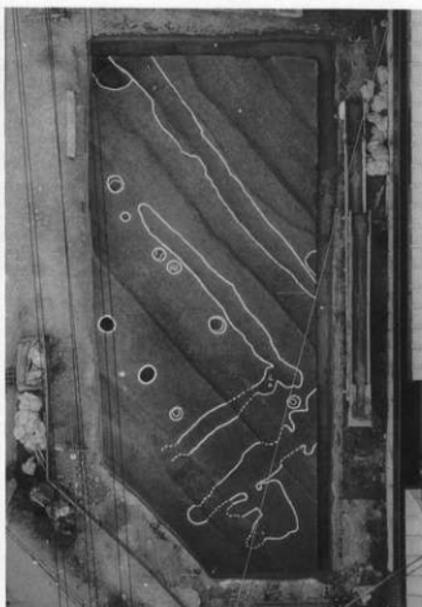
右: 5B区 5B-6-OO
内遺物出土状況(南から)



5B区 5B-6-OO全景(南から)



6区 第2面全景(西から)



6区 第3面全景航空写真



6区 第4面全景航空写真



6区 第5面全景(西から)



(上):
6区 6-12-OS
断面

(左):
6区 6-9-OP
内根石检出状况



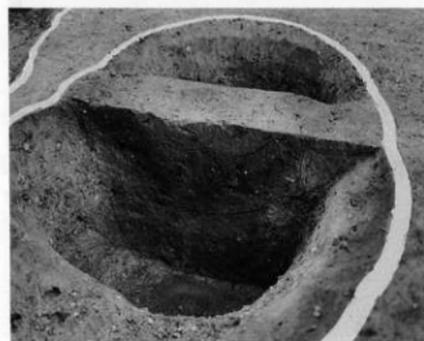
6区 6-7-OP内遗物出土状况



6区 6-13-OO全景



6区 6-14-OS断面



6区 6-13-OO断面



6区 最终面喷砂砂层



7区 第2面全景(東から)



7区 第3面東半部全景(東から)



7区 第4面全景航空写真



8 A区 第3面全景 (東から)



8 A区 第5面全景 (東から)



8 B区 第2面全景航空写真



8 B区 第5面全景航空写真



8 B区 8 B-4-OS断面 (西から)



8 B区 8 B-3-OS断面 (西から)

8 B区
8B-3-OS内
遺物出土状
況(東から)



8 A区 8 A-5-OS断面 (東から)

8 A区
第6面
8A-6-OR内
遺物出土状
況(南から)





9区 第1面全景 (東から)



9区 第2面全景 (東から)



9区 第3面全景 (東から)



9区 第4面全景航空写真



10区 第1面全景（東から）



10区 第2面全景（東から）



10区 第3面全景（東から）



10区 第4面全景航空写真



10区 第5面全景（東から）



10区 第5面南西隅部落ち込み断面（北から）



10区 10-4-O S断面（西から）



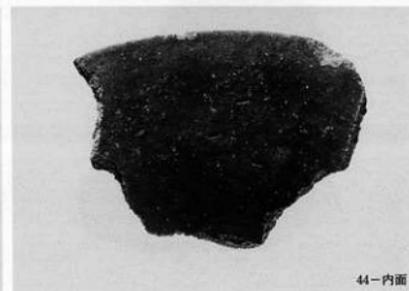
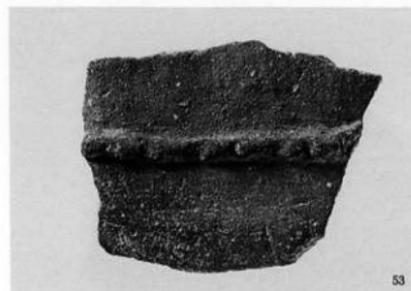
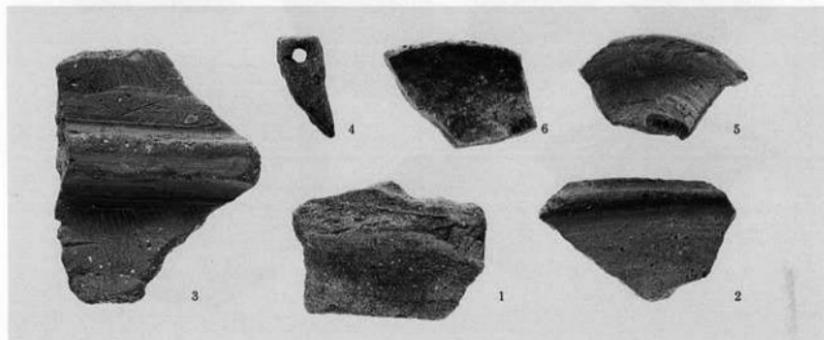
10区 10-2-O S全景および断面（西から）

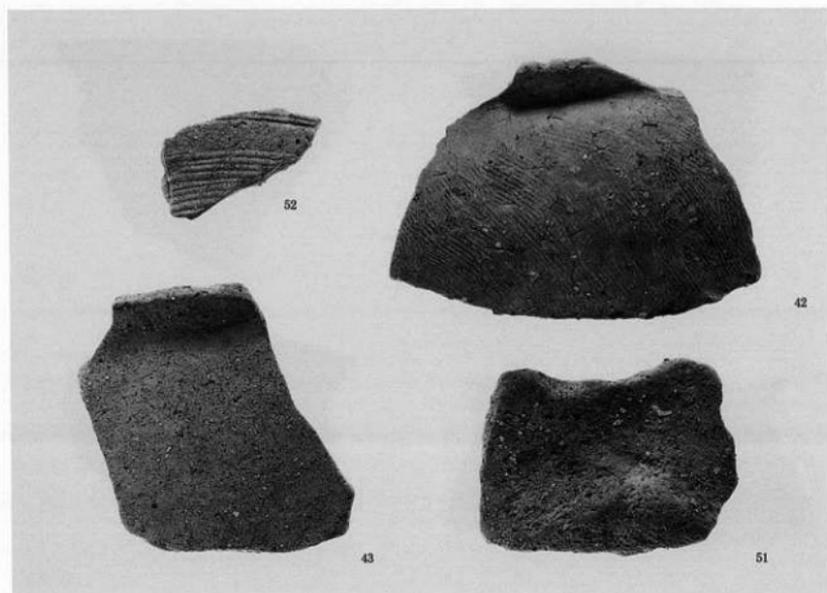
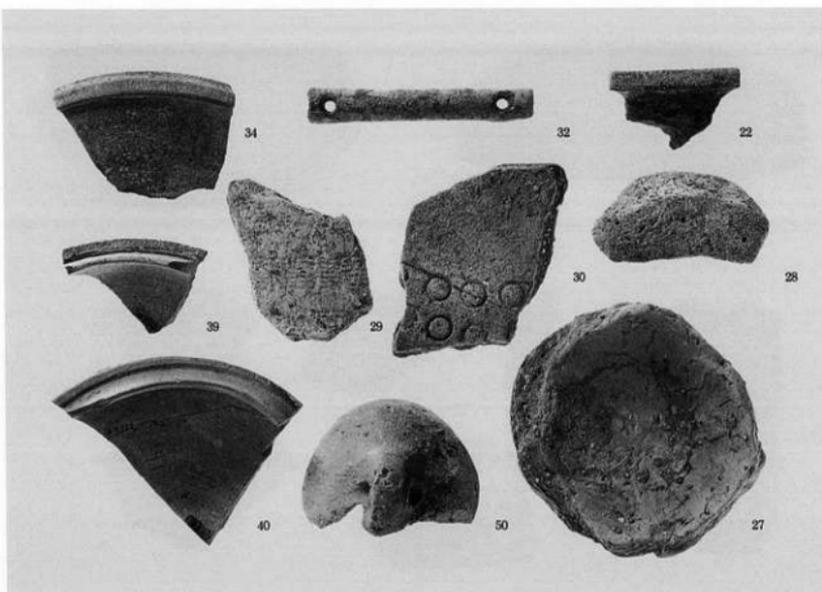


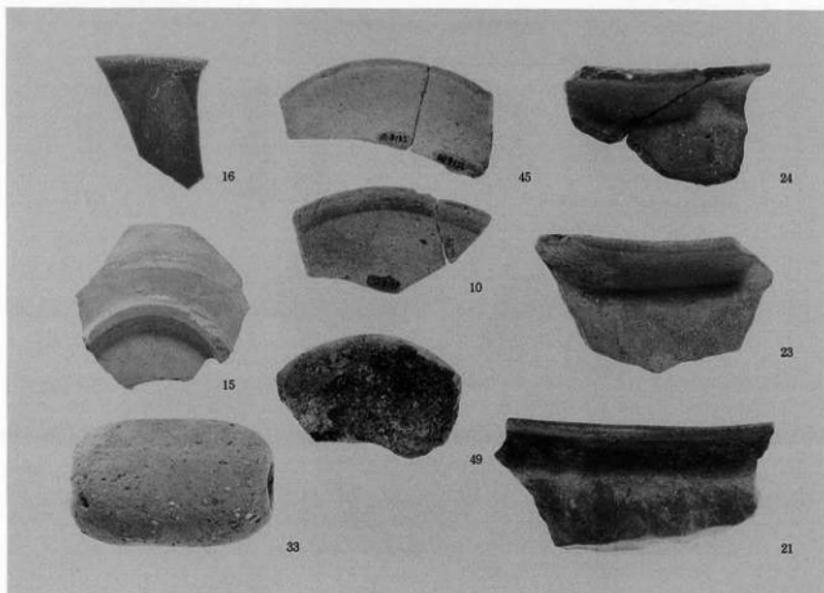
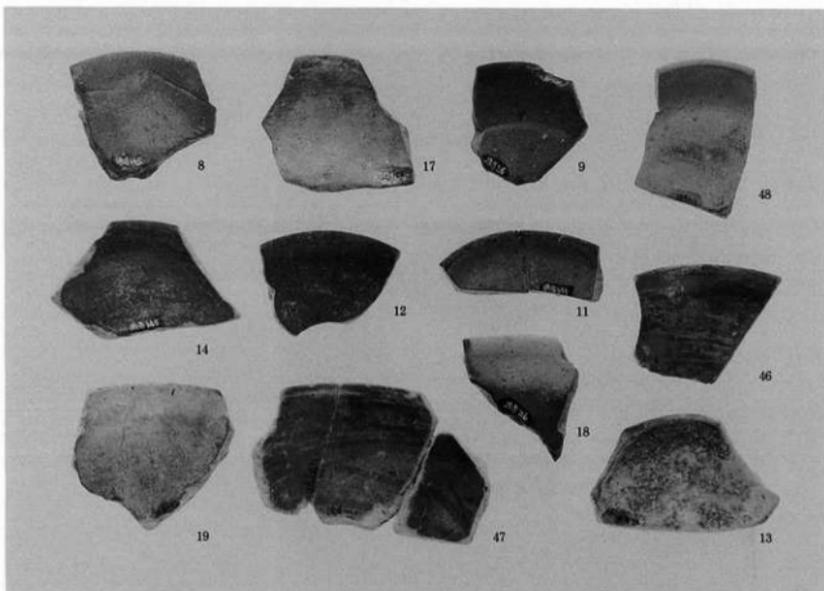
10区 10-4-O S内遺物出土状況

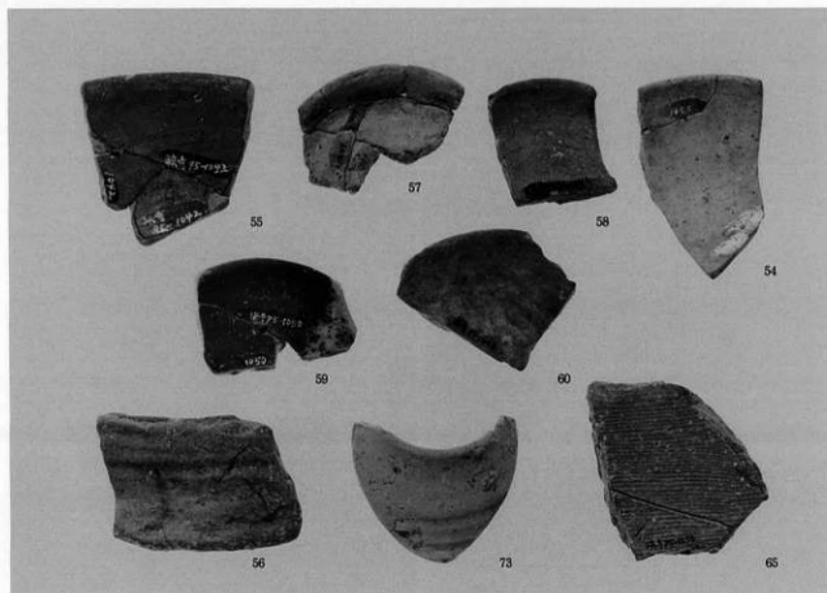
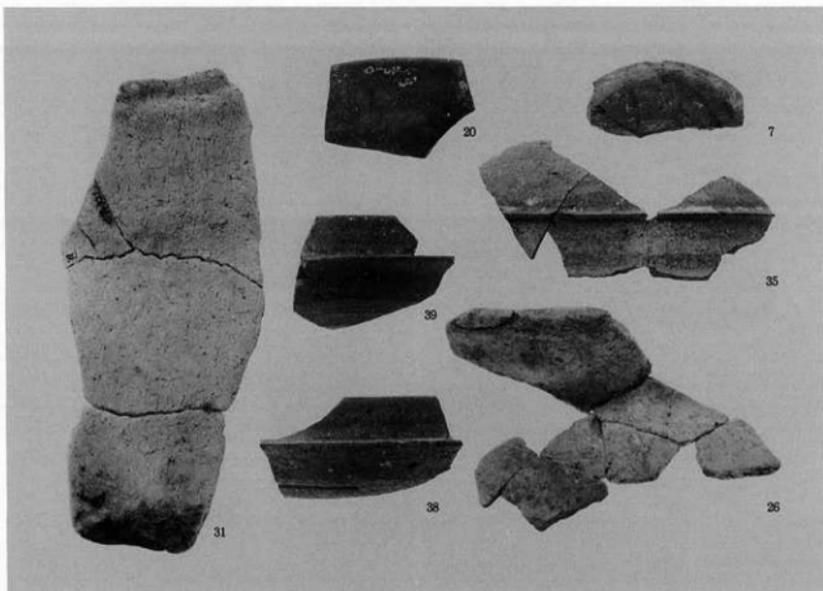


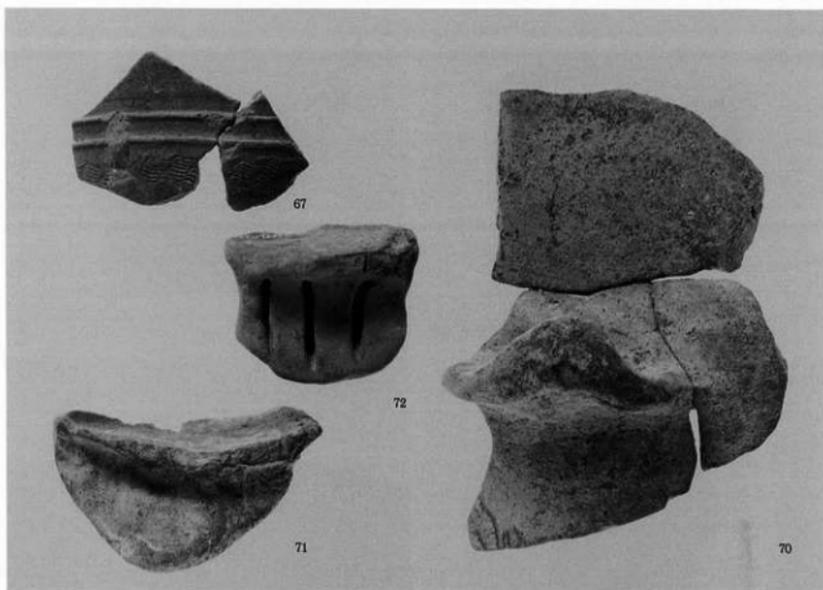
10区 10-4-O S内遺物出土状況

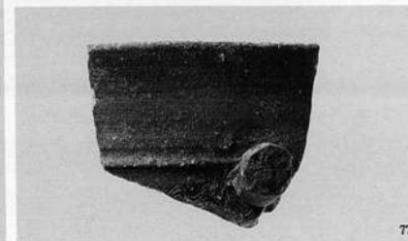
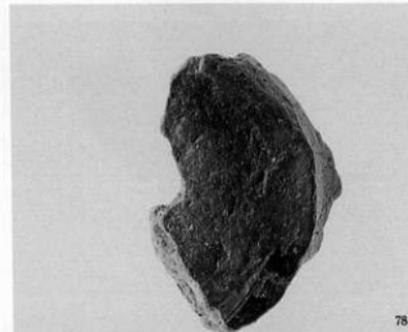
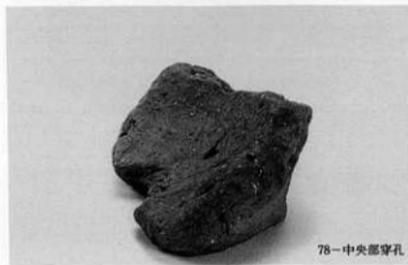




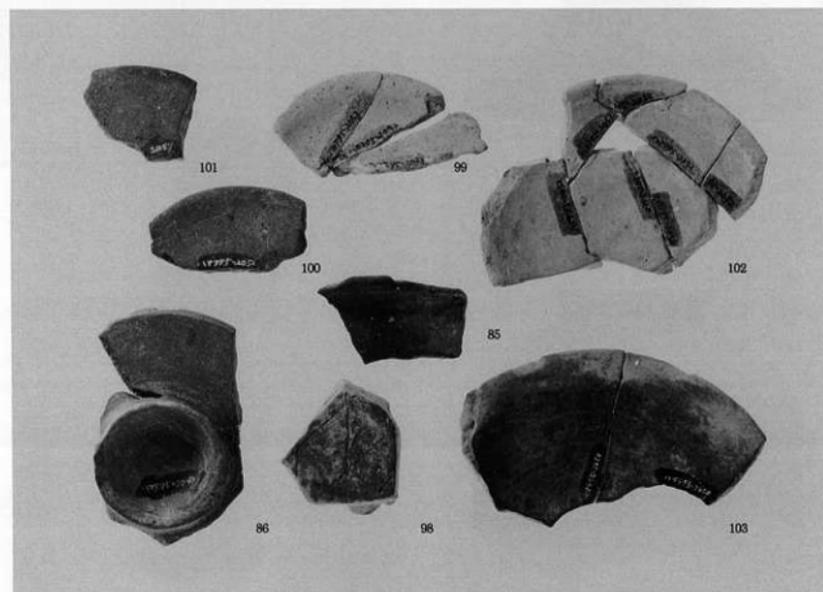
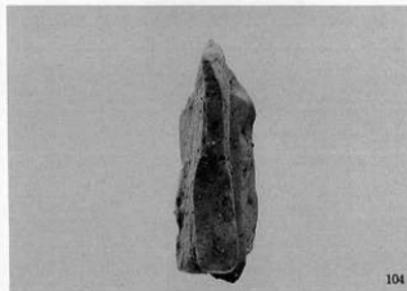


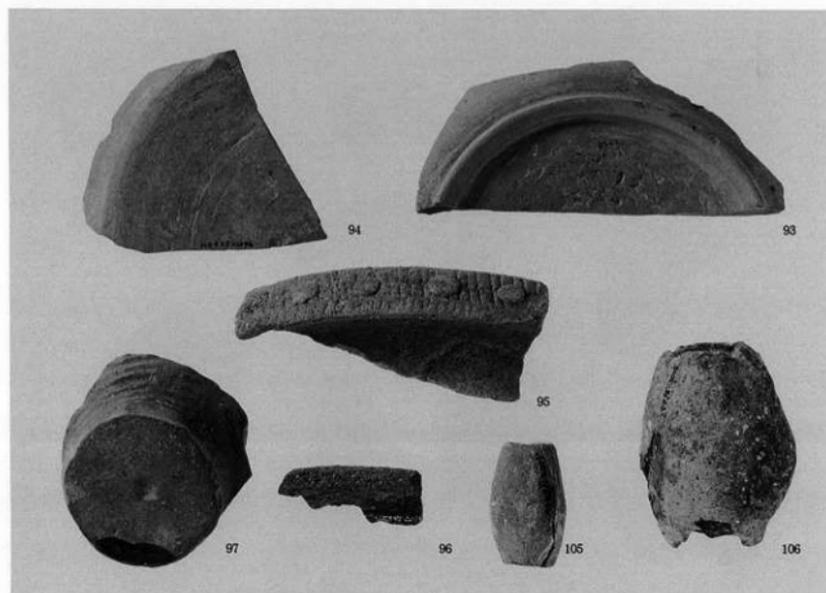
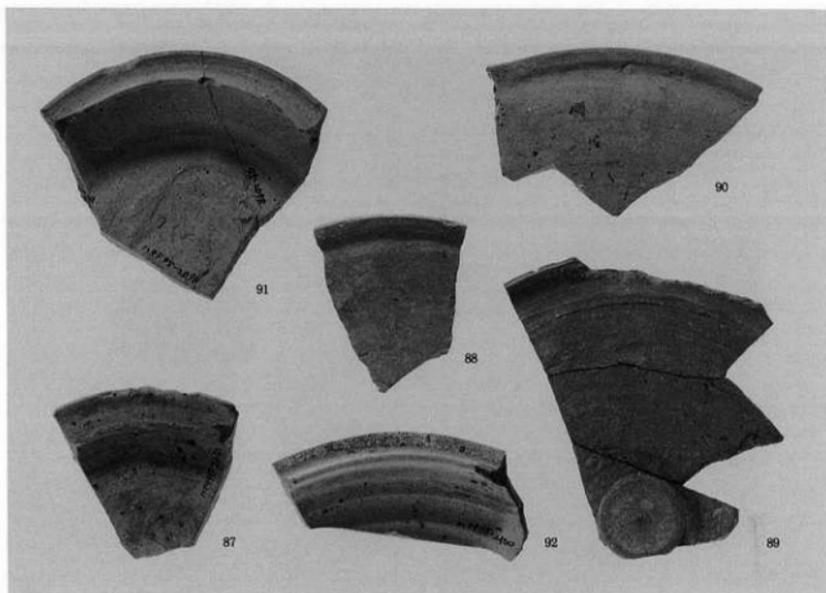


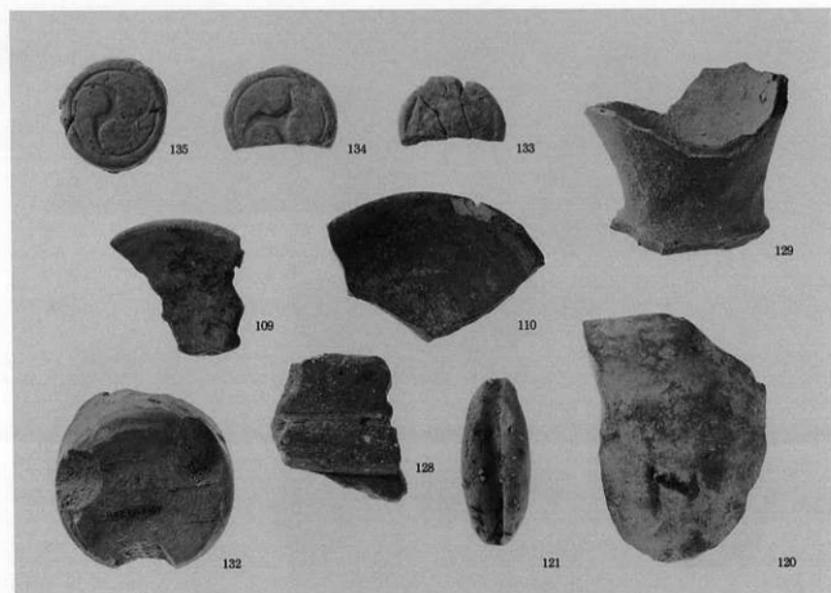
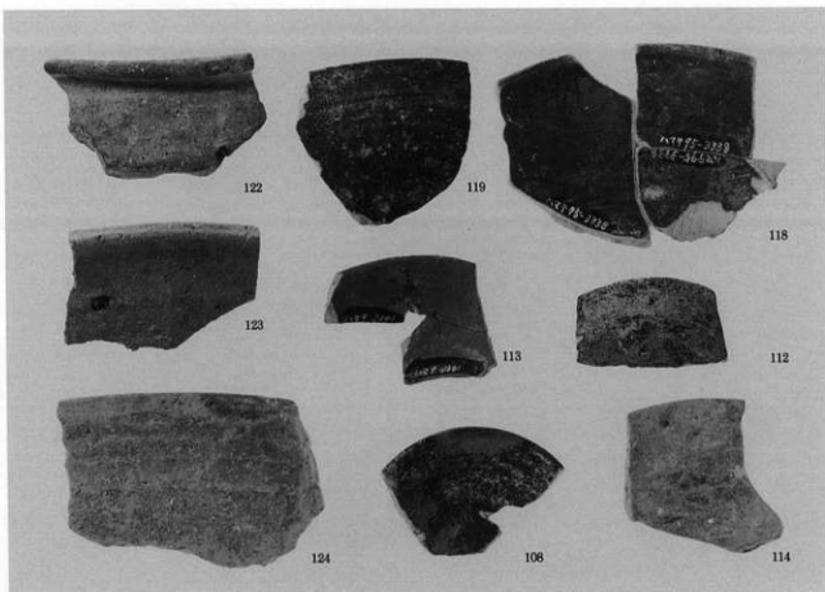














141



143



138



144



137



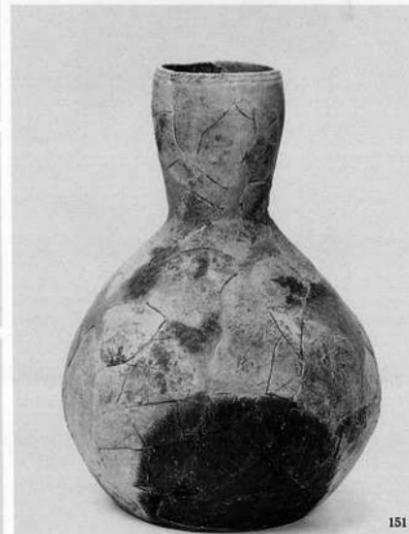
136



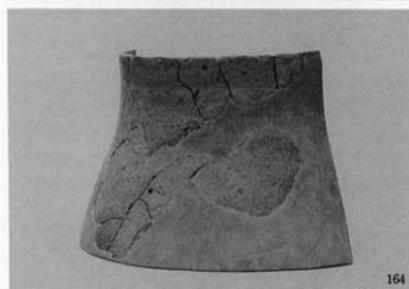
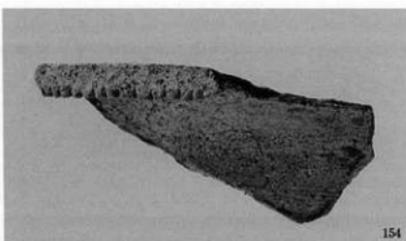
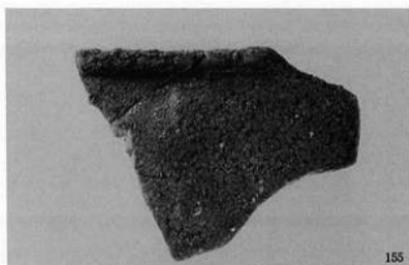
152

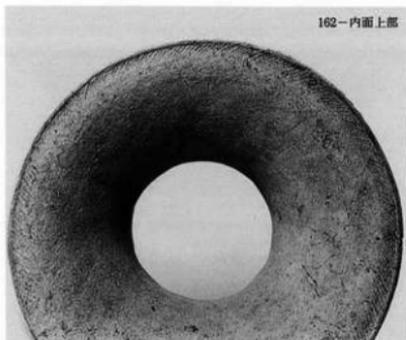


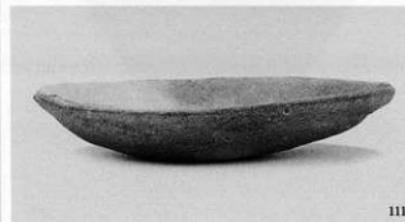
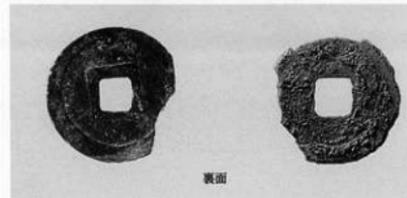
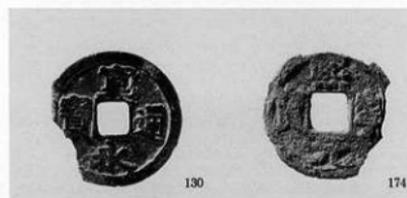
148

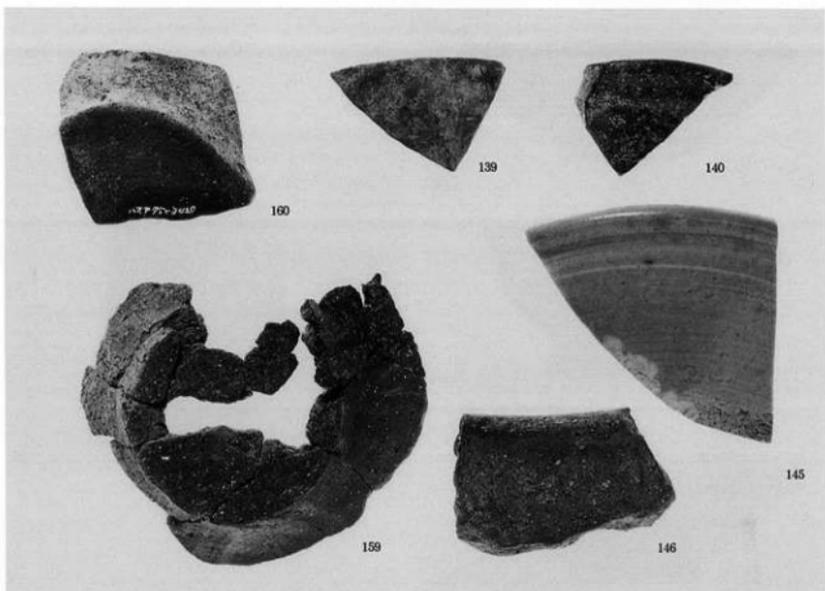


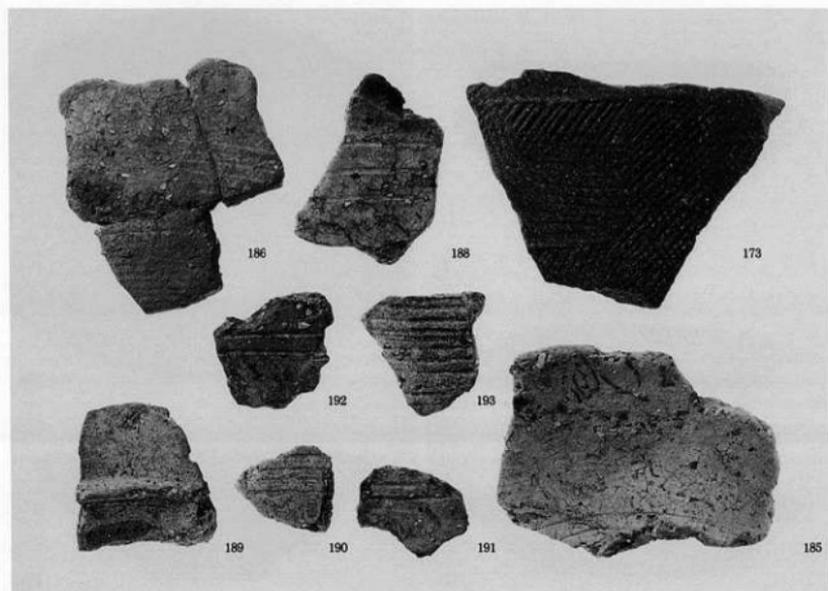
151

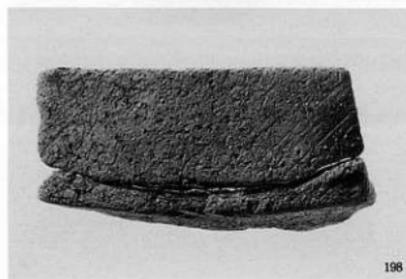
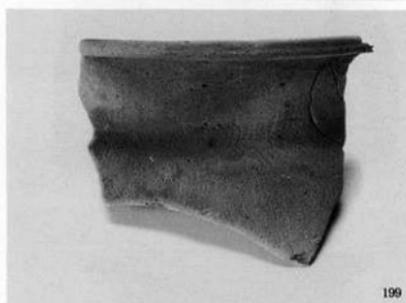
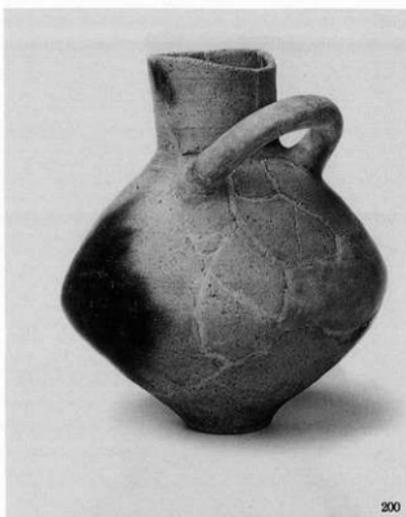
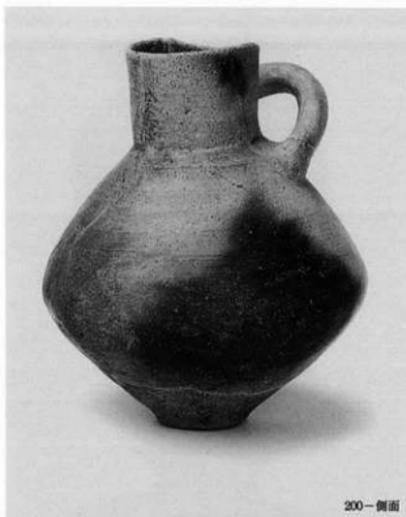




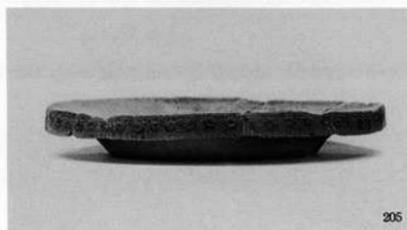
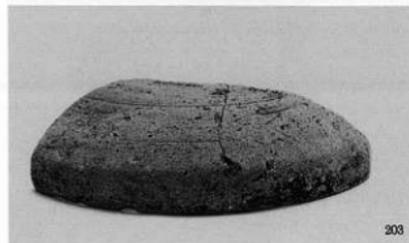
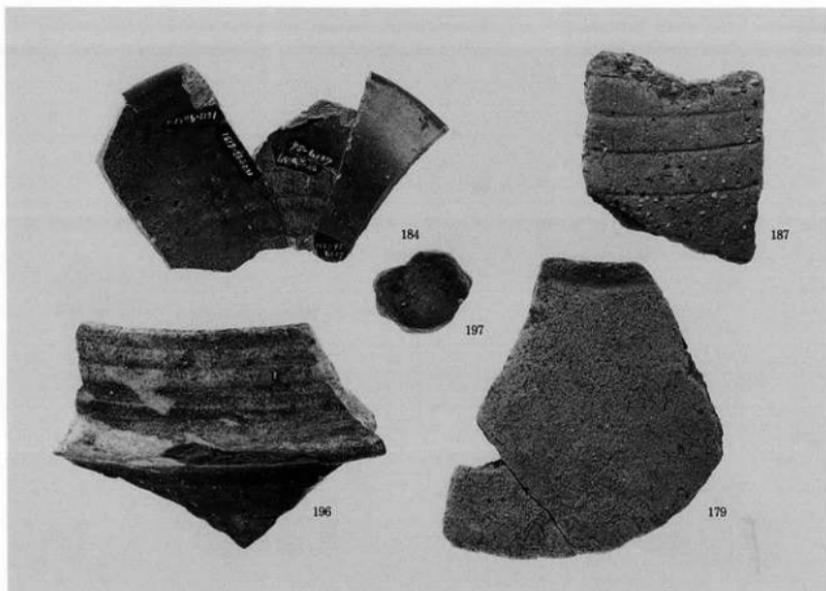


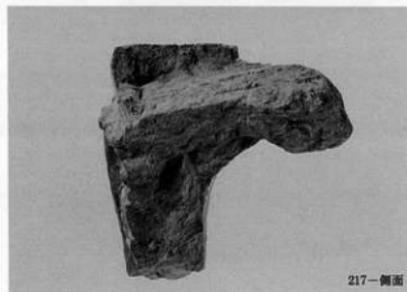
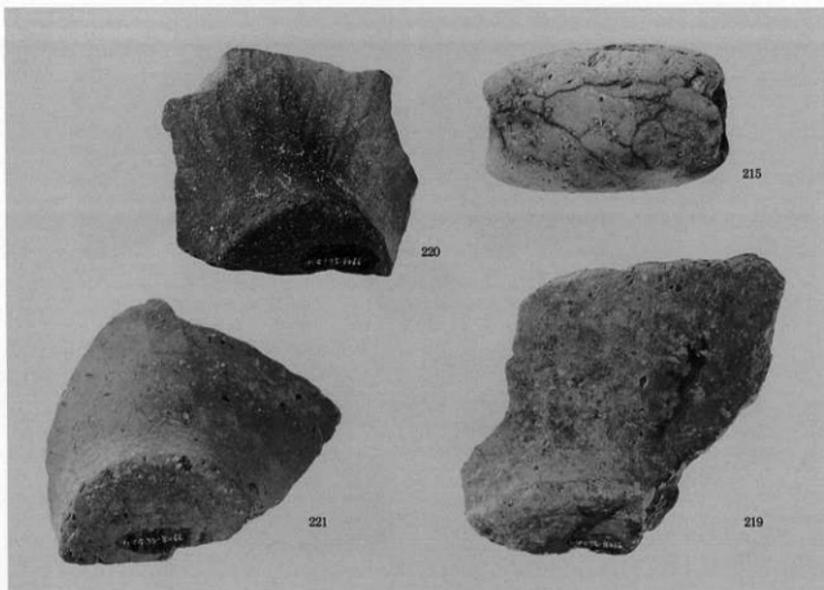




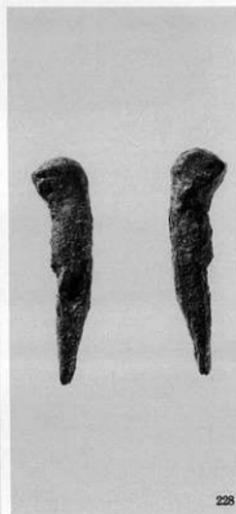
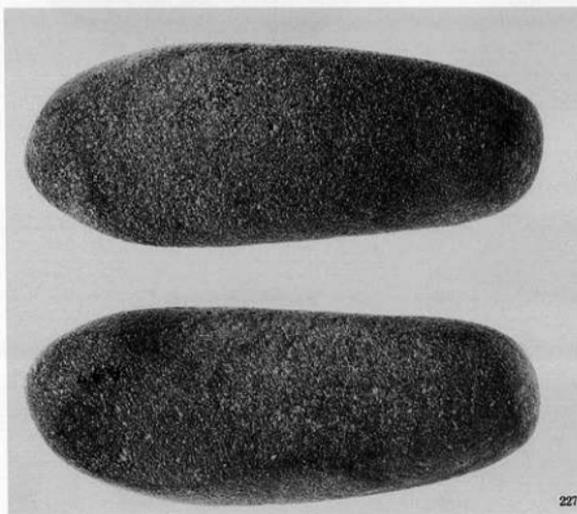
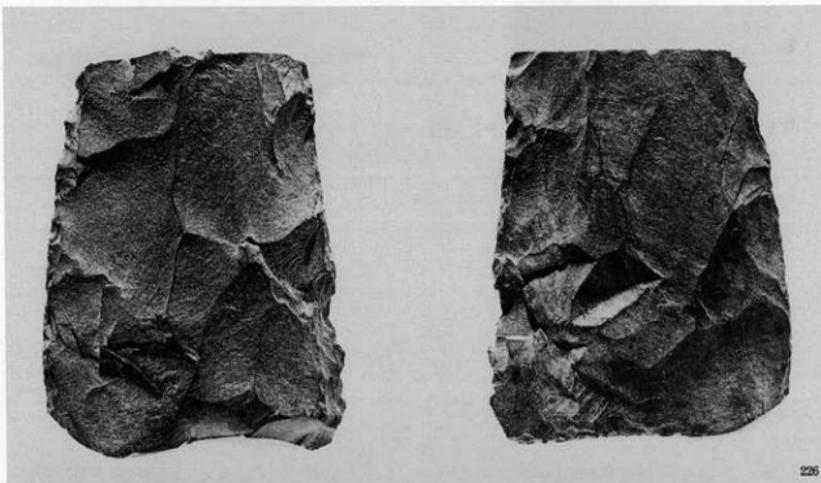
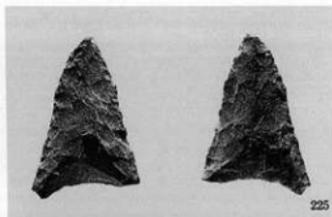
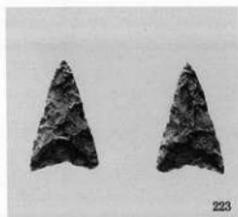


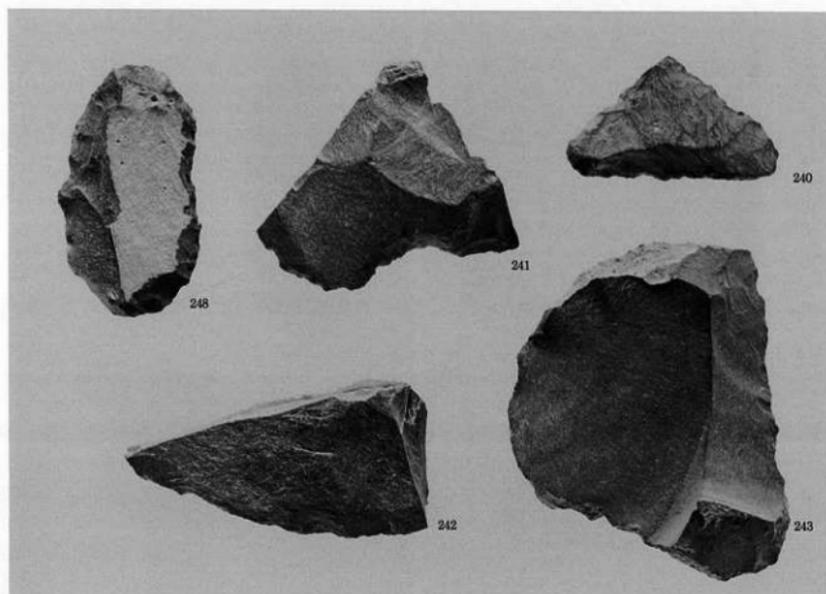
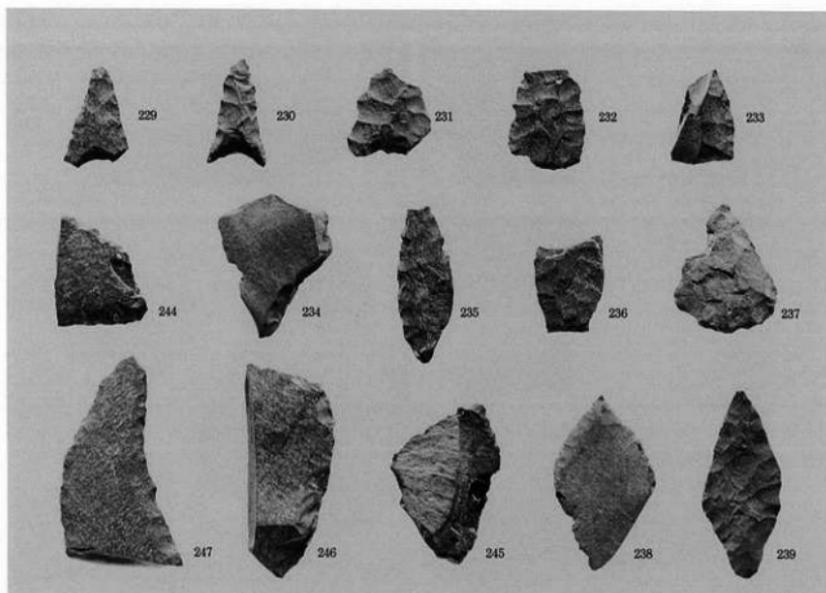


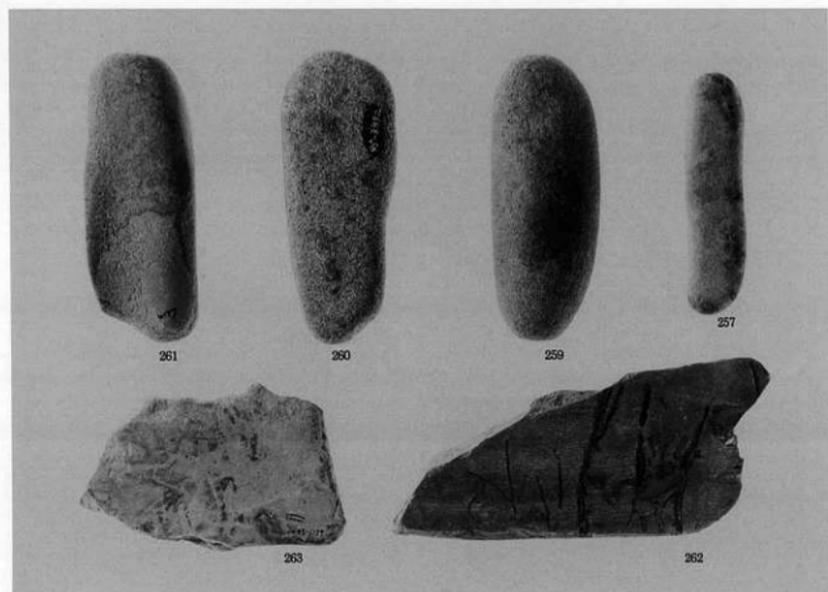
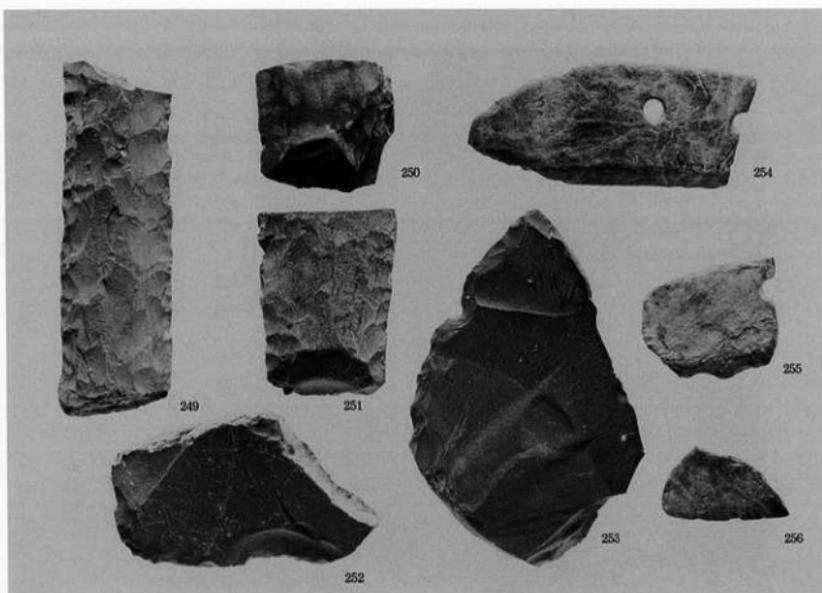






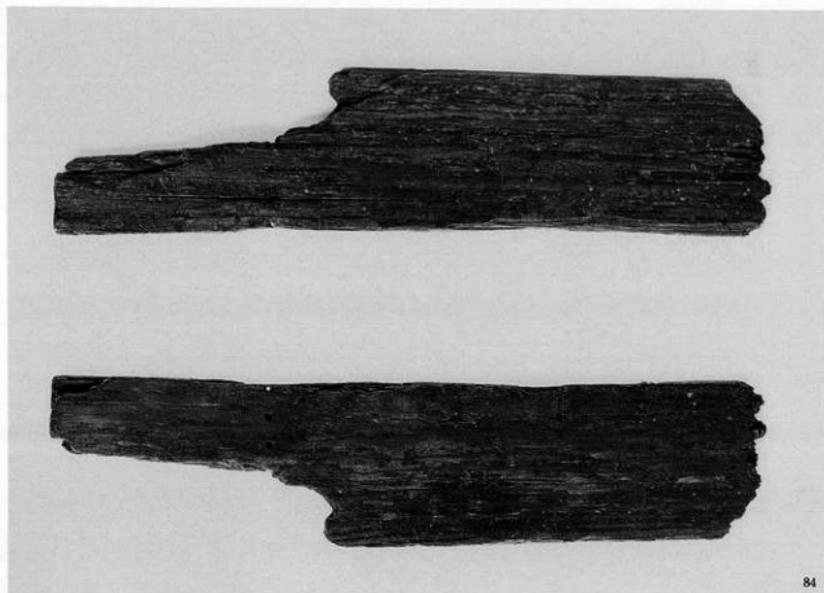








258



84

報告書抄録

ふりがな	はまでらもとまちいせき							
書名	浜寺元町遺跡							
副書名	都市計画道路常盤浜寺線改良工事に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	財大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第17集							
編著者名	仁木昭夫							
編集機関	財大阪府文化財調査研究センター							
所在地	〒536 大阪市城東区蒲生2丁目11-3 小森ビル4階							
発行年月日	平成8年11月30日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はまでらもとまち 浜寺元町	大阪府 堺市浜寺元町 船尾西	27201		34°31'50"	135°27'51"	平成7年3月16日 7年7月20日 平成7年8月1日 8年3月25日	約2,500㎡	都市計画道路常盤浜寺線改良工事に伴う事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
浜寺元町	宅地	弥生 前期新段階 から中期	溝 他		弥生土器 石器		貼り付け凸帯, 多重沈線文	
		古墳前期	竪穴式住居 溝 他		古式土師器 (布留式土器) 土師器, 須恵器		ベツト状遺構なし	
		古代	溝		土師器, 黒色土器			
		中近世	耕作関連溝群		土師器, 瓦器			

浜寺元町遺跡発掘調査報告書

発行年 平成8年11月30日

発行所 財大阪府文化財調査研究センター

大阪市城東区蒲生2丁目11-3 小森ビル4階

☎ 06-934-6651

1870

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...